

ファカティリンケージ・プログラム Faculty Linkage Program

社会的ニーズに直結した、多彩な「学びの場」

活動報告書

2015年度

中央大学全学連携教育機構

FLP 2015年度 活動報告書の発刊に寄せて

2015年度ファカルティリンケージ・プログラム「—Faculty-Linkage Program—」(通称 FLP)の活動報告書が、ここに完成しました。

FLP は、総合大学として確固たる実績と伝統ある中央大学だからこそ構築できる全学横断的な学修システムです。現在開講の5プログラム(環境、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ・健康科学、地域・公共マネジメント)の担当教員は、中央大学に置かれるすべての学部並びに FLP の運営組織である全学連携教育機構から、それぞれの専門分野に応じてプログラム教育の担い手として構成されています。

学生諸君が所属する学部では学びきれない視点や活動を FLP は実践することを目指し、併せて、その結果をもって、さらに所属学部での勉学を向上させるという、FLP は、まさに教育活動の相乗効果をも期待した教育プログラムといえます。そのため、学生諸君が担当教員と最も近い距離で学ぶ「ゼミナール方式」を中心に教育活動が展開されています。

FLP の3年間では、所属学部で修得した内容の向上、FLP でのゼミナール方式による教育の実践と担当教員からの直接指導、ゼミ生同士のふれあいと切磋琢磨といったことを通じて、研究テーマの深化のみならず、全人格的な涵養も修めることができると申し上げます。

「FLP 活動報告書」は、学生と担当教員のこうした教育実践の記録です。

ここに表現されている内容は、ごく一断面でしかありません。この内容以上の教育的成果と学生諸君の達成感がこの冊子には無限に詰まっています。

ご高覧いただく皆様におかれましては、表現し切れない担当教員や学生諸君の思いに幾ばくかの思いをはせていただければ幸甚に存じます。

改めまして、FLP に対し、なお一層のご理解とご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、この活動報告書をまとめるに際し多大なご尽力いただきました関係各位への御礼をこの場をお借りして申し上げる次第でございます。

2016年吉日

中央大学全学連携教育機構
機構長 石川 鉄郎

目次

目次	2
I. 環境プログラム	5
1. 設置の趣旨と教育の目的	5
2. 2015年度演習科目担当者および履修者数	6
3. プログラムスケジュール	6
4. プログラムの活動	7
5. 2015年度までの環境プログラム修了生の主な就職・進学先	8
6. 演習教育活動	9
(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)	9
(2) 中澤 秀雄 (法学部・教授)	14
(3) ヘッセ・スティーヴン (法学部・教授)	16
(4) 星野 智 (法学部・教授)	18
(5) 佐々木 創 (経済学部・准教授)	19
(6) 田中 廣滋 (経済学部・教授)	22
(7) 藪田 雅弘 (経済学部・教授)	24
(8) 西川 可穂子 (商学部・教授)	26
(9) 大内 俊二 (理工学部・教授)	29
(10) 西田 治文 (理工学部・教授)	32
(11) ハリスン、ブライアン (総合政策学部・教授)	33
(12) 横山 彰 (総合政策学部・教授)	34
II. ジャーナリズムプログラム	37
1. 設置の趣旨と教育の目的	37
2. 2015年度演習科目担当者および履修者数	37
3. プログラムスケジュール	37
4. プログラムの活動	38
5. 2015年度までのジャーナリズムプログラム修了生の主な就職・進学先	38
6. 演習教育活動	39
(1) 臼井 敏男 (経済学部・客員講師)	39
(2) 鈴木 俊幸 (文学部・教授)	41
(3) 辻 泉 (文学部・教授)	43
(4) 松田 美佐 (文学部・教授)	46
(5) 市川 哲夫 (総合政策学部・兼任講師)	48
(6) 大橋 正和 (総合政策学部・教授)	52
(7) 松野 良一 (総合政策部・教授)	56
(8) 松本 正 (総合政策学部・特任教授)	72

Ⅲ. 国際協力プログラム	75
1. 設置の趣旨と教育の目的	75
2. 2015年度演習科目担当者および履修者数	76
3. プログラムスケジュール	76
4. プログラムの活動	76
5. 2015年度までの国際協力プログラム修了生の主な就職・進学先	77
6. 演習教育活動	78
(1) 林 光洋 (経済学部・教授)	78
(2) 中迫 俊逸 (商学部・教授)	85
(3) 平澤 敦 (商学部・教授)	91
(4) 新原 道信 (文学部・教授)	94
(5) 崎坂 香屋子 (全学連携教育機構・特任准教授)	100
(6) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・客員教授)	116
(7) 野末 裕史 (全学連携教育機構・特任准教授)	125
(8) 三次 啓都 (全学連携教育機構・客員教授)	131
Ⅳ. スポーツ・健康科学プログラム	133
1. 設置の趣旨と教育の目的	133
2. 2015年度演習科目担当者および履修者	134
3. プログラムスケジュール	134
4. プログラムの活動	135
5. 2015年度までのスポーツ・健康科学プログラム修了生の主な就職・進学先	135
6. 演習教育活動	136
(1) 宮崎 伸一 (法学部・教授)	136
(2) 村井 剛 (法学部・准教授)	138
(3) 市場 俊之 (商学部・教授)	140
(4) 小峯 力 (理工学部・教授)	143
(5) 加納 樹里 (文学部・教授)	148
(6) 布目 靖則 (文学部・教授)	152
(7) 森 正明 (文学部・教授)	156
(8) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	158
Ⅴ. 地域・公共マネジメントプログラム	167
1. 設置の趣旨と教育の目的	167
2. 2015年度演習科目担当者および履修者数	168
3. プログラムスケジュール	168
4. プログラムの活動	169
5. 2015年度までの地域・公共マネジメントプログラム修了生の主な就職・進学先	169
6. 演習教育活動	170
(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)	170

(2) 石川 利治 (経済学部・教授)	175
(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)	177
(4) 斯波 照雄 (商学部・教授)	179
(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)	181
(6) 御船 洋 (商学部・教授)	188
(7) 植野 妙実子 (理工学部・教授)	195
(8) 新原 道信 (文学部・教授)	196
(9) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)	205
(10) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	211
(11) 小林 秀徳 (総合政策学部・教授)	216
(12) 堤 和通 (総合政策学部・教授)	217
(13) 細野 助博 (総合政策学部・教授)	219

I. 環境プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

気候変動問題は地球規模における異常気象をもたらし、これまで人類が経験したことがない自然災害に襲われる危険が高まっています。これは、地球上で特定の地域に限られることなく、誰もが損害を受けることを意味しています。自然の浄化能力を超える環境汚染、自然が再生できない資源の枯渇、多くの生物種の絶滅など、人間の生存基盤である地球・地域の生態系は危機的状況にあります。資源やエネルギーを大量に利用して物質的に豊かな生活を追求した人間の諸活動が、地球温暖化から身近なごみ問題までさまざまな環境問題を引き起こしています。経済社会のグローバル化は、地球規模での持続可能な社会の構築を求めています。われわれが環境問題に真剣に取り組み新たな知識を獲得して、技術革新の連鎖を呼び起こすことは、社会経済の活力の源となることも期待されています。こうした問題を解決するために、われわれの社会はどのような取り組みを必要としているのでしょうか。

環境・資源問題は人間活動の総体がもたらす問題であり、その解決には自然科学・社会科学・人文科学にまたがる学際的なアプローチが必要になります。地球温暖化問題の解決一つとっても、気候変化の観測・予測などに関する自然科学的知識が必要であるばかりか、経済・社会への影響や二酸化炭素などの温室効果ガスの排出をいかに抑制するのかの政策設計、開発途上国の経済発展や国際協定などに関する社会科学・人文科学的知識が必要になります。

さらに、二酸化炭素の排出の大半を占める化石燃料燃焼に代わる、原子力、さらには風力、太陽光、バイオマスなどの再生可能エネルギーに関する総合的な技術開発や、省エネ型住宅など都市およびそれを支える都市交通システムの構築などの脱温暖化の社会づくりには、文理融合的な自然科学・社会科学の教育とともに、人々のライフスタイルなど価値形成にも関連した歴史・文化・哲学などの人文科学の教育を受けた人材が求められています。

また、市場経済システムの中心的な活動主体である企業が、環境保全についての社会的責任を認識して積極的な取り組みを行っている今日、標準・モニタリング・評価や環境会計・環境監査・環境報告書などに関する環境経営および社会会計や国際会計などの知識をもった人材や、製品などのライフサイクル全体の環境負荷の最小化を目指すエコデザインなどの知識を持った人材、さらには環境保全活動を営利活動に結びつけることができるような企業家精神を持った人材が求められています。

以上から、環境に関する体系的で学際的な教育工房としての「環境プログラム」の意義はたいへん高いと考えられます。広い視野を持って、持続可能な経済社会の実現を目指して環境・資源問題に取り組もうという意欲をもった学生の参加を期待しています。

2. 2015年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
牛嶋 仁	法	3	5	4	環境A・B・Cと地域・公共A・B・C全て合併
中澤 秀雄	法	7	4	5	A・B・C合併
ヘッセ、スティーヴン	法	-	-	4	C単独
星野 智	法	2	-	-	A単独
佐々木 創	経済	2	4	9	A・B合併、C単独
田中 廣滋	経済	2	4	-	A・B合併
藪田 雅弘	経済	-	6	-	B単独
西川 可穂子	商	2	-	-	A単独
大内 俊二	理工	2	-	1	A・C合併
西田 治文	理工	2	1	2	A・B・C合併
ハリスン、ブライアン	総合政策	1	-	1	A・C合併
横山 彰	総合政策	-	4	9	B・C合併
合計		23	28	35	

※上記履修者に加えて留学中の者が1人いる

3. プログラムスケジュール

- 4月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 6月 2016年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7月 第二回部門授業担当者委員会
- 10月 2016年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
学内活動（オープンゼミ）
- 11月 2016年度募集に伴う選考試験
第三回部門授業担当者委員会
- 12月 学内活動（期末成果報告会）
- 1月 第四回部門授業担当者委員会
- 3月 FLP修了発表
FLP修了証書授与

4. プログラムの活動

<学内活動>

①オープンゼミ

実施日： 2015年10月12日（月）16:40～18:10

担当者名： 星野 智（法学部）

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 2808 教室

実施内容： 「地球環境と政治経済学」

経済発展は環境をよくするのだろうか。貧困は環境軽視をもたらすのであろうか。環境に負荷を与えているのは、貧しい者か豊かな者か。こうした問題を考えるために、J・クラブ/P・ドーヴァーニュ『地球環境の政治経済学』を参考にして議論を進める。

実施日： 2015年10月14日（水）18:15～19:45

担当者名： 田中 廣滋（経済学部）

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 7715 教室

実施内容： 「企業の環境・社会・ガバナンスへの取組」

今回のゼミではESG(Environment・Society・Governance)に関する学習と9月のロンドンシティーでの海外研修の成果の報告を行った。Aゼミ生が自動車メーカーの環境対応策をVWショックをテーマを中心に論じた。Bゼミ生はESGを推進するロンドンのシンクタンクの活動とシティーの変遷、新しい金融センター、キングスクロス駅での都市再開発がどのようにしてESGが活かされているかを説明した。

実施日： 2015年10月15日（木）18:15～19:45

担当者名： 藪田 雅弘（経済学部）

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 21103 教室

実施内容： 「景観形成と観光展開の課題をめぐって」

FLP 演習で行っている景観形成と観光展開について、栃木市をフィールドに研究を進めている様子を見学していただき、実際の演習を実感してもらう。

②期末成果報告会

実施日： 2015年12月5日（土）9:15～

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 3355 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. 2015年度までの環境プログラム修了生の主な就職・進学先

東北電力、トヨタ自動車、三井住友銀行、三菱UFJ東京銀行、住友信託銀行、三菱UFJ信託銀行、日本放送協会（NHK）、河北新報社、博報堂プロダクツ、リクルート、INAX、小松製作所、シャープ、東芝、住商スチール、住友重機械エンバイロメント、日立ビルシステム、富士ゼロックス、富士通、住友林業、日本電設工業、千代田化工建設、日本工営、住友化学、三井化学、凸版印刷、資生堂、イトーヨーカ堂、JTB法人東京、エイチ・アイ・エス、小田急箱根ホールディングス、ヤマト運輸、新日本有限責任監査法人、国家・地方公務員（農林水産省、公正取引委員会、会計検査院、北海道庁、東京都庁、埼玉県庁、岐阜県庁、日野市役所、習志野市役所など）、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、上智大学大学院地球環境学研究科、筑波大学大学院生命環境科学研究科、慶應義塾大学法科大学院、中央大学法科大学院、中央大学大学院（経済学研究科、理工学研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

国境を越える環境法政策と地域・国際協力の諸問題

<授業の概要・活動内容>

環境法政策を素材に、社会における法の機能や公共政策の形成・実施等を事例により主体的に学んだ。

演習では、グローバリゼーションとその地域との関係に焦点をあて、動態的な環境法政策の理解を深めた。そのため、海外研修（以下記載のタマサート大学との合同セミナーおよび実地見学・実態調査）を行った。

対象テーマは、担当教員と相談した上で、受講者が決定し、A、Bゼミについては、中央リニア新幹線建設に関する環境アセスメントを対象とした（海外研修に参加しない場合には、個人研究を行った）。Cゼミについては、エコツーリズムを中心とするCゼミ単位の調査研究および個人研究を行った。

春学期には、海外研修での英語による報告の準備、夏季休暇には、研修先に関する社会経済歴史と危機管理に関する研修、研修後の秋学期には、その推敲、報告、まとめを行った。

これら詳細は、2015年度 FLP 環境プログラム牛嶋ゼミ報告書に記載されている。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年9月2日(水)～9月6日(日)

実施都市： バンコク（タイ）

実施施設： タマサート大学他

実施内容： 2015年度 FLP 環境プログラム牛嶋ゼミ報告書参照。

成果： 2015年度 FLP 環境プログラム牛嶋ゼミ報告書参照。

対象演習： 演習C

実施日： 2015年12月5日(土)

実施都市： 埼玉県飯能市

実施施設： 古民家ひらぬま

実施内容： 埼玉県名栗市の「古民家 ひらぬま」において燻製作り体験。自分たちで燻製を作り、それを試食。

成果： エコツアー体験により、ゼミ論文作成の素材とした。また、現地の方々への聞き込み調査により、地域でのエコツアー実施の課題を抽出することができた。

対象演習： 演習C

実施日： 2015年12月6日(日)

実施都市： 東京都文京区

実施施設： 東京大学

実施内容： 東京大学本郷キャンパスにおいて、第7回エコツーリズムシンポジウムに参加。
オーディエンスとして発表を聴講。

成果： 発表の聴講、海津ゆりえ教授（文教大学。立教大学にてエコツーリズムの授業を実施している）へのインタビューにより、エコツーリズムの知識を深め、論文作成に役立てた。

今年度は、2010年度ベルギー・パリ研修、2014年度シンガポール研修に続き、バンコク研修を行った。

<バンコク研修実施概要>

1. 研修の目的

本海外研修は、本学学生がタイ・タマサート大学学生と合同セミナーを開催するとともに、バンコク所在施設を訪問することにより、学生の知見と経験を深め、環境法政策及びの学習効果を向上させるために行った。

2. 研修の意義

タマサート大学は、本学と交流協定がある他、本学事務所もおかれているなど本学と関係の深い大学である。今回の本学学生の訪問は、同大学 Narong Jaiharn 法学部長、Naphat Sorrat 法学部長補佐（本学大学院卒業）、Amnat Wongbandit 教授（環境法）の援助により実現した。今回の訪問により、本学と同大学との関係がますます進展したと考えられる。

研修では、タマサート大学訪問の他、研修概要記載（下記4参照）のとおり、バンコク所在施設4箇所（国連機関、国際環境NGO、日本政府関係機関2箇所）を訪問し、その経験も、学生にとっては、今後の学習を進める上で、貴重な経験になったと考えている。

特に、国連機関は、タマサート大の学生も参加し、合同での企画となった。

3. 研修前後の学修計画と効果

本研修は、学内外の各種プログラムとの相乗効果により、学生のコミュニケーション能力や基礎学力について、加速度的成長を期待している。

4. 研修概要

（1）タマサート大との合同セミナー

合同セミナーは、日本とタイとの比較および共通課題を念頭にテーマを環境法政策として、2つのテーマ（水素エネルギー（法学部ゼミ）、環境アセスメント）に分け、本学学生とタマサート大の学部・大学院生が、タマサート大において、それぞれ報告、議論を行った。

合同セミナーに先立ち、タマサート大法学部長、学部長補佐の挨拶のほか、タマサート大の Wongbandit 教授と私が各々日泰両国の環境法制度について簡単な講義を行った。本学学生にとっては、Wongbandit 教授の講義が得がたい経験になった。なお、昼食時には、タマサート大出身の Suntariya Muanpawong 裁判官によるスピーチが行われた。

使用言語は、すべて英語とし、必要に応じて、引率教員が通訳した。

合同セミナーには、上記教員と私以外に、タマサート大法学部専任教員やタマサート大出身他大学教員が参加した。

タマサート大からは、教室の準備、お茶の提供、夕食の提供を無償で行っていただいた。これに対して、本学は、プロトコールとして、参加者の支弁により、昼食会を開催、返礼した。

合同セミナー開催後は、タマサート大の招待によって夕食会が開催され、参加者間で広く交流が行われた。

(2) バンコク所在機関訪問

下記のとおり、在バンコクの国連アジア太平洋地域事務所 (E S C A P) ・国連環境計画 (U N E P) アジア太平洋地域事務所、IUCN (国際自然保護連合) アジア事務所、JICA 事務所、ジェトロ事務所を訪問して、各機関の職務およびその現状と課題について説明を受けた。

(3) 日程

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 9月2日未明 | 学生出発 (機中泊) |
| 9月2日 | 学生バンコク到着。IUCN 事務所、JICA 事務所訪問 |
| 9月3日 | JETRO、ESCAP、UNEP 訪問 |
| 9月4日 | タマサート大訪問 (合同セミナー) |
| | Thammasat University, Faculty of Law |
| | Dean Narong Jaiharin |
| | Professor Amnat Wongbandit |
| | Dr. Naphat Sorrat |
| | Judge Suntariya Muanpawong |
| | Ms. Teera Insawart (secretary) |
| 午前 | 学部長等挨拶、両校教授による講義、両校学生による報告と議論 |
| | 昼食会 (Suntariya Muanpawong 裁判官によるスピーチ) |
| | タマサート大学生の案内による学内ツアー |
| 午後 | 両校学生による報告と議論 |
| | タマサート大教職員との夕食会 |
| 9月5日 | 博物館等の見学。同日深夜、学生帰国へ (機中泊)。 |
| 9月6日早朝 | 学生帰国 |

5. タマサート大との合同セミナー・プログラム

別紙英文プログラム参照。

以上



**Thammasat-Chuo Joint Seminar on Environmental Law and Policy:
Comparison and Collaboration for the Global Sustainable Society**

**Thammasat University Faculty of Law
and
Chuo University Faculty of Law, Tokyo, Japan
at
Jitti Tingsabadh Room, First Floor
Faculty of Law, Thammasat University, Bangkok, Thailand**

Co-organized by Japanese Law Center, Thammasat University

4 September, 2015

- 09.00-09.15 Opening Ceremony
Welcoming Speech
Associate Professor Narong Jaiharu
Dean, Faculty of Law, Thammasat University
Acknowledgements
Professor Hitoshi Ushijima
Faculty of Law, Chuo University
- 09.15-10.30 Overview to the legal system & environmental law in Thailand
Professor Amnat Wongbandit
Faculty of Law, Thammasat University
Overview to the legal system & environmental law in Japan
Professor Hitoshi Ushijima
Faculty of Law, Chuo University
- 10.30-11.00 Coffee break

- 11.00-12.30 Environmental impact assessment in Thailand
 Public participation in an EIA Process in Thailand
 Mr. Suraporn Praditthao, Thammasat University
- Health Impact Assessment in Thailand
 Ms. Thamonwan Jitsong, Thammasat University
- Environmental impact assessment in Japan:
 The Case of Linear *Chuo Shinkansen* Line
 Students from Chuo University
- 12.30-13.30 Lunch
 Short Speech: Encouraging students to pursue legal profession
 Honorable Judge Suntariya Muanpawong
- 13.30-14.00 Campus tour by Ms. Pimvipa Kunanusorn and Mr. I Ting Liu
- 14.00-15.30 Renewable energy sources in Thailand
 Policies towards renewable energy sources development
 Ms. Pimvipa Kunanusorn and Mr. I Ting Liu,
 Thammasat University
 Legal measures for encouraging hydrogen power utilization
 Ms. Panchanit Sirisan, Thammasat University
- Renewable energy sources in Japan: Future of Hydrogen Car
 Students from Chuo University
- 15.30-16.00 Coffee break
- 16.00-16.30 Concluding Remarks:
 What can we share for the global sustainable society?
 Professor Amnat Wongbandit
 Professor Hitoshi Ushijima
- 18.00 Dinner

（２）中澤 秀雄（法学部・教授）

FLP演習A・B・C

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

<授業の概要>

持続可能な地域社会について考える際には、都市と農山漁村をセットで議論する必要がある。都市で十分生産できない資源である食やエネルギーを提供してきたのが農山漁村である。これまでこうした地域では過疎化が進み、地方財政の悪化とともに、「撤退」や「たたむ」という議論が行われている一方で、地域にある資源：森川里海の連環を強化して、新しい暮らし方がはじまっている場所も少なくない。農山漁村で十分ないのは、「仕事」であるが、その一つとして「観光、ツーリズム」があげられる。このゼミでは、「エコツーリズム」に着目し、また農山漁村のフロンティア地域として宮城県南三陸町や石川県能登半島を取り上げ、持続可能な地域社会について、現地の方から学び、一緒に考える。

<活動内容>

本ゼミは、能登半島で住民との交流を重視しつつエコツーリズムを体験学習し、持続的なビジネスとしてのエコツーリズムを企画する力をつけることを目標としている。エコツーリズムには様々な類型があるが、能登半島は身近な自然に人が働きかけて形成された里地・里山の多様性に魅力があり、能登の「人の実力」や「健康増進に有効な地域資源」を活用した新たな提案につなげたいと模索してきた。具体的な活動内容としてはエコツーリズムに関する文献の検討、日本エコツーリズム協会（JES）学生大会への参加とポスター発表、能登半島における夏・冬の体験学習、さらに秋学期には東京近郊の日帰りエコツーリズムの事例（奥多摩の国営山のふるさと村、日本自然保護協会インタープリテーション講座、エコツアーの町と銘打っている飯能市のツアーへの参加）への参加型調査を行った。

こうした活動と、授業での振り返りを通じてエコツアーに必要なスキル、プログラムデザインへの着眼、コンセプトの検討などを深めることができた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年8月18日(火)～8月20日(木)

実施都市： 石川県能登半島

実施施設： のと海洋ふれあいセンター

実施内容： （株）ぶなの森/能登定住交流機構の高峰博保氏（本学学員）にお世話になり、「能登暮らし体験の家」を拠点にしてエコツーリズム体験活動を行った。「暮らしの家」周辺地図の作成、鉢伏山での自然インタープリテーション体験、クロマジオイル作り、九十九湾での自然体験、アロママッサージ等を経験させていただき、また主宰者や移住者に簡単な聞き取りを行った。

成 果 : 能登という場所の特性について「里山と里海が近くに存在し密接に関係している場所、さらに移住者も含めて魅力的な能登人が住まう場所」と、自分たちなりの定義を行うことができた。来年度以降、FLP ゼミとして「能登でのエコツアーを企画実施する」という獲得目標を得た。

対象演習 : 演習 A・B

実 施 日 : 2016 年 2 月 17 日(水)～2 月 19 日(金)

実施都市 : 石川県能登半島

実施施設 : ぶなの森能登事務所

実施内容 : 夏と同様、(株)ぶなの森/能登定住交流機構の高峰博保氏(本学学员)にお世話になり、「ぶなの森能登事務所」を拠点にしてエコツーリズム体験活動を行った。初日は春蘭の里でのほうきづくり体験と能登事務所での雪遊び、2 日目は黒川集落歩きと岩井戸公民館での案山子づくり、3 日目は珠洲市木ノ浦でのクアの道歩き、木ノ浦ビレッジでの椿油しぼりを体験した。事務所に戻って簡単な振り返りも行った。案山子づくりについては公民館長はじめ地域の皆さんから喜んでいただき、5 月の猿鬼マラソンの際に沿道に設置する予定となっている。

成 果 : 学生が主体的に行程を設定し、地元との交渉を行うと同時に、何を目的にしてそれぞれの活動に参加するかという目的意識を持って活動に臨んだ。自然インタープリテーション能力の涵養、企画設定の背景や段取りについての考察、地域資源の展開可能性等について各人が考察し、4 月以降のゼミ活動にフィードバックするべき「気づき」の束を獲得したと言える。

(3) ヘッセ・スティーヴン (法学部・教授)

FLP演習C

<テーマ>

Advanced Study of International Environmental Issues:

Problems, Policies and Institutions With a Focus on Research, Discussion and Thesis Writing

Students in this course will undertake advanced critical and academic research and discussion of international environmental issues.

<授業の概要>

Students in this course will take a critical look at issues of the global environment. You will be expected to research, discuss, critically analyze, and present information at a high level. You will also do independent research using specialized academic sources, working closely with the teacher on topics of your own choice.

<活動内容>

From December 1st to December 4, 2015, three ヘッセゼミ FLP-C students visited Yakushima to do fieldwork related to their final year theses. They carried out hiking surveys of the island, visited local government offices, and interviewed local citizens and civil servants. The students prepared for two months before traveling to Yakushima, to ensure that they would be able to make effective use of their short visit to the island.

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習C

実施日： 2015年12月1日(火)～12月4日(金)

実施都市： 鹿児島県熊毛郡

実施施設： 屋久島

実施内容： From December 1st to December 4, 2016, three ヘッセゼミ FLP-C students visited Yakushima to do fieldwork related to their final year theses. They carried out hiking surveys of the island, visited local government offices, and interviewed local citizens and civil servants. The students prepared for two months before traveling to Yakushima, to ensure that they would be able to make effective use of their short visit to the island.

成果： Following their fieldwork and based on the information gathered during their visit to Yakushima, the students prepared several drafts of their graduation reports (thesis). These were first peer-checked, then

critiqued by the instructor, before the students completed their final drafts of their reports. The reports are being collated into a three-chapter report book.

(4) 星野 智 (法学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

環境政治について考える

<授業の概要>

環境政治についての基本的な文献を購読することを通じて、各国および地球社会に生じている環境問題への取組を研究する。

<活動内容>

星野ゼミは、前期は、デレク ウォール 『緑の政治ガイドブックー公正で持続可能な社会をつくる』 ちくま新書、2012 年をテキストとして使い、グローバル化時代のなかで、地球温暖化、オゾン層破壊など地球環境問題に対して取り組むための政治的なスタンスを学習するために、本書を参考に考察した。具体的には、世界に広がる緑の政治、温暖化する地球、緑の哲学とは何か、「欲求」でなく「必要」を満たす経済、生命のための政治、生き残りをかけた戦略などについて考察した。

後期は、J・クラブ他『地球環境の政治学』法律文化社、2008 年を使い、環境に関する 4 つの世界観（市場自由主義、制度主義、生物環境主義、ソーシャル・グリーン主義）を取り上げ、グローバル化による環境への影響、環境保護主義のグローバル化、富と貧困の世界での経済成長、国際貿易と環境、国際投資と環境、国際融資と環境、グリーンワールドへの道について考察した。

(5) 佐々木 創 (経済学部・准教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

リユース（再使用）について学際的に研究し、実践しながらリユース促進策を立案する

<授業の概要>

これまで日本の循環型社会の形成における政策・施策はリサイクル関連法令を中心に実施されてきました。しかし、平成24年4月に閣議決定された第四次環境基本計画において、「リユースに係るビジネスの市場につながるような環境を整備し、ライフスタイルの変革を目指す」ことが初めて言及されており、今後リユース関連施策が立案されることになると考えられます。

リユースの経済活動に着目すると、従来リユースは新規需要の抑制としてマイナスな活動として捉えられてきましたが、近年では新商品を取り扱う小売店が、売上の相乗効果があるとしてリユース商品を取り扱う事例が増えているなど変化しています。

また、リユースの環境負荷削減効果に着目すると、リユースをすることは新規投入資源や最終処分量の削減が見込める一方で、省エネ性能に劣る製品を長期使用することで環境負荷が増加します。

このようなリユースの経済的、環境的側面について学際的に研究を行うだけでなく、実際に施策や事業を実施している環境省、自治体、リユースショップ等へのヒアリング、また自らもリユースの取組を実践する中で、リユースの促進策を検討していきます。

<活動内容>

佐々木創ゼミは、リユースの促進策を検討している。この検討過程では、リユースの経済的側面、環境的側面、関連政策などを学際的に研究し、課題を解決していくための理論や分析手法について環境経済学を中心に学習した。

また、夏季休業中には、実際に施策や事業を実施している金沢大学、金沢市へのヒアリングなどを通じて、リユースの現状把握と課題の整理を実施した。

それらの成果を第7回大学コンソーシアム八王子学生発表会の市長提案部門において、リユース市の環境負荷低減効果と軽トラ保有による費用便益分析の結果を報告した。

さらに、演習後期ではPBL手法（Project Based Learning）を用いて、卒業生と新入生のリユースマッチングの取り組みを八王子市と連携し計画している。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年9月15日(火)～9月16日(水)

実施都市： 石川県金沢市

実施施設： 金沢市役所、金沢大学

実施内容： 当ゼミが実施しているリユース市の先進事例のヒアリングとして、2015年に第10回目を実施した金沢大学の取り組みと、それを支援している金沢市の支援内

容及び関連事業の内容についてヒアリング調査を実施した。

成 果 : 金沢大学のリユース市に対する金沢市の支援内容としては、軽トラックの貸し出しがあること、大学当局も教室の貸し出し以外に、人員を派遣しており、一丸となって取り組んでいることなどは、当ゼミが取り組んでいる事例にも有益であり、その成果を第7回大学コンソーシアム八王子学生発表会において市長提案を実施した。

FLP演習C

<テーマ>

環境問題を学際的に分析し、解決策を検討する

<授業の概要>

履修生各個人が課題とする環境問題を設定し、卒業論文を作成します。

<活動内容>

本演習の具体的な到達目標は以下の2つであり、3年間の演習での取り組みの集大成として履修生各個人が課題とする環境問題を設定し、卒業論文を作成した。

1. 環境問題の分析枠組みについて経済学、政策学、行政学、法学、工学などの学際的な理解をすること。
2. 多種多様な環境問題の中から、自ら課題を設定し、その課題を改善する具体的な政策提案について、自らの考えを論理的に表現できるようになること。

履修者が作成した卒業論文のテーマは、以下の通りである。

- レジ袋削減取り組みの現状と課題
- FLP プログラムの人気低迷に対する改善方法
- サッカーJ リーグのリユースカップ・システムにおける成功要因～大分トリニータとアルビレックス新潟を比較して～
- Reuse Market Manual
- 自治体におけるリユース活動の効果
- 農業と生活協同組合の関わり
- 今後の都市農業についての考察―「農ある風景」を地域資源とした活用―

(6) 田中 廣滋 (経済学部・教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

環境と市場経済

<授業の概要>

グローバル化された経済社会のなかで地域および企業は持続可能性を実現しなければならない。この目標を達成するためには、公民のパートナーシップが効率的に実行されなければならない。本演習の目標は地域と企業が協働して持続可能な社会を実現するシステム設計を容易にする分析手法を習得することである。

グローバル市場において引き起こされた問題は単独の国家で対応することは、不可能な状況になっており、G20などの国際的な国家間の協力の枠組みが必要になっている。地球規模の課題として環境問題の重要性は、温暖化問題だけでなく、資源や廃棄物など広い範囲のテーマにおいて認識されなければならない。本年度は、環境問題との関連においてグローバル市場のダイナミズムを特徴づける環境技術のイノベーションや企業の社会的責任の議論の基本的な考え方を学ぶ。

経済社会のグローバル化、地方分権などに対応して、地域あるいは企業がそのガバナンスを実施するためには、それぞれの主体は自らの課題を正確に評価して、その分析結果に基づく目標あるいは計画を明確に設定して、地域あるいは組織の能力を結集してその実現に取り組むことが不可欠である。多数のステークホルダーと良好な関係を築いていかななければならない、多数のステークホルダーから構成される社会において、ガバナンスの主体である自治体や企業によって推進される成果はこの主体の活動に対応するステークホルダーの活動水準によって規定される。自治体や企業が持続可能なガバナンスが実現できるかどうかは、住民、従業員、取引先、産業界、中央政府などステークホルダーの反応あるいは評価によって決定される。いずれかのステークホルダーからその活動内容が拒絶される判定を下された自治体や企業の執行部はガバナンスの主役としての座を追われるか、あるいは、当該の地域あるいは企業自体の存立そのものが危機に直面するといっても過言ではない。このように、持続可能な社会のための管理経営は個々の主体のリスク管理にも役立つのである。授業の中では、日本と米国、中国などの経済と環境に関する最新のデータの収集と分析を行いながら、企業と地域の持続可能性を考察する。また、英国を中心として、EUの地球環境問題への取組を紹介する。

<活動内容>

田中ゼミは、昨年から環境・社会・ガバナンスに関する学習をしてきたが、ロンドンのシティのシンクタンクで金融のファイナンスの最先端の活動を研修して、日本国内での学習の成果を専門家から英語・金融・環境の面から研修を受けた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B

実施日： 2015年9月24日(木)～9月29日(火)

実施都市： ロンドン市(英国)

実施施設： シティ・シンクタンク Z/Yen

実施内容： ロンドン市において、シティによって展開される、金融・環境ビジネスと都市再開に対するファイナンスの最先端の事業に対する研究。Corporation of London、イングランド銀行博物館、Z/Yen、シティのツアー、ドックランズとカナリー・ウオーフ再開発、王立キューガーデンなど

成 果： 金融・環境・都市開発に関する最新の情報の入手ができた。学生は英会話だけでは現地の専門家とのコミュニケーションをとることの困難さを認識。講義のなかで英国人の専門家から金融工学などの基礎知識を学ぶように注意を受けていた。

(7) 藪田 雅弘 (経済学部・教授)

FLP演習B

<テーマ>

環境と地域発展 景観保全と観光発展-これからのまちづくり

<授業の概要>

2015 年度の演習スケジュールは次の通りである。

○4-6 月 研究テーマを景観保全に決め、そのための基礎文献、先行研究の解題を行った。加えて、6 月には現地の状況を見学するために、栃木市観光協会へのヒアリングならびに現地調査を行った。栃木市の観光計画策定と景観を生かしたまちづくり、観光発展の取り組みを調査した。

○7 月、9-10 月 アンケート調査内容の精査、仮説の立案、インタビューシートの策定などを行った。景観と開発に関する事例、ガバナンス、判例などを調べた。

○11-12 月 アンケート実施とデータ入力、クロス集計分析、論文執筆などを行った。

○1 月 論文の最終版を作成した。

以上、演習をより効果的に運営するために、クラウド (Dropbox) を活用し、情報交換、先行研究の共有、効果的な論文作成が行えた。

<活動内容>

2015 年度の演習は、共同論文作成とプレゼンを行うことを目標にたて、関心の高いテーマを選定した。2014 年度の研究テーマであった「佐渡の観光資源とエコツーリズムの展開」をベースに景観保全を選んだ。当初は、宿根木 (佐渡) の景観保全も対象に考えたが、予算制約などを考慮し、今年度は、景観条例を定めたばかりの栃木市の景観保全に焦点を当てて検討を開始した。景観のガバナンス、事例、諸外国の事例などを調べると同時に、景観保全の経済学的考察 (環境価値や公益的機能、開発権取引など) を行い、さらに、栃木市における景観保全の展開を学修した。討議方式で、研究の手段や方法を選定し、2 年次で学修したカイ二乗検定など、クロス集計などの統計的基礎を復習した。7 月ころより、アンケート調査、ヒアリング調査のための準備を行った。夏休み明けには、アンケート調査を実施した。栃木市のインタビュー調査は、栃木市の水害被害の影響で 12 月に変更していただいたが、アンケート調査、論文執筆などはほぼ予定通り行った。11 月末には、日本大学での環境ゼミの報告会で報告を行った。その後、1 月には、すべての調査を踏まえた論文の完成版を作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B

実施日： 2015 年 7 月 5 日 (日)

実施都市： 栃木県栃木市

実施施設： 栃木観光協会

実施内容： 景観条例の策定、景観計画の事例研究として、栃木市を対象とし、とくに、伝統的建造物保存地区である嘉右衛門町の状況など観光発展の関連調査を行う。

成 果： 栃木市観光協会の臼井様に対するヒアリング調査の実施と街並み保存の実態を調査した。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 10 月 18 日(日)

実施都市： 栃木県栃木市

実施施設： 栃木駅付近・栃木市観光協会

実施内容： 栃木市の嘉右衛門町、蔵のまちに来訪した観光客を対象としたアンケート調査を実施した。サンプル数=60

成 果： アンケートの収集によって、データ分析を行う準備ができた。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 12 月 11 日(金)

実施都市： 栃木県栃木市

実施施設： 栃木市役所

実施内容： 景観条例の策定、景観計画の事例研究として、栃木市を対象とし、栃木市における景観保全政策と観光展開の関係を自治体としてどのように考えているかをヒアリングによって確かめる。

成 果： 栃木市の増田様ほか、商工観光課（2 名）、都市計画課（1 名）、伝建推進室（1 名）の皆様に対応いただき、景観保全政策と観光発展の関係性について、景観保全施策、観光発展施策などについて質問を行い、知見を得た。

（８）西川 可穂子（商学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

水と大気の問題と企業の環境対策

<授業の概要>

本演習では主に水と大気に関連する環境問題に焦点をあて、履修学生ごと（またはグループごと）が選んだテーマから企業の環境対策を研究する。また、大学や研究所における現在開発中の最先端技術に関しても理解を深めたい。

演習の前半では、水と大気の資源とその利用について基礎的な知識を習得する。それと同時に環境問題が生じる原因とそれによってもたらされる影響を書籍、論文、記事などを読んで討論し、基本的理解を深める。得られた理解の中から、ひとつテーマを選択して文献調査を中間報告としてまとめる。演習後半では、主に文献調査報告をしたテーマについて、企業でどのような環境対策が行われているのか実態調査を行う。また、最先端技術開発の実態調査（国内企業工場または海外の研究所）を予定している。詳細は、履修学生と相談し決定する。

<活動内容>

西川ゼミ演習Aでは、水環境に関わるメンバーのやりたいテーマを考慮し、以下の2つのテーマに絞り活動を行った。

テーマ1：東日本大震災における福島原子力発電所から漏れた放射能汚染の環境への影響と汚染水対策

テーマ2：身近な水環境、河川の水質とその汚濁

前期は、まず指定図書の輪講、ディスカッションで水資源の基礎知識、放射線の基礎について学習した。夏季休業中には、前期で学んだ知識をさらに深めるために、以下の学会やシンポジウムなどに参加し、専門家から最新の研究成果などを聞いた。また、中部電力の浜岡原子力発電所の見学調査を行った。

2015年8月3日 YNU国際シンポジウム 水環境管理－高度排水処理技術、WET、および生態リスク評価－（横浜）

- ・ 生態系保全を目指した化学物質管理と排水処理の課題
- ・ 効率的排水管理のための毒性評価と毒性削減手法の開発
- ・ 高度排水処理技術の導入と毒性除去
- ・ 生態リスク評価管理技術のアジア展開

2015年8月7日 第24回市民セミナー（東京）

- ・ 放射能汚染事故時に水道ではどのような対応がなされたのか
- ・ 放射性物質とは
- ・ 日本の沿岸は放射性物質で汚染されているのか

2015年9月15日 浜岡原子力発電所・メガソーラー清水・御前崎風力発電所見学調査（詳細は後述）。

後期は、実態調査を行った。テーマ1では、福島県南相馬地区の近くへ行き、当時医療従事者としていた病院院長に当時と現在の状況について、患者さんへの影響を中心に話を伺った。学生の質問についても端的に回答をいただき、放射線汚染をどのように考えるべきかについて考えさせられる機会となった。テーマ2では大学近隣の都市河川について実際にサンプリングを始めた。分析調査対象河川は、程久保川上流、程久保川下流、乞田川、乞田川支流上流、乞田川支流下流である。都市河川として、住宅からの生活雑排水などや農業用水が流れているような地点を選んだ。調査分析項目は、COD（化学的溶存酸素量）・リン酸態リン・亜硝酸・pH・電気伝導度、クロロフィル量、水温などを調査している。今後は、生活排水から出る化学物質などについても分析項目として加えていく。そして、継続的な定点観測を行い、地域の水質の1年を通じた変化を追跡する。また、今後は水生生物調査も合わせて実施する予定である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2015年9月15日(火)

実施都市： 静岡県静岡市、御前崎市

実施施設： メガソーラしみず、御前崎発電所、浜岡原子力発電所

実施内容： 中部電力株式会社の協力を得て、日本一の広さを誇る太陽光発電所のメガソーラ清水および浜岡原子力発電所、御前崎風力発電所を見学した。3つのタイプの異なる発電方式について、それぞれの長所・短所について、実際の現場をみながら説明を受けた。

成果： 再生可能エネルギーである風力・太陽光発電と温暖化対策としては大変有効な原子力発電について、よく比較検討ができた。太陽光発電がかなり天候に左右される発電であるために、安定な発電、質の良い電力といった点からすると原子力発電には及ばない点などを理解することができた。また、浜岡原子力発電所は、まだ運転を開始できていない状況だが、東日本大震災を受けてどのように防災対策を強化したのか実際に目で見て知識を深めることができた。二重三重の危機管理と巨額の防止対策費の投入を知り、新聞などが伝えない情報も知り得た。

対象演習： 演習A

実施日： 2015年11月28日(土)

実施都市： 福島県相馬市

実施施設： 相馬中央病院、市中の商業施設

実施内容： 東日本大震災が発生してから一週間後には病院を閉鎖することになってしまった南相馬にあった中核病院である渡辺病院の病院長であり、現在は相馬中央病院の標葉隆三郎氏から当時の病院での状況、東日本大震災から起きた問題点、そして災害対応に求められることの3点についてのお話を伺った。その後、相馬市にて震災前後で最も生活に影響したことは何か、震災後現在に至るまで困っていることは何かについてアンケート調査を相馬市民に実施した。

成 果 : 放射線への恐れから医療スタッフが自主的に避難してしまい、少ない残ったスタッフで入院患者の看護を続ける事態と並行して、酸素などの医療用備品の備蓄の減少、患者の安全な移送、地域の交通網の断絶など様々な事案が限られた時間の中で一気に押し寄せ、処理しなければならなくなった状況を伺った。大変な当時の状況を知るとともに、現在では放射線への過度の恐怖から、外での運動が減り、生活習慣病を悪化させて、体調が悪くなっている高齢者の現状についても知ることができた。市中インタビューでは、市民の方の意見を知ることができた。同じ福島県内でも南相馬地区と相馬地区では補助金などの相違があるにもかかわらず、風評被害は同じに受けるなど、住民感情にも温度差があることがわかった。



（９）大内 俊二（理工学部・教授）

FLP演習A・C

<テーマ>

環境問題は地球の問題ではなく人間の問題である。このまま人口が増加していけばすぐに地球の限界を超えてしまう状況の中で、「環境を保護する」ということはどういうことなのだろうか？そもそも我々にとって環境とは何なのだろうか？

このような根本的な疑問について考え、現在我々が直面している環境問題の根の深さを認識することがとりあえずの目標である。最終的には、今後人間社会が進むべき方向を見定めることができるようにしたい。

<授業の概要>

環境そのものを理解する第一歩として、我々が持つ「自然あるいは環境のイメージ」について学習する。文献を読み、実際の街並み、公園、環境保護地区などを見て歩くことによって、我々が思い抱く“自然”あるいは“環境”とはどのようなものかを考える。これまでも、テーマパークなどに見られる明らかな作り物の“自然”とそうでない“自然”、そして我々が生活する場所の“自然”について考えてきた。今後は、実際に人々が保護しようとしている“自然”やその活動についても考察を加える。

<活動内容>

毎回のゼミでディスカッションを繰り返し、問題点を明確にすることに努めた。本年度はテーマに「生活の中の“自然”」を選び、環境を配慮したとされている住宅地を歩いて我々にとっての“自然”の意味について考えた。その結果は年末の環境FLP報告会にて発表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年5月2日（土）

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学多摩キャンパスとその周辺

実施内容： 多摩丘陵の“自然”を切り崩して建設された中央大学多摩キャンパス。キャンパス建設前の地形図を参考にしながら、ここがどのように作られたのか、残されている自然、人の手によって維持されている自然、はどのようなものか見て歩いた。また、キャンパス外の様子も見て歩き、人による手入れのなされない自然状態ではどうなるかを観察・体験した。

成果： 緑濃いキャンパスであるが、そこに見られるものの多くはもともとの自然ではなく、人が変形させたものである。我々が自然と思っているものが実は人間の手によるものであることを実際に感じる事ができた。また、キャンパス外の“自然”状態の場所では、ササが生い茂り、倒木も多く、歩くこともままならなかった。自然とは何かを考えるよいきっかけとなった。

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年6月20日(土)

実施都市： 東京都町田市

実施施設： 図師小野路歴史環境保全地域

実施内容： 昔の里山と谷戸の景観が保全されている地域を見学した。昔から自然に人が手を入れることによって保たれてきた景観である。以前はここで暮らす人々の生活を成り立たせていた場所であるが、現在は景観保全地域としてボランティアによる手入れがなされている。人と自然の関係を考えるには適切な場所である。

成果： ボランティアによる手入れがかなりよくなされていて、景観の保全が成功しているようであった。しかし、この景観と人々の生活を成り立たせているものはつながっておらず、高齢化とともにボランティアの減少が予想される今後はその維持は難しくなるだろう。その時この景観を保全する意味に対してどれくらい理解が得られるのだろうか。どうも相当深い問題が潜んでいるように思われた。

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年10月11日(日)

実施都市： 東京都板橋区

実施施設： 板橋サンシティ

実施内容： 40年ほど前に建設された、森のある団地と呼ばれるサンシティを見学。この大規模団地は、緑のまちづくりの成功例として知られており、街づくりに関連した賞も受賞している。この団地を歩くことで現代の住宅と自然との関係の意味を考えてみた。

成果： 周りを高層の住宅に囲まれた緑豊かな公園。ほぼ完全に人の手によって作られたものである。しかし、かなり自然が残っている感じができており、団地住民自身による手入れもよくできていた。子供の姿も多く見かけ、古い団地によくみられる一斉に高齢化した活気のない場所ではなかった。聞けば、成人して一度団地を出た若者が結婚を機に空き家を見つけて戻ってくることも多いそうである。子供が育つ環境として評価されているのであろう。住宅に近接した自然の重要性を感じることができた。

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年11月15日(日)

実施都市： 千葉県柏市

実施施設： 柏の葉スマートシティ

実施内容： 最近“人と環境が共生していくための未来型の環境共生都市”とうたって新しく建設された「柏の葉スマートシティ」を見学し、そこが実際にどのような街となっているのか、人々の暮らしはどんな様子であるかを見学した。

成 果 : サンシティと同じようなコンセプトで最近建設された（現在も一部建設中）の大規模団地である。このほぼ 30 年間の変化はかなりはっきりしていた。団地内には花壇や植木はたくさんあったが、ほとんどは外国産の園芸品種であった。エキゾチックな感じがして現代人にはアピールするのであろう。離れた場所には、自然保全公園があり、遊歩道も整備されていた。環境に最大限の配慮をしたとうたっているが、自然と人間を隔離する傾向が強く出ていた。現在の地球規模の環境問題もこのようにとらえられているのではないかと思った。環境問題の解決は難しいことが感じられた。

(10) 西田 治文(理工学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

生物多様性と地球環境

<授業の概要>

受講者の設定した課題について個別指導を行うこともあれば、課題の設定がまだ十分にできない者に対しては例えば、様々な生物の観察を通して生物多様性を実感してもらうこともある。学外活動以外は、理工学部の研究室で演習を行うことが多い。

<活動内容>

2015年度は、2014年度に引き続き、多摩キャンパスの植物調査を行った。調査は4月25日(土)、10月18日(日)、3月5日(土)に指導教員とともにいき、それ以外に随時学生が実行した。現地での観察と標本の採集、同定作業を行い、種のリストアップと主要種の画像を蓄積している。同定作業は主に後楽園キャンパスの研究室で土曜日を中心に行った。また、6月27日(土)、28日(日)には有志学生が後楽園キャンパスで開催された生き物文化誌学会「標本から見える文化誌」の大会運営に参加した。調査成果はいずれ出版することを想定している。

後楽園キャンパスにおいては、同定作業以外に随時生物多様性に関わるトピックスについて情報と意見の交換を行った。

(11) ハリソン、ブライアン (総合政策学部・教授)

FLP演習A・C

<テーマ>

Environmental pollution control and environmental management

<授業の概要>

We will cover various aspects of environmental management and pollution and consider the countermeasures used; we will also look at sustainable approaches to energy supplies and general management of the environment (e.g. desertification).

<活動内容>

A number of highly topical subjects were studied, particularly the developments in the situation concerning global warming, both recent research results and also the changing political background towards the problem (including the Paris Agreement reached in December 2015). Other topics included fracking, India's water policy, Arctic cruising effects, the role of climate change in the Syrian conflict, erosion etc., in Easter Island, deforestation, algal blooms, windfarm 'sickness', food and landfills, road construction in pristine wilderness, haze in Indonesia due to fires, the Volkswagen pollution scandal, El Nino, and microplastics etc.

One student wrote a 5,000 word thesis on coal combustion products in thermal power plants. The other students wrote reports on water management in the Murray-Darling Basin in Australia and air pollution in India.

Although there were no field trips, summer was used for the individual research project.

(12) 横山 彰 (総合政策学部・教授)

F L P 演習 B・C

<テーマ>

環境政策論

<授業の概要>

「授業計画」

前期は、環境経済学や環境政策の基礎についてテキストを輪読形式で研究発表しながら学び、後期は、自分たちが設定した研究テーマについてグループ研究を実施し政策提言を行います。

「授業時間以外の計画」

F L P 環境プログラム演習共通のサマースクールに加えて、本演習履修者は、9月上旬と2月上旬に実施する総合政策学部事例研究（ゼミ）との合同合宿に参加して頂きます。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B・C

実施日： 2015 年 9 月 10 日(木)～9 月 13 日(日)

実施都市： 山梨県笛吹市

実施施設： 石和びゅうほてる

実施内容： 総合政策学部横山ゼミと合同合宿

成果： 合宿に参加した総合政策学部横山ゼミの 0B たちや現役生の前で、演習 B の学生は 12 月の「5 大学環境経済交歓セミナー」への提出論文草稿に関する研究発表のプレゼンテーションを行い、そして演習 C の学生は卒業論文の中間報告を行い、先輩たちから有益な指導を受け、後期における研究の課題を明確にした。

対象演習： 演習 B・C

実施日： 2015 年 12 月 19 日(土)～12 月 20 日(日)

実施都市： 山梨県笛吹市

実施施設： 京都大学

実施内容： 5 大学環境経済交歓セミナーでの論文発表と意見交換

成果： 5 大学環境経済交歓セミナーは、京都大学・一橋大学・慶應義塾大学・中央大学・同志社大学の環境経済系 5 ゼミのインターゼミナールで、毎年 11 月下旬から 12 月上旬に開催される。演習 B の学生たちは、11 月までの F L P 演習時間に、このインターゼミナールで研究発表する論文の作成や発表を行い、演習 C の先輩たちからのアドバイスをもらいながら、論文の完成度を上げてきた。演習 B の参加者は、共同論文を発表するとともに、他大学の論文発表に対しコメントなどを行い、意見交換をすることで、環境政策に関する理解を深めた。また、演習 B の学生だけでなく演習 C の学生も、参加した各大学の報告論文に対する寺西俊一教授・細田衛士教授など日本を代表する環境経済学者の講評を聴き、環境経済・

政策に関する研究のあり方を理解した。

対象演習： 演習B・C

実 施 日： 2015 年 2 月 15 日（月）～12 月 18 日（木）

実施都市： 山梨県笛吹市

実施施設： 石和びゅうほてる

実施内容： 総合政策学部横山ゼミと合同合宿

成 果： 総合政策学部ゼミと合同のゼミ合宿で、今年度F L P演習としての最終の研究
報告発表を行い、次年度の研究活動計画を策定した。

Ⅱ. ジャーナリズムプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

本プログラムは、長谷川如是閑や杉村楚人冠といった、日本のジャーナリズム史に残る著名な先輩たちを輩出した中央大学の伝統を継承し、ジャーナリズムのさらなる発展をこの中央大学から巻き起こすことを目的としています。

そして、所属する学部で学ぶ学問領域の知識と本プログラムのカリキュラムを融合させることにより、広い視野を持ち、ものごとの本質を深く考察、分析、報告できる能力を持つ人材を育てることを目的としています。

さらに、文章力、分析力、プレゼンテーション能力などとともに、権力の監視、少数者の代弁、アジェンダセッティングというジャーナリストマインドを育成し、新聞、テレビなどのマス・メディアを始め、コミュニケーション関連の世界に優秀な人材を送り出すことも目的としています。

学生諸君が、個人の目的と将来に向けてのキャリアデザインを描けると同時に、メディア界など社会の要請に十分答えられるように、担当教員は適切な指導と教育を行います。

2. 2015年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
臼井 敏男	経済	5	-	-	A単独
鈴木 俊幸	文	4	1	-	A・B合併
辻 泉	文	7	7	7	A・B・C合併
松田 美佐	文	8	10	7	A・B・C合併
市川 哲夫	総合政策	11	9	-	A・B単独
大橋 正和	総合政策	-	12	18	B・C単独
松野 良一	総合政策	16	10	10	A・B・C単独
松本 正	総合政策	-	-	7	C単独
合計		51	49	49	

3. プログラムスケジュール

4月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会

6月 2016年度募集に伴う総合ガイダンス

7月 第二回部門授業担当者委員会

9月 第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

10月 2016年度募集に伴うプログラム別ガイダンス

11月 第四回部門授業担当者委員会
2016年度募集に伴う選考試験

12月 学内活動（期末成果報告会）

2月 第五回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

3月 FLP修了発表
FLP修了証書授与

4. プログラムの活動

＜学内活動＞

期末成果報告会

実施日：2015年12月19日（土）13:00～

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 7203 教室

実施内容：各ゼミによる年度活動報告

5. 2015年度までのジャーナリズムプログラム修了生の主な就職・進学先

日本放送協会（NHK）、テレビ朝日、中部日本放送、東海テレビ放送、朝日新聞社、読売新聞東京本社、毎日新聞社、中日新聞社、中国新聞社、岐阜新聞社、新潟日報社、共同通信社、NTTデータ、電通、小学館、ベネッセコーポレーション、文藝春秋、光文社、白泉社、ダイヤモンド社、有斐閣、WOWOW、東北新社、京王エージェンシー、読売広告社、IMAGICA、PRAP JAPAN、デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム、学情、リクルート、みずほフィナンシャルグループ、日本銀行、三井住友銀行、三菱東京UFJ銀行、千葉銀行、京葉銀行、八十二銀行、東京海上日動火災保険、損害保険ジャパン日本興亜、野村総合研究所、野村証券、富士通、ヤフー、全日本空輸、東日本旅客鉄道、JTB首都圏、地方公務員（県庁・市役所など）、早稲田大学大学院政治学研究科 ジャーナリズムコース、中央大学大学院（文学研究科、総合政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 白井 敏男（経済学部・客員講師）

FLP演習A

<テーマ>

優秀な新聞記者（放送記者を含む）の育成

<授業の概要>

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③新聞記者が直面する問題の三本立てから成ります。作文は毎週、宿題として800字を書いてもらいます。①の作文を書いてもらうねらいの第一は、分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。第二のねらいは、作文を書くことを通して、自分を見つめ、社会の問題に目を見開いて、自分の考えをみずから鍛えることです。②の新聞記事の分析とは、特ダネ、ユニークな記事、いい記事と悪い記事などを取り上げて、議論することです。そうした分析を通して、題材の探し方、取材のやり方、質問の方法、原稿を書く工夫を身につけてもらいます。③の記者の直面する問題では、権力との距離、記者クラブの功罪、取材相手のプライバシー、メディアスクラムなどについて考えてもらいます。

講師は38年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員、論説副主幹を務めました。そうした記者経験を生かして、タフで心優しい記者を育てたいと思っています。

<活動内容>

ゼミでは、1年間に30本の作文を書いてもらった。毎週、講師がそれぞれの作文について添削したうえで講評した。

作文の手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」などの新聞のコラムだ。しかし、新聞のコラムの構成をそっくりまねるわけではない。

新聞のコラムは通常、書物や映画、落語、ことわざなどを引用して書き出し、社会で起きている問題につなげる。社会問題について筆者は感想や考え、主張を読者に伝える。

ゼミ生に書いてもらう作文は、後半については新聞のコラムと同じだ。前半は書物や映画、落語、ことわざなどの引用ではなく、自分の体験を書いてもらう。体験のなかには自分で取材した経験も含まれる。自分の体験をどうやって社会問題につなげていくかが腕の見せ所だ。

なぜ自分の体験を書くのか。1つは、自分がどういう人間であるのかを読者に知らせるためだ。もう1つは、自分の体験を書かない限り、ほかの人とは違う独自の作品をつくれないからだ。この2つのことは、新聞社や放送局の入社試験に合格するために欠かせない。

後半で社会問題を扱うのは、記者をめざすうえで、当然だからだ。

作文のテーマは新聞社、通信社、NHKの過去の入社試験の問題を中心に選んだ。30本のテーマは次の通り。

①日本社会のゆがみ②税③ことばの力④坂⑤選択⑥グローバルとローカル⑦記憶⑧経済成長⑨輪⑩世論⑪日本映画⑫政権交代⑬10年後の日本⑭ソーシャルメディア⑮生命⑯こんなものいらない⑰嘘⑱島⑲葛藤⑳世代間格差㉑光㉒いまの日本人に足りないもの㉓転機㉔動㉕証㉖勘違い㉗地㉘18歳選挙権㉙東京五輪㉚異論

ゼミの2本目の柱として、日々の新聞記事を取り上げて、議論してもらった。議論の軸は主に「いい記事か、悪い記事か」「記事からなにを読み取るのか」「記事で取り上げている出来事についてどう考えるのか」だった。取り上げた記事や議論した内容は次の通り。

▽戦後70年談話へ向けて朝日と読売の主張の違いはなにか。

▽チュニアの銃撃事件で日本人被害者（自衛官）への取材方法は問題があるのか。

▽自民党がテレビ朝日とNHKから聴取したのはなにが問題か。

▽武力攻撃事態法改正案、周辺事態法改正案、PKO協力法改正案、国際平和支援法案をどう読み解くのか。

▽「難民申請 就労許可厳格に」という記事をどう読み解くのか。

▽死人欄、皇室記事で各新聞社の違いはなにか。

▽各新聞社は自画像をどう描いているのか。

▽社説について、論説委員室で意見が対立したらどうするのか。社説は時代によって変わるのか。

一般記事は社説の主張に合わせるのか。社説で皇室を批判したことがあるのか。

▽「報道は広告主を通じて規制を」という自民党勉強会での発言はなにが問題か。

▽2012年の週刊朝日の橋下徹大阪市長についての連載記事はなにが問題か。

▽「ロヒンギャ族、館林に」という記事をどう読み解くのか。

▽「衝突続く辺野古 両者の主張は」という記事をどう読み解くのか。

▽「強硬ハンガリー孤立」という記事をどう読み解くのか。

▽「おわび 保守派に予告」という記事をどう読み解くのか。

▽「クローズアップ現代」へのBPOの意見をどう読み解くのか。

▽「シッター代 広がる助成」の記事をどう読み解くのか。

▽「同時進行ルポ 漂う民」をどう読み解くのか。

▽「医療ルネサンス」と「患者を生きる」はどちらがよいか。

▽南京事件について新聞はどう報じているのか。

▽「偏り、公平ってなんだ」という記事をどう読み解くのか。

▽「忘れられたテロ」の記事をどう読み解くのか。

▽「辺野古 環境委員に寄付・報酬」の記事をどう読み解くのか。

▽「難民 わが社の活力源」の記事をどう読み解くのか。

▽慰安婦問題での日韓合意をどう考えるか。

▽キズものを取り上げた編集手帳の記事をどう読み解くのか。

▽「新たな時代の『追いつき』『追い越せ』へ」という社説をどう読み解くのか。

▽「頭越し補助 波立つ辺野古」の記事をどう読み解くのか。

▽皇紀2676年を取り上げた天声人語をどう読み解くのか。

3本目の柱として、テレビ局と新聞社の違いはなにか、テレビ局と新聞社は権力との距離に違いがあるのかどうかを議論してもらった。

そのほか、懇親会を高幡不動と新宿で計2回開いた。

(2) 鈴木 俊幸 (文学部・教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

明治前期のメディア史研究

<授業の概要>

本年度は、明治期の引札と新聞広告を素材として授業を進めていく。

引札は、中央大学図書館所蔵長谷川如是閑旧蔵『引札集』を一点ずつ読み進めていく。

新聞広告については、ここ三年来継続中の書店・出版社の新聞広告を取り上げる。具体的には兎屋書店の広告、またこれに触発された書籍安売広告を渉猟し、兎屋の営業の消長と広告との相関をとらえ、明治前期における日本の書籍文化、また出版産業の展開と、時代における新聞の受容と広告というメディアの社会的位置付けについて考えていく。

学生の報告と発表を主軸に授業を進めていくが、共同の作業とその取りまとめにも時間を割いていく。

<活動内容>

本ゼミが今年度もっとも注力したことは、明治十年代後半から競争的に流行する書籍安売りの実態を追うことであった。これは、書籍の出版・流通が大きく変化するダイナミズムを書籍流通の側面から解明し、それとともに、新聞というメディアの発達、時代の変化に関わった広告メディアの役割を検証しようという目的のために採用した方法であった。

具体的には、これまでも調査してきた『時事新報』・『郵便報知新聞』・『朝野新聞』・『毎日新聞』・『曙新聞』といった東京の諸新聞を、正確を期すためにあらためて調査しなおし、そこから関係する広告記事を抜き出し、データとして整理するとともに、この現象の広がりや地域的偏差、また地域ごと・新聞ごとの特色、その担い手の活動状況を把握すべく、地方紙の調査を積極的に行った。これまでの調査で収集済みの『奥羽日日新聞』・『新潟新報』・『函館新聞』のデータを整備するとともに、今年度合宿調査で得た『山形新聞』、また教員とゼミ学生が個人的に収集してきた『山梨日日新聞』・『山陽新報』・『大阪朝日新聞』の記事から得たデータを加え、検討を進め、多角的に事態を追える態勢を作った。

学生それぞれが新聞・地域ごとに分担を決め、それぞれの特色をあぶりだしたところまでで、本年度の活動はほぼ終えたが、その作業によって、来年度、総合的な成果を公表できる段取りが整った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年9月14日(月)～9月15日(火)

実施都市： 山形県山形市

実施施設： 山形県立図書館

実施内容： 山形県立図書館所蔵の『出羽新聞』を明治18年から21年までの4年間を対象に

調査し、この時期に多く出現する書籍安売広告記事を収集した。

成 果 : 書籍出版・流通が大きく変化していくことに大きな関わりをもつ安売りという現象は新聞広告をたどることで、そのおよその様相をたどることができるが、地域・新聞によって、そのあらわれかたに大きな差がある。多くの事例を集めてはじめて、全国規模の動きが了解されることになる。今回調査で得た資料は、他と際立つ要素を有する重要なもので、この分析によって、当該演習は大きく前進を見た。

(3) 辻 泉 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

ポピュラー文化とメディア変容

<授業の概要>

本演習は、ポピュラー文化に関連するメディアの実態について、広く理解を深めることを目的としている。たとえば、趣味やファッション、ライフスタイルに関する雑誌やインターネット情報であったり、あるいはスポーツジャーナリズムであったりというように、われわれの日常生活において身近な、ポピュラー文化を切り口にして、今日のメディアの実態や問題点について考察することが主たる目的である。

具体的には、関連する文献の読解からスタートして、実際にメディア情報の内容分析を行ったり、あるいはこれらの情報発信に携わる現場への訪問調査なども織り交ぜつつ取り組んできた。

なお2015年度は、女性ファッション・ライフスタイル誌とそのオルタナティブメディア（インターネット、インディーズ雑誌など）を中心テーマとして取り上げた。

<活動内容>

辻ゼミは、上記したような目的に基づき、『JJ』『CanCam』『JELLY（補足として、小悪魔 Ageha）』『Zipper（同様に、FUDGE）』『non-no』『sweet』『SEDA（同様に、Larme）』の7誌を主たる対象として、こうした系統の雑誌を購読するようなジャンルの若年女子や彼女たちの文化、およびこれらのメディアを作り出すメディア産業を対象とした実態調査を行った。

具体的な活動内容などは、下に掲載した日程表などを参照のこと。

<前期>	予定	文献 (要約/コメント)	雑誌ウォッチ担当	その他
4月15日	(1) ガイダンス・分担決めなど			
4月22日	(2) 基礎論①「マルチメソッドアプローチ」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		
4月29日	(3) 基礎論②「女性雑誌について」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		
5月6日	(4) 休講			
5月13日	(5) 文献購読①『図説日本のマスメディア』Ⅲ出版	中島／白石	『CanCam』 郡司 『SEDA(Larme)』 杉本	仮説構成開始
5月20日	(6) 文献購読②『ファッションビジネスの文化論』8章ファッション誌の現在と過去、未来	奥村／木下	『JELLY』 深澤 『JJ』 合六	
5月27日	(7) アンケート分析			各誌ごとの作業仮説提出・質問項目作成開始
6月3日	(8) 休講			
6月10日	(9) 文献購読③『女性雑誌を解読する』序・3章「性役割伝達メディアとしての女性雑誌」	田中／井口	『non-no』 小池 『Sweet』 荒田	
6月17日	(10) 文献購読④『文化社会学の視座』11章「差異化コミュニケーションはどこへ向かうのか」	岸田	『FUDGE(Zipper)』 西山	質問項目提出
6月24日	(11) インタビュー項目調整①			
7月1日	(12) 休講			
7月8日	(13) インタビュー項目調整②			
7月15日	(14) 内容分析			
7月22日	(15) 予備日			

<後期>	予定	項目①	その他
9月23日	(1)ガイダンス		
9月30日	(2)今後の進め方・予定相談(これまでの進行状況報告)		
10月7日	(3)Google伊田さんゲスト		
10月14日	(4)合宿のおさらい①(JJ,Cancam,non-no,Sweet)	3255教室へ	ゼミ見学会
10月21日	(5)合宿のおさらい②(JELLY,FUDGE,SEDA)	3255教室へ	ゼミ見学会
11月4日	(6)休講		
11月11日	(7)班ごと中間報告①		11月9・11・12日ゼミ選考
11月18日	(8)班ごと中間報告②		
11月25日	(9)休講		
12月2日	(10)年表作成&プレゼン準備①		
12月9日	(11)報告書執筆指示&プレゼン準備②		12月12日(土)年表最終〆切
12月16日	(12)リハーサル		12月19日(土)成果報告会
1月6日	(13)報告書再修正指示		1月6日(火)報告書〆切
1月13日	(14)班ごと最終報告会①		
1月20日	(15)班ごと最終報告会②		

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年8月24日(月)～8月25日(火)

実施都市： 群馬県渋川市

実施施設： 渋川市伊香保町内

実施内容： 現代日本の若年女性たちにおける理想のロールモデル（理想像）とは何かについて、班ごとにプレゼンテーションを行った。

成果： 社会に存在するロールモデル（理想像）とそれを提示するメディアとの関連について、より理解が深まった。

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年10月7日(水)

講演者名： 伊田 聡輔 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 3256号室

実施内容： Googleの近年における取り組み、および近未来のメディアのあるべき姿について、ご講演いただいた。

成果： 講演後は、学生も交えて、近未来のメディアのあるべき姿についてディスカッションを交わし、よりよいコンテンツを提供するものが必要があることが浮き彫りになった。

対象演習： 演習A

実施日： 2015年10月1日(木)

実施都市： 東京都千代田区

実施施設： 集英社 non-no 編集部

実施内容： 女性ファッション雑誌『non-no』の制作の舞台裏及び女性ファッション誌をめぐる現状について、聞き取り調査を行った。

成 果： 教員と学生数名での訪問となったが、ファッション情報を伝達するメディアがもはや紙媒体である必然性はないことが明らかになると共に、さまざまな新しい戦略についての理解が深まった。

(4) 松田 美佐 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

ネット時代のジャーナリズムと取材・表現活動の実践

<授業の概要>

ネット社会の進展にともない新聞やテレビなど伝統的メディアの報道に批判の目が向けられるなか、ジャーナリズム機能をどう維持、発展させるかが問われている。本演習では既存メディアのジャーナリズムのありようを検討すると同時に、ネット社会におけるジャーナリズムの可能性を探ることを目的とする。具体的には、ジャーナリズムの原理・理念について文献で学んだ後、さまざまに展開しているネット上でのジャーナリズム活動の現状と可能性を把握することとする。

それと並行する形で、受講生自らが取材し、記事にまとめる活動をおこなう。具体的には、夏期ゼミ合宿を取材・調査にあてることとし、前期には取材地の選定から始め、グループに分かれて取材の準備をおこなう。後期にはゼミでの発表などを通じて、記事にまとめることとする（なお、2014年度は宮城県石巻市、2013年度は山梨県甲府市、2012年度は沖縄県那覇市をベースにおこなった）。このような取材・表現活動の実践により、ジャーナリズムだけでなく現代社会で広く必要とされている「主体的に情報収集し、議論を通じて理解し、自分なりの見解をまとめ、わかりやすく表現する力」を磨くことを目的とする。

<活動内容>

本年の活動は4つに大きく分けることができる。

まず、文献講読によるジャーナリズムの理解とそれに基づき議論をおこなう訓練である。文献講読で取り上げた本は、遠藤薫『間メディア社会の<ジャーナリズム>』東京電機大学出版局、2014年である。この文献を講読しながら、ジャーナリズムについて理解を深め、さらに、関連するさまざまなテーマについて、受講生の専門領域と関係づけながら議論をおこなった。例年、議論の練習のためにディベートをおこなうこととしているが、本年も受講生からテーマの希望を募り、「渋谷区同性パートナーシップ条例の全国化の是非」「日本社会への難民受け入れの是非」「NHK受信料支払い義務化の是非」などのテーマで、ディベートをおこなった。また、マイナンバー制度については賛否両方の立場からの資料を集めた報告の上で、議論をおこなった。

本年は夏に広島県で調査・取材合宿をおこなうこととし、グループに分かれ事前取材・調査をした上で、8月19日～22日に実態調査に出かけた。学生たちの発案、企画により実現したものである。取材の成果は、本年は外部紙に寄稿することはできなかったが、すべてのグループが後期の新2年生の見学が可能なゼミにおいて発表した。

また、本年はゼミにおけるキャリア教育を目的とし、(株)ファーストリテイリングの本社を訪問し、三名の社員と議論を活発におこなった。

以上の活動を通じて、学年末に受講生それぞれが選んだテーマに関する論文を執筆し、ゼミ論集としてまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年8月19日(水)～8月22日(土)

実施都市： 広島県広島市、廿日市

実施施設： JA全農ひろしま、中国醸造(株)

実施内容： 広島市をグループに分かれ、それぞれ事前準備をふまえて、取材活動をおこなった。

成果： 広島市を中心に、グループに分かれ、それぞれ事前準備をふまえて、取材活動をおこなった。

(5) 市川 哲夫 (総合政策学部・兼任講師)

F L P 演習 A

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

前期は番組のアーカイブを参照しながら、放送史の画期となる事象を学ぶ。
後期は映像制作の手法の基礎を学び、実際に映像制作に取り組む。

<活動内容>

ゼミナール前期

- ① 放送メディアの現況と展望
- ② 戦争下のラジオ放送
- ③ ラジオデイズ・・・ラジオの黄金時代
- ④ 『こうしてテレビは始まった』(有馬哲夫著) 解題
- ⑤ テレビドラマの画期・・・『私は貝になりたい』
- ⑥ 『あの時だったかもしれない』(是枝裕和) に見るテレビの可能性
- ⑦ テレビ報道を変えたキャスターニュース
- ⑧ テレビディレクター田原総一朗の仕事
- ⑨ 「テレビの一番長い日」1972・2・28
- ⑩ ドキュメンタリー『ザ・監督』(市川哲夫)・・・リーダーとは？
- ⑪ ドラマと選挙が会える時『永田町～平成元年の変』
- ⑫ スタジオ見学 (TBS『王様のブランチ』)
- ⑬ ハイビジョンドラマ『陰翳礼讃』(宮田吉雄)
- ⑭ デジタル時代のテレビ
- ⑮ 前期履習内容の総括・まとめ

後期

- ① ドキュメンタリー (「二十歳の自画像」) 習作のためのガイダンス
- ② ドキュメンタリーのアーカイブから学ぶ (その1)
- ③ ドキュメンタリーのアーカイブから学ぶ (その2)
- ④ 作品テーマの「青春」論を学ぶ。P・ニザンから古市憲寿まで。
- ⑤ 作品の構成台本の書き方その1
- ⑥ 作品の構成台本の書き方その2
- ⑦ 作品の構成台本の書き方その3
- ⑧ ゼミ生の台本発表その1
- ⑨ ゼミ生の台本発表その2
- ⑩ ゼミ生の台本発表その3と互選で、撮影作の選定

- ⑪ 当世「若者」論の虚実その1・(作品のテーゼとして)
- ⑫ 当世「若者」論の虚実その2・(同上)
- ⑬ 当世「若者」論の虚実その3・(同上)
- ⑭ 当世「若者」論の虚実その4・(同上)
- ⑮ 後期履習内容の総括・まとめ

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実 施 日： 2015 年 6 月 27 日(土)

実施都市： 東京都港区

実施施設： TBS 放送センター

実施内容： TBS 放送センター「王様のブランチ」スタジオ見学

成 果： 生放送見学後、TBS 中野部長より講話「テレビを目指す人たちへ」

対象演習： 演習A・B

実 施 日： 2016 年 1 月 16 日(土)

実施都市： 埼玉県春日部市

実施施設： 藤塚第3公園

実施内容： 映像撮影の為

成 果： DVD「二十歳の自画像」制作の為。

F L P 演習 B

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

前期は『テレビは何を伝えて来たか』（ちくま文庫）をテキストに用いテレビ60余年の歴史を概観する。後期の制作実習においては本年はゼミ生による「ドラマ」作りに挑む。

<活動内容>

前期

『テレビは何を伝えて来たか』

- | | |
|------------------------------|----|
| ① テレビ放送がはじまった | 講読 |
| ② バラエティとモラル | 講読 |
| ③ 視聴者をどう捉えるか | 講読 |
| ④ 制作現場のあるべき姿とは | 講読 |
| ⑤ 制作現場に夢を取り戻すために | 講読 |
| ⑥ テレビ史を彩った女優たち | 講読 |
| ⑦ 心に残る男優・タレント | 講読 |
| ⑧ 私の修業時代 | 講読 |
| ⑨ 大震災とメディア | 講読 |
| ⑩ スポーツ、子ども番組 | 講読 |
| ⑪ テレビに望むもの | 講読 |
| ⑫ デジタルのテレビ | 講読 |
| ⑬ 「テレビがくれた夢」(昭和篇) 私のドラマ論 (1) | |
| ⑭ 「テレビがくれた夢」(平成篇) 私のドラマ論 (2) | |
| ⑮ 前期履習内容の総括・まとめ | |

後期 「ドラマ」作りから「ドキュメンタリー」作りに変更

- | | |
|--------------------------|-----|
| ① 作品テーマ選び | |
| ② テーマ決定『U20の政治参加』 | |
| ③ 18歳選挙権で日本の政治は変わるのか (1) | |
| ④ 18歳選挙権で日本の政治は変わるのか (2) | |
| ⑤ 18歳選挙権で日本の政治は変わるのか (3) | |
| ⑥ 各国の選挙権年齢の考察 | (1) |
| ⑦ 各国の選挙権年齢の考察 | (2) |
| ⑧ 『U20の政治参加』構成台本作成 | その1 |
| ⑨ 『U20の政治参加』 | その2 |
| ⑩ 構成台本発表 | その1 |

- ⑪ 構成台本発表 その2 と選定
- ⑫ 撮影工程討議
- ⑬ 撮影作業報告と課題の洗い直し その1
- ⑭ 撮影作業報告と課題の洗い直し その2
- ⑮ 後期履習内容の総括・まとめ

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2016年1月16日(土)

実施都市： 埼玉県春日部市

実施施設： 藤塚第3公園

実施内容： 映像撮影の為

成果： DVD「二十歳の自画像」制作の為。

その他の調査

日本政治ドット・コム 代表 鈴木邦和氏 取材・インタビュー

SEALDS 学生 取材・インタビュー

他、取材を都内各所で行う

（６）大橋 正和（総合政策学部・教授）

FLP演習B

<テーマ>

現代社会の変容と Social Media 研究

<授業の概要>

現代社会の変容について様々な視点から学習し、Social Media の急進展と社会への影響についてコミュニケーションの変容などの視点から調査研究を行う。現代社会を情報社会として認識し社会への影響や変容を明らかにし 21 世紀の社会をどのように設計したらよいかデザインングサイエンスの立場から研究した。

個人およびグループで研究対象を設定し学習・調査等を行う。PBL(プロジェクト ベーストレーニング)として研究をまとめる方法を学習し研究成果をまとめ国内外でプレゼンテーションを実施する事を目標とする。

<活動内容>

大橋ゼミは、PBL の手法を用いて個人もしくはグループごとに研究テーマを定めその研究テーマに沿った活動を行った。

今年度の研究テーマは、

百貨店における最適な 020 ビジネスモデルの提案

スマートシティなどの都市の研究

地域の産業振興研究等

多岐に渡った。ゼミ中には、共通テーマである「現代社会の変容」「Social Media の社会への影響」などについて最新の研究成果について議論した。

2015 年 7 月には、情報社会学会の年次研究発表大会に参加し学会での研究発表の実際に触れた。

2015 年 11 月には、台湾国台南市の南台科技大学で開催された第 11 回知識経済とグローバルマネジメント国際会議に参加し 1 グループが研究発表を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B・C

実施日： 2015 年 11 月 16 日(月) ～11 月 22 日(日)

実施都市： 台南市(台湾)

実施施設： 南台科技大学

実施内容： 台湾国台南市の南台科技大学で開催された第 11 回知識経済とグローバルマネジメント国際会議に参加し百貨店のオンライン to オフライン (020) ビジネスモデルに関する研究研究発表を行った。会議に先立ち台北市における小売り流通業に関する SocialMedia の影響などの調査も行った。

成 果 : 英語で論文作成し査読などの投稿のやりとり等事務手続きから航空券やホテルの手配などを自分たちで実施することが出来た。英語での発表と英語での質疑応答および関連研究者との研究交流を行ったことは本人たちにとり今後の活動への自信につながった。

FLP演習C

<テーマ>

現代社会の変容と Social Media 研究

<授業の概要>

現代社会の変容について様々な視点から学習し、Social Media の急進展と社会への影響についてコミュニケーションの変容などの視点から調査研究を行う。現代社会を情報社会として認識し社会への影響や変容を明らかにし 21 世紀の社会をどのように設計したらよいかデザインングサイエンスの立場から研究する。

個人およびグループで研究対象を設定し学習・調査等を行う。PBL(プロジェクト ベーストレーニング)として研究をまとめる方法を学習し研究成果をまとめ国内外でプレゼンテーションを実施する。

<活動内容>

大橋ゼミは、PBL の手法を用いて個人もしくはグループごとに研究テーマを定めその研究テーマに沿った活動を行った。

今年度の研究テーマは、

インドのイーコマースの研究

たばこの価格弾力性と税収から考えるマーケティング

スマートシティなどの都市の研究

ダンスと身体言語の研究 (「ロックダンスと身体言語」)

職場における世代間断絶の現状と情報化社会のスポーツを通じた価値観の形成

BOP のビジネスモデル研究

ファッショントレンドと社会の関係についての調査

地域の産業振興研究等

多岐に渡った。

ゼミ中には、共通テーマである「現代社会の変容」「Social Media の社会への影響」などについて最新の研究成果について議論した。

2015 年 7 月には、情報社会学会の年次研究発表大会に参加し学会での研究発表の実際に触れた。

2015 年 11 月には、台湾国台南市の南台科技大学で開催された第 11 回知識経済とグローバルマネジメント国際会議に参加し 1 グループが研究発表を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B・C

実施日： 2015 年 11 月 16 日(月) ～11 月 22 日(日)

実施都市： 台南市(台湾)

実施施設： 南台科技大学

実施内容：台湾国台南市の南台科技大学で開催された第11回知識経済とグローバルマネジメント国際会議に参加し百貨店のオンライン to オフライン (O2O) ビジネスモデルに関する研究発表を行った。会議に先立ち台北市における小売り流通業に関する Social Media の影響などの調査も行った。

成果：英語で論文作成し査読などの投稿のやりとり等事務手続きから航空券やホテルの手配などを自分たちで実施することが出来た。英語での発表と英語での質疑応答および関連研究者との研究交流を行ったことは本人たちにとり今後の活動への自信につながった。

(7) 松野 良一 (総合政策部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

番組制作およびノンフィクション執筆活動

<演習のスケジュール>

1. 4月～12月 「多摩探検隊」番組制作活動
2. 3月ゼミ合宿、9月ゼミ合宿 (制作会議)
3. 9月～3月 模擬面接の設営、ゼミ活動報告書の作成
4. ノンフィクションの執筆は、年間で行う

<活動内容 (学内・学外・講演会等) >

多様な能力開発およびジャーナリストマインドの育成のために、実践的な活動を行なった。主として、①実際にケーブルテレビで放送するための番組制作、②各種活字メディアへの執筆活動、を2本柱とした。

①番組制作については、ケーブルテレビ向けの番組「多摩探検隊」および「にっぽん列島探検隊」の2本を制作しているほか、小中学生に番組制作を教える「子ども放送局」の活動を行なった。視聴世帯可能世帯数は、多摩探検隊はJCOM系列の約270万世帯、にっぽん列島探検隊はイッツコム系列の約68万世帯である。

1) 「中央大学と戦争」プロジェクト

2010年に出版された『戦争を生きた先輩たちⅠ』、『戦争を生きた先輩たちⅡ』、2013年に出版された『中央評論 戦争を生きた先輩たち (完結編)』の取材対象者に再度取材を行い映像化した。2015年度は、元特攻志願兵、対馬丸事件生存者などの計4人に取材を行い、「多摩探検隊」として番組制作を行った。

②執筆活動については、学内のメディアである『中央評論』『草のみどり』に定期的にルポルタージュ等を投稿し掲載された。さらに、独立した取材・執筆プロジェクト立ちあげ、実行した。

1) 「台湾二二八事件」プロジェクト

日本統治が終了した台湾でおきたエリート層虐殺事件の証言を記録する活動。2015年度は、中央大学OB以外の遺族4名に取材を行った。そしてそれらの原稿は、2014年秋の『中央評論』に掲載し、2016年の『中央評論』にも掲載予定。

2) 「沖縄」プロジェクト

沖縄の戦中・戦後を取材し、その記憶を後世に残す活動。2008年に出版された『中央評論 沖縄問題は今…』と2014年に出版された『証言で学ぶ沖縄問題』の続編である。これまでにガマからの生存者や戦後に起きた米軍墜落事故の被害者等への取材が終了している。2016年の『中央評

論』に掲載予定。

1、番組「多摩探検隊」¹制作

放送月	企 画	ディレク ター	番組プロデュ ーサー	進行状況
‘15 年 4 月	組み木絵職人	竹内	竹内	放送済み
5 月	どんぐりパン	澤田	澤田	放送済み
6 月	清瀬子ども放送局 移動動物園	日野	荒川	放送済み
7 月	多摩の働く犬	尾崎	尾崎	放送済み
8 月	青い目の人形	石田、幸 田、森	石田、幸 田、森	放送済み
9 月	中央大学と戦争 元特攻志願兵	名越	名越	放送済み
10 月	清瀬子ども放送局 野菜うどん	大塚	大塚	放送済み
11 月	清瀬子ども放送局 野菜うどん	大塚	大塚	放送済み
12 月	動物の義肢装具士	鈴木	鈴木	放送済み
‘16 年 1 月	八王子空襲の謎	平木場	平木場	放送済み
2 月	中央大学と戦争 対馬丸生存者	馬田	名越	放送済み
3 月	復刻！TOYODA BEER	本庄	福田	放送中

① 「中央大学と戦争」プロジェクト

取材対象者	住所	取材者	進行状況
神原 侖	京都府	名越	放送済み
仲田 清一郎	埼玉県	馬田	放送済み
細井 巖	東京都	名越	編集中
梁 敬宣	台湾 台北	柚木	編集中

2、番組「にっぽん列島探検隊」²制作

放送月	番組回	企 画	キャスター	ゲスト	番組プロデューサー
‘15 年 4 月	16 回	子ども放送局特集	広瀬	西巻、鈴木	名越
5 月	〃	〃	〃	〃	〃
6 月	17 回	高浜子ども放送局	広瀬	住田	西山
7 月	〃	〃	〃	〃	〃
8 月	18 回	青い目の人形	広瀬	大関、名越	平安山

¹東京・多摩地域のケーブルテレビ局 6 局、J:COM 系列 12 局、九州地域の 2 局の計 20 局（視聴可能世帯数:約 270 万）で放送されている 10 分間の地域再発見番組。

² 佐世保ケーブルテレビと東急沿線イッツコムエリア（約 68 万世帯）で放送されている全国の土地に密着した 30 分番組。

9月	〃	〃	〃	〃	〃
10月	19回	調布特集	山岸	澤田	山岸
11月	〃	〃	〃	〃	〃
12月	20回	八王子子ども放送局特集	山岸	尾崎	大塚
‘16年1月	21回	清瀬子ども放送局特集	山岸	大塚	前田
2月	〃	〃	〃	〃	〃
3月	20回	八王子子ども放送局特集	山岸	尾崎	大塚

3、「子ども放送局」プロジェクト³

活動名	活動日程	場所・学校	内容	アウトプット
清瀬 子ども放送局	2015年 5月9日 ～6月27日	・清瀬郷土博物 資料館 ・岸農園	・清瀬ジュニアリーダーズクラブ の子どもたちが清瀬市の郷土料理 である『野菜うどん』を作るため、 野菜収穫やうどん作りを体験し た。	作品『清瀬の名物「野菜 うどん」～清瀬子ども放 送局～』を制作し、上映 会で上映。さらに多摩探 検隊として CATV で放 送、Web でも配信した。
高浜 子ども放送局	2015年 8月1日 ～3日	漁火想会場	・福井県のお祭り「若狭たかはま 漁火想」、「来てミナーレ内浦」 を子ども達がりポートした。	作品『漁火 vs 内浦 うち の祭に来てミナーレ』を 制作し、上映会で上映。 さらに Web にて配信し た。

4、執筆プロジェクト

①中央評論グラビア

掲載号	執筆者	タイトル
No.291	名越 大耕	台湾二二八事件で殺された日本人・基 隆・社寮島の悲劇
No.292	堀内 新	台湾人学徒出陣
No.293	松原 美也	おさかなポスト～「タマゾン川」か らの脱却～
No.294	荒川 あずさ	最愛の父の背中を見送って～日本人 として生きてきた台湾人の証言～

②草のみどり（「多摩探検隊」制作日誌）

納品月	タイトル・執筆者	
‘15年 5月	「筆じゃない、木目だから伝えられること」	「ニャーと自信を持って言えるようになるま

³小学生・中学生が自ら企画・撮影・編集の作業を行う。中央大学 FLP ジャーナリズムプログラム・松野良一ゼミの学生が指導・支援し番組を制作する活動。

(285号)	竹内義貴	で」 秋山美月
6月 (286号)	「児童劇に秘められた平和への思い」 幸田遥平	「青い目の人形プロジェクト(Doll Project)」 森亮介
7月 (287号)	「いち学生が戦争体験を聴くことの意味」 澤田紫門	「台湾二二八事件で虐殺された日本人」 名越大耕
8月 (288号)	「一人では越えられない壁」 鈴木里咲	「二二八事件 68 周年記念式典」 山田俊輔
9月 (289号)	「演出と編集の難しさ、そして感動を知った『清瀬子ども放送局』」 大塚脩平	「柴犬シバくんが作り出す小金井市で最もグローバルな空間」 渡邊紗千
10月 (290号)	「青い目の人形と戦争」 大関宏紀	「シバちゃんと町のたばこ屋」 尾崎梓
12月 (291号)	「原発の町の『子ども放送局』-何を可視化させてきたのか」 西山周	「高浜一色の夏」 清水千景
‘15年1月 (292号)	「私が泣いた理由（わけ）」 住田達	「元特攻志願兵の証言-中大 OB の記憶を後世に」 名越大耕
2月 (293号)	「異国の地で思いを日本に伝える仲介役として」 和田ユリ花	「動物の義肢装具士・日本初の挑戦-を制作して」 鈴木里咲
3月 (294号)	「台湾二二八事件は、父を奪い、母を奪い、私の尊厳も奪った」 青山拓冬	「八王子空襲の謎に迫る」 平木場大器

④2015 年度に取材をしたプロジェクト

【台湾二二八事件・沖縄受難者】

取材対象者(受難者)	住所	取材者	進行状況
林阮美姝(阮朝日)	台湾	荒川	原稿執筆済み
大長直利(大長元忠)	沖縄	大関	原稿執筆済み
徳田ハツ子、當間ちえみ(仲嵩実)	沖縄	青山	原稿執筆中

【沖縄プロジェクト】

トピック	取材対象者	住所	進行状況	取材者
シムクガマ	知花治雄	沖縄県読谷村波平	原稿執筆中	松原

チビチリガマ	上原豊子	沖縄県読谷村波平	原稿執筆中	尾崎
十・十空襲	吉浜忍 吉嶺全一・他	沖縄県宜野湾市	原稿執筆中	渡辺
久米島守備隊住民虐殺事件	喜久永光正 島袋由美子	沖縄県久米島町	原稿執筆中	大塚
豚輸送作戦	糸村・ジョン 照屋文雄 新垣善昭・他	ハワイ・ホノルル 沖縄県うるま市	原稿執筆中	平安山
宮森小学校米軍機墜落事故	新垣ハル 新里律子	沖縄県	原稿執筆中	小島
幼稚園不発弾爆発事故	鬼本照男 棚原望・他	沖縄県豊見城市	原稿執筆中	清水
義務教育未了	屋比久トシ 星野人史	沖縄県那覇市	原稿執筆中	馬田
新聞カメラマンが見た戦後	大城弘明	沖縄県	原稿執筆中	中川
報道写真家	石川文洋	長野県	原稿執筆中	山岸

5、コンテストの受賞歴について

日時	コンテスト 名	賞	作品	制作者	時間	内容
2015 年 8 月	ヒューマ ンドキュ メンタリ ー映画祭 阿 倍 野 2015	入賞	「飛行機の 神様~元一式 陸上攻撃機 パイロット と空の記憶 ~」	笹沼 麻奈美	16 分	現在、世界最高齢のプロパイロットとして活躍する東京都町田市在住の高橋淳さん（92）。第二次世界大戦中は海軍の一式陸上攻撃機のパイロットを務め、沖縄攻撃部隊唯一の生き残りとなり終戦を迎えた。戦後は現在に至るまで、赤十字飛行隊の隊長として様々な災害現場の救援活動にあたっている。戦中・戦後の空を飛び続けてきた高橋さんと空の記憶に迫った。
2015 年 8 月	ヒューマ ンドキュ メンタリ ー映画祭 阿 倍 野 2015	入賞	『『青い目の 人形』と戦争 -Doll Project and War-	石田洋也、幸田 遥平、森 亮介 （卒業生）	17 分	1927 年、日米友好のために約 13000 体の「青い目の人形」が、米国から日本に贈られてきた。しかし、太平洋戦争中には敵国人形として扱われ、大量に破壊された。そんな状況にもかかわらず、多摩地域で 88 年間も大事に保存された 2 体の青い目の人形物語を追った。

2015 年 11 月	「地方の 時代」映像 祭	奨 励 賞	『『青い目の 人形』と戦争 -Doll Project and War-』	石田 洋也、幸 田 遥平、森 亮 介 (卒業生)	17 分	同上
2016 年 2 月	東京ビデ オフエス ティバル 2015	入賞	『『青い目の 人形』と戦争 -Doll Project and War-』	石田 洋也、幸 田 遥平、森 亮 介 (卒業生)	17 分	同上
2016 年 2 月	東京ビデ オフエス ティバル 2015	入賞	「八王子空 襲の謎」	平木場 大器	14 分	1945 年 8 月 2 日に起こった八王子空襲。この 空襲は、事前に米軍が予告していたにもかか わらず多くの人の命を奪った。人々が亡くな った背景には、2 つの理由があり、それらの 理由に迫った。

① 2015年8月30日 ヒューマンドキュメンタリー映像祭阿倍野2015 入賞



② 2015年11月14日 「地方の時代」映像祭 奨励賞



③ 2016年2月28日 東京ビデオフェスティバル 入賞



6、松野ゼミについて取り上げた新聞記事・テレビ番組について

掲載日・放送日	掲載紙・出演番組	取り上げられた活動	
2015年8月11日	日本農業新聞	中央大学と戦争プロジェクトについて	資料①
2015年8月16日	BS-TBS 週刊報道 LIFE	多摩探検隊「風船爆弾」 中央大学と戦争プロジェクトについて	写真①
2015年10月19日	朝日新聞	中央大学と戦争プロジェクトについて	資料②
2015年11月15日	朝日新聞	多摩探検隊「青い目の人形プロジェクト」 多摩探検隊「飛行機の神様～元一式陸上攻撃機パイロットと空の記憶～」について	資料③
2016年2月22日	産経新聞	多摩探検隊「青い目の人形プロジェクト」 多摩探検隊「八王子空襲の謎」	資料④

資料① 2015年8月11日 日本農業新聞

日本農業新聞
2015年(平成27年)8月11日(火曜日)
45
(14)

先輩の生の声 時代が違えば――



自分に置き換え理解

戦争を体験した先輩や近隣住民の証言を文書や映像にまとめ記録に残す活動が、中央大学総合政策学部(東京都八王子市)の松野良一教授が手掛けるゼミナールで続いている。

時代が違えば、戦地へ赴いたのは自分かもしれない。身近な存在が語ること、若い世代が

たどる

- ・地域や学校の記録を調べる
- ・足を運び話を聞く
- ・文書などに残り、伝える

戦争がひとことでなく、多摩地区に残る戦跡や、大学出身の特攻隊員が存在を知った学生たちからの提案で始まった。2005年

から、延べ90人の学生が携わってきた。

約50人の先輩などの証言をはじめ、映像や文書にした記録は、DVDや

書籍として大学に保存する他、地元ケールテレビや自治体が開くイベント、地域の図書館などで公開され、平和学習にも利用されている。

経済学部3年の名越大耕さん(22)と、総合政策学部2年の馬田翔太さん(20)は、戦後70年の節目となることし、ゼミでまとめた書籍の映像化に取り組み、「先輩たちの肉声や表情を通じて、より真に迫った証言を残したい」と名越さん。

馬田さんは「テレビのインタビューと違い、先輩の一言一言は心に素直に響いてきた。自分の中だけにとめておかず、友人とも共有したい」と話す。

同じ大学で学んだ先輩の戦争体験が、現役学生に命の重みを伝える。ゼミ活動を通じて、また後輩へとつながっていく。

記憶のボタン

4

戦後70年

写真① 2015年8月16日 BS-TBS 週刊報道 LIFE



㊦戦没学生らを追悼する「還(かえ)らざる学友の碑」の前で、名前を記したTシャツを神代忠男さん(左)に見せる神原幹生さん(右)と土屋大輔さん＝東京都港区の慶応大学三田キャンパス、日吉健吾撮影㊦先輩の元学徒兵にインタビューする中央大学の名越大耕さん(左)。制作したケーブルテレビ番組の映像から＝中央大学FLP松野良一ゼミ提供



中大生

取材し番組を製作

中央大学(東京都八王子市)では、在学生が卒業生にインタビューする試みが続いている。

先月、地元の多摩地域のケーブルテレビで「中央大学と戦争」と題した番組の1回目が放映された。同大在学中に陸軍の特別操縦見習士官に志願し、飛行パイロットになった京都府舞鶴市の男性(91)に、3年生の名越大耕さん(22)らが取材し、10分間の番組に仕上げた。

出征前に学生帽と頭髪を実家に残したことや、特攻を覚悟したことなどを淡々と語る男性が、インタビュー中に突然おえつを漏らす。終戦後、朝鮮半島から戻った際、迎えてくれた母親に「本当か」と顔をなで

られたことを振り返る場面だ。名越さんは「僕らと同年代だった男性の心の傷が強く迫ってきた」という。

同大では07年から、ジャーナリズムを学ぶゼミの学生たちがインタビューを重ね、「戦争を生きた先輩たち」という証言集を出版してきた。取材した元学徒兵らの数は計55人。映像に残そうと、今年から番組制作を始め、ネットでも公開中だ(<http://www.tamantan.tv/>)。

指導する松野良一教授(メディア論)は「大学の後輩だからこそ、卒業生は重い口を開いてくれる。キャンパスでは学べない、生きた歴史に触れる機会になっている」と話す。

(西本秀)

中大生、戦争の記憶 映像化

2作品、コンテスト高評価 青い目の人形プロジェクト ■ 飛行機の神様

中央大の多摩キャンパス（八王子市）の学生たちが制作したドキュメンタリーが今年、コンテストで高い評価を受けている。戦争を知らない世代が、戦争の記憶をたどる二つの作品だ。

14日から大阪で始まった「地方放送局など日本各地のドキュメンタリー作品が（日本民間放送連盟など主催）集う映像祭の市民・学生・自

治体部門で、中央大下北沢キャンパスで制作した「青い目の人形プロジェクト」が奨励賞を受賞した。



②「青い目の人形プロジェクト」の編集を担当した住田達さん（右）と大関宏紀さん（八王子市）
①「飛行機の神様」の場面。目指すのは「百歳パイロット」と話す高橋淳さん



百歳パイロット

米国で日本からの移民を拒む排日移民法が成立し、対米感情が暗転していた1924年

年、宣教師シドニー・ギューリックが「友情の人形」として日本に人形を贈る運動を提唱。1万2700体以上が日本の小学校に贈られた。しかし、太平洋戦争が始まると敵国のシンボルとして多くが処分され、全国で300体余しか残っていないとされる。

学生たちは今回、埼玉県立榎原小に贈る「パティ」と八王子市立第八小の「メアリ

ー」を取り上げた。米国に住むギューリックさんの孫や、日本側の受け入れ責任者だった実業家・武沢栄一の孫を訪ねてインタビュー。小学生のころに学校の入り口で人形を踏み踏まれたという日の出町の男性の話や、「青い目の人形」の劇を演じる第八小の児童たちの姿も描いた。

編集を担当した総合政策学部3年の住田達さんは「戦争」といえば徴兵されて戦うイメージ。軍や国が主体の話だと思っていた。子どもたちまで巻き込まれていたとは。法学部3年の大関宏紀さんも「先輩たちが取材した素材を編集するうち、テレビの世界だった戦争に近いものになった」と話す。

8月に大阪であった「ヒュ

ーマンドキュメンタリー映画祭（阿倍野）2015」では、「青い目の人形プロジェクト」と「飛行機の神様」の2作品が入賞した。「飛行機の神様」は、世界最高齢とされる現役プロパイロット高橋淳さん（93）＝町田市＝が操縦する飛行機に学生が同乗。一式陸上攻撃機の操縦士だった戦時中のごや、特攻隊に志願した心境を尋ねた。

「絶対に生きて帰ってきでやる」という高橋さんの思いの強さに、心を揺さぶられました。取材・制作した総合政策学部4年の笹沼麻奈美さんは現在、カナダに留学している。「入賞の知らせに驚きました。戦争ものに収まらず、最高齢のパイロットの魅力最大限引き出しました。戦争を知らない人や知識のない人にも見てほしい」

指導する松野良一教授は「授業後、『日本がアメリカと戦争をしていたなんて知りませんでした』と感想を書く学生が本音でいる。それが現実。若者が右傾化していると聞かれるのは戦争を知らないから。活字を読まないなら、映像で伝えていくしかない」と話す。

（宮坂敬子）

中大生のドキュメンタリー2作品

戦争の記憶伝え入賞

「ビデオフェスティバル」

中央大学の学生が制作したドキュメンタリー2作品が、第7回「東京ビデオフェスティバル2016」(TVF2016)の入賞作に選ばれた。昨年、戦後70年の節目に合わせて制作した「青い目の人形物語」(17分24秒)と「八王子空襲の謎」(14分12秒)で、27、28日に法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎で開かれる「TVF2016フォーラム」で表彰される。

いずれも、中大FLEPジャーナリズムプログラムの松野良一教授のゼミに所属する学生が制作。それぞれ昨年8月、12月に都内などのケーブルテレビ(CATV)で10分間の番組にして放送された。

「青い目の人形物語」は、昭和2(1927)年に文化交流のため米国から日本に約1万3千体が贈られた青い目の人形がテーマ。先の大戦時に敵国の人形としてほとんどが破壊されたが、破壊を免れて多摩地区の2つの小学校で保存されている2体に込められた思いを追った。

「八王子空襲の謎」は、終戦間際の20年8月2日に450人



破壊を免れ、村立檜原小学校で保存されている人形。ビデオ作品「青い目の人形物語」のひとコマ。

もの死者を出した空襲に迫った。空襲から逃げる市民と、「逃げるな。火を消せ」と叫びながら押し戻す警防団の小競り合いに関する証言を発掘、記録している。

青い目の人形物語の制作メンバーで法学部3年の大関宏紀さん(22)は、「入賞できてうれし。一緒にビデオ制作に当たり、すでに卒業した先輩の苦労や、取材先の皆さんのご厚意にも報いることができた」と感想を語っている。

TVF2016には内外から127作品が応募し、中大の2作品を含む40作品が入賞した。CATVで放送された番組は、インターネットのサイト(<http://www.tamafan.tv/>)で視聴できる。

7、合宿について

- ・2015年9月13日、14日 奥多摩観光荘にて合宿を行った。
- ・2016年3月26日、27日 箱根芦ノ湖ホテル「むさしや」にて合宿を行った。

8、見学調査

・見学調査 演習A・B・C

- 実施日： 2015年4月～11月
- 実施場所： 早稲田大学、尾俣重利さん、萩原方子さん、東大和南高校、大阪京橋法律事務所、中央大学市ヶ谷キャンパス
- 実施内容： 第141回多摩探検隊放送予定「八王子空襲の謎」の制作
- 成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

- 実施日： 2015年4月～6月
- 実施場所： 岸農園、清瀬市郷土博物館
- 実施内容： 清瀬子ども放送局の活動
- 成果： 作品『とって、つくって!清瀬の名物 野菜うどん』を制作し、上映会を行った。
- また、制作した作品はCATVで放送し、WEBでも配信した。

・見学調査 演習A・B・C

- 実施日： 2015年6月～8月
- 実施場所： ながいき動物病院。ふく動物病院、つだ動物病院、西川宏平さん、河野由貴さん、木庭敏也さん、島田旭緒さん
- 実施内容： 第140回多摩探検隊「動物の義肢装具士-日本初の挑戦」の制作
- 成果： 制作した番組はCATVで放送し、更にWEBで配信した。

・見学調査 演習A・B・C

- 実施日： 2015年4月～12月
- 実施場所： 高尾公園、天正寺、福德院、野毛山動物公園、川名国男さん、パブロ・アパリシオさん、秋川駅
- 実施内容： 多摩探検隊「ミゾゴイ」の制作
- 成果： 制作した番組はCATVで放送し、更にWEBで配信した。

・見学調査 演習A・B・C

- 実施日： 2015年7月
- 実施場所： 神原侖さん
- 実施内容： 第137回多摩探検隊放送予定「元特攻志願兵の証言-中央大学と戦争-」

の制作

成 果 : 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日 : 2015年9月～11月

実施場所: 八景島シーパラダイス、国分寺 本多公民館、ひまわり号

実施内容: 多摩探検隊放送予定「ひまわり号」の制作

成 果 : 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日 : 2015年10月～12月

実施場所: 石川酒造、中島酒店、豊田駅前、豊田駅前郵便局、増島商店、日野市役
所

実施内容: 第143回多摩探検隊「復刻! TOYODA BEER」の制作

成 果 : 制作した番組はCATVで放送し、更にWEBで配信した。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日 : 2015年10月～2016年3月

実施場所: 田中次郎さん、日産座間事業所、国営昭和記念公園

実施内容: 多摩探検隊「電気自動車たま」の制作。

成 果 : 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日 : 2015年12月～2016年2月

実施場所: わんだフルネイチャーヴィレッジ、緊急通報犬育成協会

実施内容: 多摩探検隊放送予定「緊急通報犬」の制作

成 果 : 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

9、国外実態調査

・国外実態調査 演習A・B・C

実施日： 2015年5月4日(月)～5月9日(土)

実施場所： 台北市(台湾)

実施内容： 台湾で起こった二二八事件について調査を行う。台北在住の遺族の方
話を聞くことで、学びを深める。

成果： 取材をもとに原稿を執筆した。原稿は2015年冬に書籍『中央評論』に掲載された。

・国外実態調査 演習A・B・C

実施日： 2015年9月16日(水)～9月22日(火)

実施場所： ワシントンD.C(米国)

実施内容： 多摩探検隊放送予定「風船爆弾」の制作。

成果： 制作した番組はCATVで放送しやWEBで配信する予定。

・国外実態調査 演習A・B・C

実施日： 2016年2月27日(土)～29日(月)

実施場所： 台北市・基調市(台湾)

実施内容： 第69回台湾228事件記念式典に参加。

成果： 今回の式典のことを2016年『中央評論』グラビアに掲載予定。

10、講演会

・講演会 演習A・B・C

実施日： 2015年7月22日(水)

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス11号館11430号室

実施内容： 電通コミュニケーションデザインセンター、シニア・クリエイティブ・
ディレクターである岸勇希氏による講演会。広告業界やマスコミ業界の
現在、そして「働く」ことの意味について広告業界の第一線で活躍され
ている方にお話していただいた。

成果： 講演者の専門分野であるコミュニケーションデザインの基礎について学
んだ。

（８）松本 正（総合政策学部・特任教授）

FLP演習C

<テーマ>

現代ジャーナリズム、時事問題の研究とジャーナリストの養成

<授業の概要>

週に1回180分から270分で行う授業では、日々に起こる政治や経済、社会、国際などの問題について複数の新聞の記事や社説、オピニオン誌、書籍、ドキュメンタリー映像などを教材に個々の事象を分析したうえで、自らの考えを組み立てて議論を深め、文章にまとめる訓練を続ける。その演習を通して、事実を正確に把握して論点を整理し、事柄の本質を的確に見きわめる論理的思考力、ニュースの価値判断力、洞察力、文章力などを養う。

また、報道現場に立ったときに即戦力となりうる取材力や文章力を育成していくために、日野市内で月に1回発行されている部数3万5000部のミニコミ誌の記事の取材と執筆にもあたる。さらに、本学ラグビー部の応援キャンペーンに参画し、ジャーナリズムゼミの視点からプロモーション企画を展開する。

<活動内容>

この1年間の授業で採り上げた主なテーマは、無人攻撃機ドローンなどロボット兵器の開発とその実戦導入による戦争形態の激変▽新たに導入されたマイナンバー制度の目的、それを社会に定着させていくうえでの課題▽安倍政権による安保法制をめぐる憲法上の問題点と新聞報道の対立▽今後のエネルギー政策における水素燃料の将来性と実用化に向けた課題▽「イスラム国」（IS）によるシリア、イラクなど中東諸国の動乱と大量の難民の発生▽夫婦同姓をめぐる最高裁判決とその問題点▽初飛行に成功した国産旅客機の将来性▽地球温暖化を抑制していくうえでの「COP21」の位置づけ——など。

これらのテーマごとに担当者を決め、パワーポイントや映像を使ってプレゼンテーションを行い、それをもとに全員で討議を重ねた。そのうえで、各自がそれぞれの考えを800字から1000字の文章にまとめて提出し、それを大型スクリーンに映して全員で批評し合った後、添削指導を行った。

課外活動では、2人から3人のグループに分かれて日野市内の各地域で活躍している人や団体などを見つけ出し、取材をして新聞記事の形に文章化する作業を積み重ねた。その記事は毎月、写真とともにミニコミ誌の1面や発行元のHPに署名入りで掲載され、読者から多くの反響が寄せられた。

本学ラグビー部の応援キャンペーンでは、2015年12月27日に秩父宮ラグビー場で行われた全国大学選手権大会での対帝京大学戦に1万人の観客を集めるため、Facebookとtwitterを開設し、大学選手権セカンドステージ3試合を取材して記事、写真を掲載。併せて「中大一族」の題字を付けた新聞形式のビラを作成し、学内外で配布するなどの活動が続けた。

「中大一族」27日、秩父宮に集結
1万人の大声援で正月決戦の舞台に送り出そう




週刊 中大 族

2015年 第52回全国大学ラグビー選手権大会
セカンドステージ最終戦

号外

中大一族大集合!!
1万人の大声援で送り出す

1万人 大作戦

秩父宮で中大カラーで盛り上げ

12/27 東京大戦
開西大戦

24・12で勝利!

第52回全国大学ラグビー選手権大会
セカンドステージ最終戦

2015 中大ラグビー 1万人 大作戦

秩父宮で中大カラーで盛り上げ

12月27日 vs 帝京大学
14:00 Kick Off
東京・秩父宮ラグビー場

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

21世紀、人類の抱えるもっとも深刻な問題は、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として経済的に厳しい貧困な状況に喘いでおり、栄養、人口、教育、衛生疾病、人権、環境、時には難民、紛争などの側面で、様々な深刻な問題が生じています。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な成長の軌道に乗るには、そこに住んでいる人々自身による自立した自助努力が不可欠です。まだ未成熟の市場の機能を強めるような民間の産業や企業を開発育成していくことが重要ですが、さらに社会の様々な領域で効率的な政府が積極的に介入し、単に市場機能だけでは解決できない深刻な構造的な問題を解決していかなければなりません。幅広い分野にわたる社会開発、ハード・ソフトのインフラ整備、計画的な経済開発の推進など、今後も長い時間をかけて継続的に全力で取り組むべき問題が山積しています。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の継続的かつ大規模な国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国との緊密な協力のもとに、資金面、人材面、貿易面、情報面の幅広い分野で、今後も長期間にわたって継続して積極的に開発問題に参加しなければ、人類の貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。国家レベルでの多様な国際協力、NGO など民間レベルでの国際協力、さらに、先進国の優れた技術の国際移転や途上国におけるグローバル企業の活動などが、貧しい途上国の経済社会の活性化（テイクオフ）に非常に重要な貢献をしていることは、確かな事実です。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関する様々な分野で高度に優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、高度な語学力による国際コミュニケーション能力、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、途上国問題に関する国際政治や経済社会の分析における高度な専門的知識・技術などが、国際協力に参加する人材にとって不可欠の個人的資質能力として強く求められています。異文化社会の複雑な社会経済構造を的確に分析し、様々な困難な環境の中でも経済社会の発展の方策を具体的に模索試行する、逞しい精神力と高度な専門能力を持った人材こそが、21世紀の人类的な課題に挑戦することができるのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、21世紀の人类的課題に挑戦する人材の基礎的な専門能力を養成する場として設定されました。国際的なコミュニケーション能力を継続的に強化するとともに、複数学部にまたがる様々な開発問題の専門科目群の学修を進めていきます。

更に、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて複数の担当教員とより緊密に協力しながら様々な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力育成を目標にしています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジア等での現地社会調査「Project-Based Field Work」による調査報告の口頭による発表と調査報告書を執筆することを履修者に義務付けている実践的な教育を行っています。

2. 2015年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
林 光洋	経済	5	7	－	A・B単独
中迫 俊逸	商	4	1	4	A・B・C単独
平澤 敦	商	11	4	10	A単独、B・C合併
新原 道信	文	4	－	2	A・C単独
崎坂 香屋子	全学連携教育機構	25	11	4	A・B・C単独
佐々木 弘世	全学連携教育機構	10	9	7	A・B・C単独
野末 裕史	全学連携教育機構	7	8	4	A・B・C単独
三次 啓都	全学連携教育機構	－	1	1	B・C合併
合計		66	41	32	

※上記履修者に加えて留学中の者が7人いる

3. プログラムスケジュール

4月 履修ガイダンス

第一回部門授業担当者委員会

6月 2016年度募集に伴う総合ガイダンス

7月 第二回部門授業担当者委員会

10月 2016年度募集に伴うプログラム別ガイダンス

11月 2016年度募集に伴う選考試験

第三回部門授業担当者委員会

12月 学内活動（期末成果報告会）

3月 FLP修了発表

FLP修了証書授与

4. プログラムの活動

<学内活動>

期末成果報告会

実施日： 2015年12月19日（土）10:00～

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 8203、8303、8304 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告
特別講演会(下記に記載)
講演者： 山田 浩忠 氏 (ダイキン工業株式会社)
実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 8304 教室
演 題： 『ダイキン工業におけるグローバル知財強化の取り組み』～海外発掘
各開点への特許業務の強化展開を図るにあたって、各国現地スタッフ
との協働(交流)を通して思うこと～

5. 2015年度までの国際協力プログラム修了生の主な就職・進学先

国際協力機構(JICA)、日本国際協力センター(JICE)、伊藤忠商事、日本郵船、全日本空輸、日本航空インターナショナル、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、JTB首都圏、三菱東京UFJ銀行、三菱UFJ信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、横浜銀行、信金中央金庫、岡三証券、石川島播磨重工業、キヤノン、日産自動車、NEC、日本IBM、日立製作所、ブリヂストン、清水建設、三井物産、アビームコンサルティング、日食、セブン・イレブン・ジャパン、LIXIL、北海道新聞社、テレビ信州、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、AIU高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、国家・地方公務員(厚生労働省、会計検査院、県庁、市役所など)、東京大学大学院農学生命科学研究科、東京大学大学院新領域創成科学研究科学科、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院(経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科)など

6. 演習教育活動

(1) 林 光洋 (経済学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済発展：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っています。

通常の授業の中では、文献からの知識獲得を基本にしましたが、開発の現場を知っている方々への接触・インタビューなどを通じて、教室と現場をつなぐことのできるような授業を試みました。具体的には、以下の項目を主にカバーしました。

- (1) 文献（英語文献を含む）の講読、レジュメ作成・発表、そして議論
- (2) 世界銀行等のオンライン・データを利用した統計分析
- (3) 専門家との接触・交流を通しての現場の情報・感覚の獲得・吸収
- (4) 研究論文の執筆

なお、本ゼミに加えてサブゼミも毎週行ない、また授業外の時間も使って、途上国開発の知識・情報の吸収、学習に努めました。なお、後期のサブゼミは、例年通り、経済学部の林ゼミ 2 年生と合同で行ないました。

<活動内容>

具体的には、開発経済学、フェアトレードの分野のテキストを 4 冊使用して学習しました。10－11 月の白門祭ではフェアトレードカフェを出店し、フェアトレードの学習と普及・啓発に努めました。後期は、「ミレニアム開発目標」についてのグループ論文を執筆しました。下記の通り、外部専門家を招いて特別講義を実施し、開発分野の最新情報を吸収し、開発分野のネットワークを形成するように努力しました。

【特別授業】

下記の特別授業を行ない、それぞれの実施内容について詳細を学習

1) フェアトレードについて学ぶ

実施期間： 2015 年度前期毎週木曜日（合計 11 回）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7304 号室

実施内容： 第三世界ショップから奥谷京子さん、山根多恵さん、高田夏実さん、中山あきの

さんの4人を招き、「フェアトレードとは」、「フェアトレードを通じてのアジアとの付き合い方」、「インドネシア・フローレス島におけるフェアトレード・プロジェクト」、「ミャンマーにおけるフェアトレード・プロジェクト」等について学習

2) 民間企業の途上国向けビジネスについて学ぶ

実施期間：2015年5月26日（火）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7号館 7709号室

実施内容：IHI（石川島播磨重工業）の川村卓也さんを招き、インフラ（特に火力発電）分野の途上国向けビジネスについて学習

3) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間：2015年6月2日（火）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7号館 7202号室

実施内容：元ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADBの貧困削減における役割について学習

4) 国連機関の役割について学ぶ

実施期間：2015年6月9日（火）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7号館 7709号室

実施内容：UNIDO（国連工業開発機関）の小川絢子さんを招き、UNIDOの工業開発における役割について学習

5) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間：2015年6月16日（火）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7号館 7709号室

実施内容：元IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、途上国を巻き込んだ地域経済統合の経済開発、環境開発について学習

6) NGOの活動について学ぶ

実施期間：2015年6月23日（火）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7号館 7709号室

実施内容：LIFE（地球の友と歩む会）の米山敏裕さんを招き、NGOであるLIFEの活動について学習

7) 途上国の農村生活と制度について学ぶ

実施期間：2015年7月7日（火）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7号館 7103号室

実施内容：A&Mコンサルタントの松本彰さんを招き、途上国の農村生活と制度について「緑

の革命ゲーム」を通して学習

8) 農村の貧困について学ぶ

実施期間： 2015 年 11 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7102 号室

実施内容： A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、ラオスとカンボジアの農村における貧困について学習

9) 青年海外協力隊の活動について学ぶ

実施期間： 2015 年 11 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： 青年海外協力隊 OG であり、林ゼミ OG でもある石川渚さんを招き、派遣先ザンビアでの国際協力活動について学習

FLP演習B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済発展：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っています。

通常の授業の中では、文献からの知識獲得を基本にしましたが、開発の現場を知っている方々への接触・インタビューなどを通じて、教室と現場をつなぐことのできるような授業を試みました。また、学生が主体になる研究プロジェクトを実施しました。具体的には、以下の項目を主にカバーしました。

- (1) 文献（英語文献を含む）の講読、レジュメ作成・発表、そして議論
- (2) 世界銀行等のオンライン・データを利用した統計分析
- (3) 専門家との接触・交流を通しての現場の情報・感覚の獲得・吸収
- (4) 途上国での現地調査を含む1年間の研究プロジェクトの実施

なお、正規の演習時間に行なう本ゼミに加えて、サブゼミも実施しました。

<活動内容>

2015年度は、途上国の貧困、地域研究（インドネシア）、現地調査の手法それぞれに関する3冊のテキストを輪読して知識の獲得に努めました。また、林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう3年次の1年間の研究プロジェクトも実施しました。前年度末の2015年2月からスタートし、研究対象国・テーマを決め、経済学部鈴木敏文奨学金に応募して資金を確保し、研究計画書を作成し、国内事前調査を行ない、訪問先のアポイントメントをとりつけ、ロジスティクスの手配をし、インドネシアでの海外現地調査（8月末から9月前半にかけての2週間）を実施し、最終的に、2016年3月、英語および日本語の研究論文を完成させました。

このプロジェクトは、インドネシア貧困層の生活改善について、ステークホルダー間の連携とコミュニティの力を意識して研究を行ないました。外部専門家からの特別授業で研究に必要な知識や情報を獲得したり、現地調査実施後は、さまざまな機会を利用して研究成果を発表したりしました。

【海外現地調査】

インドネシア現地調査

実施期間：2015年8月29日（土）～9月11日（金）

実施場所： インドネシア（ジャカルタおよびその周辺地域）

実施内容： インドネシアの①前期中等教育の質向上、②コミュニティ防災力の強化、③地域保健センターの母子保健分野における役割、④石鹸を使用した手洗い衛生習慣の普及、について研究

成 果： 上記4分野を事例にして、インドネシアの人々の暮らしを観察し、それぞれの分野における開発努力を調査。それらを改善するためにはステークホルダー間の協力とコミュニティの力の活用が重要であることを学習

【特別授業】

下記の特別授業を行ない、それぞれの実施内容について詳細を学習

1) フェアトレードについて学ぶ

実施期間： 2015 年度前期毎週木曜日（合計 11 回）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7304 号室

実施内容： 第三世界ショップから奥谷京子さん、山根多恵さん、高田夏実さん、中山あきさんの 4 人を招き、「フェアトレードとは」、「フェアトレードを通じてのアジアとの付き合い方」、「インドネシア・フローレス島におけるフェアトレード・プロジェクト」、「ミャンマーにおけるフェアトレード・プロジェクト」等について学習

2) 英語でミレニアム開発目標について学ぶ

実施期間： 2015 年度前期毎週火曜（合計 10 回）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： 中央大学大学院経済学研究科博士課程の Arianne Dumayas さんを招き、国連の The Millennium Development Goals Report 2014 をテキストにして、ミレニアム開発目標の内容や成果について英語で学習

3) 民間企業の途上国向けビジネスについて学ぶ

実施期間： 2015 年 5 月 26 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： IHI（石川島播磨重工業）の川村卓也さんを招き、インフラ（特に火力発電）分野の途上国向けビジネスについて学習

4) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2015 年 6 月 2 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7202 号室

実施内容： 元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB の貧困削減における役割について学習

5) 国連機関の役割について学ぶ

実施期間： 2015 年 6 月 9 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： UNIDO（国連工業開発機関）の小川絢子さんを招き、UNIDO の工業開発における役割について学習

6) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間： 2015 年 6 月 16 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： 元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、途上国を巻き込んだ地域経済統合の経済開発、環境開発について学習

7) NGO の活動について学ぶ

実施期間： 2015 年 6 月 23 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： LIFE（地球の友と歩む会）の米山敏裕さんを招き、NGO である LIFE の活動について学習

8) 途上国の農村生活と制度について学ぶ

実施期間： 2015 年 7 月 7 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7103 号室

実施内容： A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、途上国の農村生活と制度について「緑の革命ゲーム」を通して学習

9) 農村の貧困について学ぶ

実施期間： 2015 年 11 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7102 号室

実施内容： A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、ラオスとカンボジアの農村における貧困について学習

10) 青年海外協力隊の活動について学ぶ

実施期間： 2015 年 11 月 24 日（火）

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7 号館 7709 号室

実施内容： 青年海外協力隊 OG であり、林ゼミ OG でもある石川渚さんを招き、派遣先ザンビアでの国際協力活動について学習

<その他>

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 7 月 10 日(金)

実施都市： 神奈川県茅ヶ崎市

実施施設： 浜之郷小学校

実施内容： 2015 年度に海外現地調査を含む 1 年間の研究プロジェクトを実施したが、その中心テーマの 1 つ、教育の質の向上に関連して、日本発祥の「レッスン・スタディ（授業研究）」を日本で観察。

成 果： 日本で生まれた「レッスン・スタディ」を日本の中でも積極的に行なっている現場で観察し、「レッスン・スタディ」とはどのような目的を持ち、どのように実施され、どのような効果があり、どのような促進要因や阻害要因があるのかを学習。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 8 月 9 日(日)

実施都市： 東京都豊島区

実施施設： 学習院大学

実施内容： 学習院大学を会場に開催されていた「レッスン・スタディ（授業研究）」の実施方法や効果に関する国際的なシンポジウムに参加。

成 果： 「レッスン・スタディ（授業研究）」の基礎を現地調査前に学習。現地調査でお世話になる予定であったインドネシア教育大学のスマール教授も参加していたので、同氏にコンタクトし、現地調査の打ち合わせ。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 9 月 4 日(金)

講演者名： Sumar Hendayana 氏

実施都市： 西ジャワ州スメダン市(インドネシア)

実施施設： スメダン国立第 4 中学校

実施内容： 西ジャワ州バンドン近郊（スメダン市）の中学校で開催された「レッスン・スタディ（授業研究）」に参加。インドネシア教育大学のスマール教授の講演を聞き、「レッスン・スタディ」を視察し、そこに参加していた理数科教員に対してインタビュー調査実施。

成 果： インドネシアにおける「レッスン・スタディ」の普及の程度、効果、難しさ等について理解。教育の質の改善をテーマにしたグループの論文の重要なインプット。

(2) 中迫 俊逸 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

異文化コミュニケーションの理論研究においては、外国と日本の文化に対して理解を深められるよう、文献を通じての講義や受講生による英語と日本語による個人発表（パワーポイントを使用したもの）を行ってもらいます。同時通訳の基礎トレーニングでは、ほぼ毎回の講義でビジネスに関わる英語の音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけます。

9月16日前後には、マレーシアへ実態調査に行きます。日本文化に関して、英語によるプレゼンテーションを現地では行ってもらいます。その他の活動についての詳細は、講義中に指示します。

また、研修後は報告書の作成と FLP 国際協力期末成果報告会で口頭発表を行ってもらいます。

<活動内容>

演習のスケジュールは以下の通り行った。

- 第1回：演習の説明、テープのダビング及びシャドーイングの体験
- 第2回：シャドーイングの練習等
- 第3回～第30回：シャドーイング及びテキストの発表

海外実態調査はマレーシアにおける実態調査に参加することを課した。マレーシアでは日本文化に関する事柄を英語でプレゼンさせた。

中迫ゼミでは、ゼミ生に対してマレーシアで行う実態調査を課した。海外実態調査に参加した履修生は、12月第3週に実施された期末交流会において、口頭でその成果を発表させた。さらに、その成果は研究論文として海外実態報告書で公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A

実施日： 2015年9月12日(土)

実施都市： Kedah Darul Aman(マレーシア)

実施施設： Universiti Utara Malaysia

実施内容： 今回はマレーシアに学生を引率した。訪問先のマレーシア国立大学である

Universiti Utara Malaysia (UUM) においては、学生達を4つのグループに分け、それぞれ日本文化に関わることにに関して英語によるプレゼンテーションと質疑応答（それぞれ60分以上）を行わせた。また、UUMの学生達と6時間を超えるディスカッションを英語で行わせたので、現地での学習は十分に行わすことができたと思っている。また、UUMが提携している Homestay Village に1泊し、マレーシア現地の文化に触れさせることもできた。さらに本学の卒業生

で、FLP 第 1 期生で KDDI 所属の関口綾様にもクアラルンプールでインタビューをさせてもらえた。

成 果 : インタビュー項目を前もって訪問先に送付しているので、項目として取り上げたもののみでなく、それらを土台としてさらに発展させた効率的なインタビューを行うことができた。この成果については、例年通り 12 月第 3 週に実施された FLP 国際協力プログラム期末交流会において口頭発表行った。さらに、2016 年 1 月に海外実態調査報告書を発行した。

対象演習 : 演習 A・B・C

実 施 日 : 2015 年 12 月 1 日(火)

講演者名 : 樋口 禎良 氏

実施都市 : 東京都八王子市

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 5203 号室

実施内容 : FLP 国際協力プログラム所属学生に対して、「国際協力プログラムの学生に期待すること」というタイトルで内閣官房内閣人事局所属の樋口禎良氏に講演を依頼した。樋口氏は現在警視庁から内閣官房内閣人事局に出向しているが、以前は外務省中国課でも勤務経験がある。同氏は、中国において人民解放軍を指揮し、大量の不発弾撤去を行った経験もある。中国での経験のみならず、国家公務員として日本に尽くすことに関わる話、国家公務員としての職員像、大学時代にしておくべき活動および日本人として、いかに国際協力活動を行うか等の話をしてもらえるので、FLP 国際協力プログラム所属学生は学ぶことが多かったと思っている。

成 果 : 2015 年 12 月 22 日までに、同講演の要約、意見や感想を書いたレポートを履修者全員に提出させた。このレポート作成のため、学生達は事後学習も行ったため、学習効果がさらに向上したと思っている。

FLP演習B

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究、(2) 海外研修及び(3) ビジネス英語のトレーニングを行います。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表を行ってまいります。海外研修では、実際に外国に行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行います。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し、インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行うことになります。また、研修後は報告書の作成とFLP 国際協力期末成果報告会で口頭発表を行ってまいります。ビジネス英語のトレーニングとしては、ほぼ毎回の講義で音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけます。

<活動内容>

演習のスケジュールは、以下の通り行った。

- 第1回：演習の説明及びテープのダビング
- 第2回～第14回：インタビュー項目の作成及びテキストの発表
- 第15回～第30回：海外研修の報告書の作成及びテキストの発表

海外実態調査はドバイあるいはマレーシアのどちらか1つを選択させた。ドバイでの実態調査を希望する場合は、ビジネス英語 III を履修し、単位を取得した場合にのみドバイに行けることを条件とした。履修しない場合あるいは単位が取得できなかった場合にはマレーシアへの実態調査に参加するか、あるいは個別に課題を与えた。マレーシアでは日本文化に関する事柄を英語でプレゼンさせた。

中迫ゼミでは、ゼミ生に対して海外実態調査をドバイあるいはマレーシアで行うことを原則的に課した。海外実態調査に参加しなかった履修者に対してはそれぞれ個別の課題を与えた。海外実態調査に参加した履修生達は、12月第3週に実施された期末交流会において、口頭でその成果を発表させた。さらに、その成果は研究論文として海外実態報告書で公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B・C

実施日： 2015年10月16日(金)～10月20日(火)

実施都市： ドバイ(UAE)

実施施設： ジェトロドバイ事務所・他

実施内容： 今回はドバイを訪問し、The Sheikh Mohammed bin Rasid Centre for Cultural Understanding、JETRO Dubai Office および三菱商事ドバイ支社において、インタビューを行い、理論と実践の両面からの体験学習をさせることができた。インタビューの内容は訪問先によって異なるが、文化および宗教、ビジネス・コミュニケーション、経営、経済に関わる事柄について行った。イ

ンタビュー項目作成のため、慎重なブレイン・ストーミング及びインタビュー項目の作成そのものに、かなりの時間が授業及び授業時間外に費やされた。したがって、国外ゼミを行うための事前学習は十分にできたと確信している。

成 果 : インタビュー項目を前もって訪問先に送付しているので、項目として取り上げたもののみでなく、それらを土台としてさらに発展させた効率的なインタビューを行うことができた。この成果については、例年通り12月第3週に実施されたFLP国際協力プログラム期末交流会において口頭発表を行った。さらに、2016年1月に海外実態調査報告書を発行した。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2015年12月1日(火)

講演者名： 樋口 禎良 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 5203号室

実施内容： FLP国際協力プログラム所属学生に対して、「国際協力プログラムの学生に期待すること」というタイトルで内閣官房内閣人事局所属の樋口禎良氏に講演を依頼した。樋口氏は現在警視庁から内閣官房内閣人事局に出向しているが、以前は外務省中国課でも勤務経験がある。同氏は、中国において人民解放軍を指揮し、大量の不発弾撤去を行った経験もある。中国での経験のみならず、国家公務員として日本に尽くすことに関わる話、国家公務員としての職員像、大学時代にしておくべき活動および日本人として、いかに国際協力活動を行うか等の話をしてもらえるので、FLP国際協力プログラム所属学生は学ぶことが多かったと思っている。

成 果 : 2015年12月22日までに、同講演の要約、意見や感想を書いたレポートを履修者全員に提出させた。このレポート作成のため、学生達は事後学習も行ったため、学習効果がさらに向上したと思っている。

FLP演習C

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

本演習においては、(1) 異文化コミュニケーションの理論と実践の研究、(2) 海外研修及び(3) ビジネス英語のトレーニングを行います。ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表を行ってもらいます。海外研修では、実際に外国に行き、日系企業や現地企業等でインタビューを行います。インタビュー項目は各種文献等を通じて作成し、インタビュー相手に事前に送付するのでかなり早い段階から準備を行うことになります。また、研修後は報告書の作成とFLP 国際協力期末成果報告会で口頭発表を行ってもらいます。ビジネス英語のトレーニングとしては、ほぼ毎回の講義で音声教材とほぼ同時に話させ、平常点をつけます。

<活動内容>

演習のスケジュールは以下の通り行った。

- 第1回：演習の説明及びテープのダビング
- 第2回～第14回：インタビュー項目の作成及びテキストの発表
- 第15回～第30回：海外研修の報告書の作成及びテキストの発表

海外実態調査はドバイあるいはマレーシアのどちらか1つを選択させた。ドバイでの実態調査を希望する場合は、ビジネス英語 III を履修し、単位を取得した場合にのみドバイに行けることを条件とした。履修しない場合あるいは単位が取得できなかった場合にはマレーシアへの実態調査に参加するか、あるいは個別に課題を与えた。マレーシアでは日本文化に関する事柄を英語でプレゼンさせた。

中迫ゼミでは、ゼミ生に対して海外実態調査をドバイあるいはマレーシアで行うことを原則的に課した。海外実態調査に参加しなかった履修者に対してはそれぞれ個別の課題を与えた。海外実態調査に参加した履修生達は、12月第3週に実施された期末交流会において、口頭でその成果を発表させた。さらに、その成果は研究論文として海外実態報告書で公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B・C

実施日： 2015年10月16日(金)～10月20日(火)

実施都市： ドバイ(UAE)

実施施設： ジェトロドバイ事務所・他

実施内容： 今回はドバイを訪問し、The Sheikh Mohammed bin Rasid Centre for Cultural Understanding、JETRO Dubai Office および三菱商事ドバイ支社において、インタビューを行い、理論と実践の両面からの体験学習をさせることができた。インタビューの内容は訪問先によって異なるが、文化および宗教、ビジネス・コミュニケーション、経営、経済に関わる事柄について行った。インタビュー項目

作成のため、慎重なブレイン・ストーミング及びインタビュー項目の作成そのものに、かなりの時間が授業及び授業時間外に費やされた。したがって、国外ゼミを行うための事前学習は十分にできたと確信している。

成 果 : インタビュー項目を前もって訪問先に送付しているので、項目として取り上げたもののみでなく、それらを土台としてさらに発展させた効率的なインタビューを行うことができた。この成果については、例年通り 12 月第 3 週に実施された FLP 国際協力プログラム期末交流会において口頭発表を行った。さらに、2016 年 1 月に海外実態調査報告書を発行した。

対象演習 : 演習 A・B・C

実 施 日 : 2015 年 12 月 1 日(火)

講演者名 : 樋口 禎良 氏

実施都市 : 東京都八王子市

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 5203 号室

実施内容 : FLP 国際協力プログラム所属学生に対して、「国際協力プログラムの学生に期待すること」というタイトルで内閣官房内閣人事局所属の樋口禎良氏に講演を依頼した。樋口氏は現在警視庁から内閣官房内閣人事局に出向しているが、以前は外務省中国課でも勤務経験がある。同氏は、中国において人民解放軍を指揮し、大量の不発弾撤去を行った経験もある。中国での経験のみならず、国家公務員として日本に尽くすことに関わる話、国家公務員としての職員像、大学時代にしておくべき活動および日本人として、いかに国際協力活動を行うか等の話をしてもらえるので、FLP 国際協力プログラム所属学生は学ぶことが多かったと思っている。

成 果 : 2015 年 12 月 22 日までに、同講演の要約、意見や感想を書いたレポートを履修者全員に提出させた。このレポート作成のため、学生達は事後学習も行ったため、学習効果がさらに向上したと思っている。

(3) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

ビジネスの国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識を習得し、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤ゼミAでは、ツーリズムという共通テーマのもと、3グループにわかれて、それぞれインバウンドの観点から研究を進めた。

- ・日本の祭（東北）に外国人旅行者を呼び込もう

世界の人々は、祭りを含む何らかのフェスティバルを好む傾向が統計的に明らかであるため、祭りというキーワードを設定し、東北の復興需要の一助になるという点でも、祭りが海外旅行者のインセンティブになるかどうかを、アンケート調査等を行い考察した。

- ・小規模旅館が海外旅行者に好まれる理由

昨今、東京都内には家族経営的なホテル（旅館）が外国人旅行者に利用されている。立地的にはチェーンホテルと比較すると不便ではあるが、外国人旅行者の家族連れには「日本的〇〇」を体感できるという理由で、ネットでの口コミが広まり、利用率は右肩上がりである。中には、廃業寸前に追い込まれた旅館が、ターゲットを外国人に切り替えたところ、今では予約が取りづらい旅館へと再生している。こういった旅館の今後の展望につき考察した。

- ・バスツアーの有効活用

この研究は、若者の日本周遊体験という点にスポットをあてた。日本のパックツアーは短期滞在であれば比較的安価なものもあるが、長期滞在となるとそれなりにコストもかかる。そこで、バスを利用しゴールデン・ルートというものを学生自らが考案し、現実的にどういうルート（日本の名所巡り）を、外国人旅行者は要望するのかを調査し、モデルツアーを提案した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2015年12月9日(水)～12月13日(日)

実施都市： 香港(中国)

実施施設： JTB 香港、HIS 香港、佳天美香港有限公司

実施内容： JTB 香港、HIS 香港にて、現地日本人スタッフに対し、ヒアリング調査を行った。香港人の好みの傾向などから、自分たちの提案の実現性について、実際の旅行業務に携わる方々の意見を聞くことができた。

成果： 年度末に行われた成果報告会において、発表を行った。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

ビジネスの国際比較分析

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識を習得し、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤ゼミ B・C は、ツーリズムをテーマに、訪日観光客を日本の地方へ誘致することをメインに研究を進めた。特に、訪日観光客の中で、訪日リピート率の高い香港人に注目し、訪日香港人をターゲットとすることにし、まず関連統計データを整理した。日本の地方では、西日本への観光に需要があり、中国四国地方への観光ニーズが高まっていることから、中国四国地方への観光需要にスポットをあてた。実態調査として、国内では、旅館や政府観光局へのヒアリングを、国外では、香港の日系旅行会社へヒアリングをそれぞれ行い、香港人のニーズの実態をつかむことができた。ヒアリングをふまえて香港中国地方へ誘致するためのモデル観光ルートを考案した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B

実施日： 2015 年 7 月 8 日(水)

実施都市： 東京都台東区

実施施設： 澤の屋旅館

実施内容： 澤の屋旅館や旅館業における外国人利用者に関するヒアリング。

成果： 外国人観光客のニーズの把握、旅館業全体の傾向を知ることができた。また、澤の屋旅館の取り組みについて理解を深めることができた。

対象演習： 演習 B

実施日： 2015 年 10 月 2 日(金)

実施都市： 東京都千代田区

実施施設： 日本政府観光局

実施内容： 日本政府が考える観光について、現状の外国人観光客の動向やニーズの調査。

成果： 研究対象である香港人の訪日観光を頻繁に行う層や、その層が訪日旅行に期待するものを知ることができた。

対象演習： 演習 B・C

実施日： 2015 年 11 月 16 日(月)～11 月 19 日(木)

実施都市： 香港(中国)

実施施設： HIS 香港、JTB 香港、ジェトロ香港事務所

実施内容： 現地の日系旅行会社の視点や、訪日香港人のニーズや香港人の旅行背景の調査。

成 果： 香港人の訪日旅行に対する意見やニーズの把握だけでなく、実際に香港を体感することで、研究対象への理解を深めることができた。

(4) 新原 道信 (文学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

惑星社会の諸問題を引き受け／応答するための国際フィールドワークの実践

<授業の概要>

いま私たちは、地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題を抱える“惑星社会の諸問題”に対面せざるを得せん。小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“（惑星）社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・F L P（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク（参与観察）は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソッドロジーです。“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な“臨場・臨床の智”——フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——は、「座学」だけで学ぶことは難しく、「先輩職人の背中」から学ぶというクラフト・ワークのスタイルをとることが重要となります。ゼミでは“たったひとり降り立つ”と“対話的なエラボレイション”を同時に追求し、質的調査／国際フィールドワーク論では「座学」、立川プロジェクトは、関与型フィールドワーク（参与観察）で自分のフィールドに出て行くための“臨場・臨床の智”を鍛える場としています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、「ファカルティリンケージ・プログラム (FLP)」（学部をこえて共通の問題関心をもった学生が学ぶ教育システム）の「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。1つ1つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

昨年度は、文学部ゼミでは、田園調布・神保町・海老名・相模原で、地域ゼミは、静岡県三島市や多摩モノレール沿線で、国際ゼミは、神奈川県橋本駅周辺と福島県いわき市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちの

フィールドワーク——1人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたり、また「3.11」以降は、被災者の方たちが暮らす立川市の公営団地での活動（「立川プロジェクト」）など——を行っています。そして、ゼミ生たちは、出会った土地や人に想いを馳せつつ、自分の論文を書き上げます。1人1人研究テーマが異なり、個人作業になりがちな論文作成ですが、私たちは、お互い声を掛け合い、相談しながら執筆を行ないました。

新原ゼミの特徴は、1人1人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ

て方針を決めてきました。そうして、福島県いわき市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年9月1日(火)～9月3日(木)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（10班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を11月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の2月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年9月10日(木)～9月12日(土)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、

チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成 果 : 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（10班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を11月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の2月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

FLP演習C

<テーマ>

惑星社会の諸問題を引き受け／応答するためのフィールドワークの実践

<授業の概要>

いま私たちは、地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題を抱える“惑星社会の諸問題”に対面せざるを得せん。小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“（惑星）社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク（参与観察）は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な“臨場・臨床の智”——フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——は、「座学」だけで学ぶことは難しく、「先輩職人の背中」から学ぶというクラフト・ワークのスタイルをとることが重要となります。ゼミでは“たったひとり降り立つ”と“対話的なエラボレーション”を同時に追求し、質的調査／国際フィールドワーク論では「座学」、立川プロジェクトは、関与型フィールドワーク（参与観察）で自分のフィールドに出て行くための“臨場・臨床の智”を鍛える場としています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、「ファカルティリンケージ・プログラム（FLP）」（学部をこえて共通の問題関心をもった学生が学ぶ教育システム）の「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。1つ1つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

昨年度は、文学部ゼミでは、田園調布・神保町・海老名・相模原で、地域ゼミは、静岡県三島市や多摩モノレール沿線で、国際ゼミは、神奈川県橋本駅周辺と福島県いわき市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——1人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづ

けたり、また「3. 1 1」以降は、被災者の方たちが暮らす立川市の公営団地での活動（「立川プロジェクト」）など——を行っています。そして、ゼミ生たちは、出会った土地や人に想いを馳せつつ、自分の論文を書き上げます。1人1人研究テーマが異なり、個人作業になりがちな論文作成ですが、私たちは、お互い声を掛け合い、相談しながら執筆を行ないました。

新原ゼミの特徴は、1人1人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、福島県いわき市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年9月1日(火)～9月3日(木)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（10班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を11月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の2月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年9月10日(木)～9月12日(土)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成 果 : 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム
(10 班) ごとにいわき調査の成果について合同報告会を 11 月に開催した。さ
らに各プログラムの成果報告会後の 2 月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報
告会を開催した。

(5) 崎坂 香屋子 (全学連携教育機構・特任准教授)

FLP演習A

<テーマ>

～ミャンマー国を事例研究としてインフラ・難民・経済・教育分野の開発課題に取り組む～
 ポストミレニアム開発目標 (SDGs) と最貧国における紛争、人権侵害、社会格差が生命や地域社会に与える影響を検証する、を通年ゼミテーマとして活動、調査研究を行いました。

<授業の概要>

本ゼミは将来国際協力のフィールドや開発途上国を含む世界で仕事をしたいと思う人向け、開発系大学院進学を考えている人向けのゼミとして開催しています。MDGs、SDGs や国際協力に関する文献購読 (英文含む) とともに積極的に大学の外にもでかけ、現場を知り、また外部の講師からも教えを受ける形でゼミを進めました。2015 年度は 9 月にミャンマーに出向き、ヒアリングやデータ収集を行いました。帰国後はデータ分析や補足調査を行い、成果を 10 月 4 日～5 日にお台場で開催されたグローバルフェスタで発表し、また 12 月 4 日には総合政策学部のリサーチフェスタに参加して 2 チームが奨励賞を受賞しました。8 月には 1 部の人に限られました。が東日本大震災被災地の岩手県陸前高田市の仮設住宅調査に参画してもらったほか、2016 年 3 月には同陸前高田市広田町での民泊町おこしプロジェクトへの参加も行いました。

<活動内容>

2015 年度崎坂ゼミ A は、25 名の大きなゼミとして発足し、開始当初に自己紹介、チームで学ぶことの面白さ、困難さをまず知るためにチーム単位でのゲームを交えたグループワークから始め、5 月には 2-4 年の 3 学年合同の 1 泊合宿を行って、班分け、学修方針等を策定しました。詳細は以下の通りです。

学生のみでの活動も含んでいます。

月	学修内容	成果、補足事項等
4 月	自己紹介、学修および活動方針策定 輪読「国際開発論」(斎藤文彦、日本評論社、2005) 開始。	グループワーク、「paper chain」「世界が 100 人の村だったら」WS 開催。
5 月	輪読、研究に関する講義、ゼミ合宿。	経済、難民、インフラ、教育班 4 班体制に。
6 月	輪読、班別研究課題プレゼン、紛争/人道支援の最前線の状況を把握する。	特別授業、日本赤十字社から斉藤之弥先生「紛争と人間の安全保障」アフガンを事例に。
7 月	海外実態調査実施決定。候補国プレゼン。ミャンマーに決定。	Barefoot Doctors ミャンマー駐在員中原氏の一時帰国中に現況についての講義、受け入れました。
8 月	班別ミャンマーについてのヒアリングと学習、海外渡航準備。	サブゼミ開催、渡航準備を手分けして学生中心に進める。ロジの他質問票準備、翻訳

		を行う。
9 月	ミャンマー実態調査実施。	帰国後すぐに成果の取りまとめを開始する。
10 月	10 月 4 日 - 5 日にお台場にてグローバルフェスタに参加、ブースを借り報告を行う。 JICA グローバルコンクールにも複数チームが応募する。	3 年ゼミ、4 年ゼミからアドバイザーを招聘し成果の取りまとめへの助言や補助が進む。
11 月	輪読再開、リサーチフェスタへの参加を決める。チーム別にデータを解析しつつゼミの時間を使って報告練習を始める。リサーチフェスタに採択された 2 チームは学術ポスターを作成した。報告の論理一貫性など細かい学びを進めた。	3 年ゼミ、4 年ゼミへ出向いて報告練習を行う。データの解析や補足情報収集をチーム別に行った。SPSS を用いてデータ解析を行ったチームが 2 つあり、統計解析方法を習得してもらった。また結果の解釈や考察方法など IMRAD に沿った発表方法を学んでもらった。
12 月	リサーチフェスタおよび FLP 全体報告会準備。最終練習を各チーム 2 回は行った。	リサーチフェスタで出場 2 チームが奨励賞を受賞。年末は「避難所運営ゲーム」を実施。
1 月	輪読最終、報告とりまとめを各班で行う。フィールド学習と異なるチーム編成で、グループワークを再開。	「貿易ゲーム」「ライトニングトーク」を実施。総括講義を行った。
2 月	報告書作成、提出。	
3 月	一部希望者による東日本大震災被災地陸前高田市復興プロジェクトへ参加。	世界と日本を結ぶ学び、の仕上げとして日本国内の地域格差、災害復興を学ぶ。

<活動成果>

10月 グローバルフェスタ JAPAN にてブース展示、及び報告(中央大学 HP にて紹介される)

12月 総合政策学部主催リサーチフェスタ 2015 インフラ班・教育班 奨励賞受賞



グローバルフェスタ 2015 でブースを出し報告



リサーチフェスタ 2015 で奨励賞 2 つ受賞



<その他実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A・B・C

実施日： 2015年5月22日(金)

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 高尾の森わくわくビレッジ

実施内容： 2年から4年まで全員が一堂に会し、自己紹介に始まり、その後学年別に分かれて本年度の学修計画を策定した。また4年生、3年生が2年生を指導する体制を取り、2年生にゼミでの学びとは、について体得してもらった。

成果： 2年から4年までの今年度の活動計画策定を行い、通年の方針を確定し、学修の方向性を共有した。各学年ともに海外実態調査を実施する決定となった。

対象演習： 演習 A

実施日： 2015年6月9日(火)

講演者名： 斉藤 之弥 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 11430 号室

実施内容： 本年度の2年生は、難民、紛争国家、紛争からの復興を進める国々や人々についての研究を希望する学生が多かったため最前線の取り組みを行って

いる日本赤十字社でカンボジアやバングラデシュ、アフガニスタンで活躍された斉藤先生を招聘し、紛争当事者国に生きる人々の実際についてご講義頂いた。

成 果 : 紛争当事者国のうち、特にアフガニスタン、バングラデシュなどについて知識を深め、緊急援助、人道援助の基本的考え方および国際赤十字社、日本赤十字社等の活動について理解し、本年度の研究に活かすこととした。

対象演習 : 演習 A

実 施 日 : 2015 年 9 月 16 日(水) ～9 月 21 日(月)

実施都市 : ヤンゴン(ミャンマー)

実施施設 : UNICEF

実施内容 : FLP A の海外実態調査は本年度、ミャンマーにおいて実施したが、4 つのテーマに分かれて研究を行った。その中で難民・教育チームは UNICEF に立ち寄って、ミャンマーにおける保健と教育分野の現状を解説いただいた。

成 果 : ミャンマーでは政府の定める公立小学校は教材費などにもかさむため、全員は卒業が出来ず、初等教育を補てんするために寺院の運営する廉価な小学校が多数ある。これらが所得は低くても識字率、教育水準の高いミャンマーの初等教育を補てんしていることが明らかとなった。保健分野では感染症が蔓延しており、水関連の感染症も多数存在することを説明頂いた。

対象演習 : 演習 A

実 施 日 : 2015 年 9 月 16 日(水)

講演者名 : 北澤 仁 氏

実施都市 : ヤンゴン(ミャンマー)

実施施設 : JICA 事務所

実施内容 : FLP A の海外実態調査においてインフラ班、経済班、教育班は我が国の ODA がどのようにミャンマーにおいて活用されているかについて JICA 事務所を訪問して聞き取り調査を行った。

成 果 : インフラ事業、中小企業振興、また保健システム構築プロジェクトなどについて聞き取りを行った。日本の ODA がミャンマー国に集中的に大きな予算と人材を投入していること等が明らかになった。ODA の仕組みについてもご講義頂いた。

対象演習 : 演習 A

実 施 日 : 2015 年 9 月 17 日(木)

講演者名 : 中原 一就 氏

実施都市 : ヤンゴン(ミャンマー)

実施施設： Barefoot Doctors OKINAWA

ミャンマー事務所

実施内容： FLP A の海外実態調査は本年度、ミャンマーにおいて Barefoot Doctors という保健と農業開発に取り組む NGO に受け入れてもらうこととなった。ミャンマー駐在の中原代表にミャンマーの社会事情、プロジェクト等について解説いただき、現地にも同行していただいた。

成 果： インフラ、教育、難民、経済(八角平和計画) の4つのチームが各課題について聞き取りや訪問を行った。中でも、新型インフルエンザへの治療薬のタミフルのジェネリック医薬品を八角から廉価に製造するプロジェクトでは八角の植樹も行うことが出来た。

対象演習： 演習 A・C

実 施 日： 2015 年 10 月 3 日(土)

実施都市： 東京都江東区

実施施設： お台場センタープロムナード

実施内容： FLP A によるミャンマーでの海外実態調査の成果報告をグローバルフェスタ 2015 にブースを出しつつ 2 日に渡って実施した。

成 果： 2 日間でのべ 10 万人の来場者に報告、説明を行った。多数の国際協力に携わる人々、外務省、JICA、NH0、国際機関などに中央大学の FLP 国際協力プログラムをアピールすることもできた。結果は中央大学ウェブサイトでも紹介された。

F L P 演習 B

<テーマ>

～Sustainable Development Goals (SDGs) の現状と課題をカンボジアで検証する～
最貧国における紛争、人権侵害、社会格差、都市環境が生命や地域社会に与える影響を学術的に検証する、を核として本年度は上記テーマで調査研究を行いました。

<授業の概要>

国際協力、国際保健/疫学、社会開発分野で用いられるアプローチから先進国、発展途上国の紛争や平和構築、社会格差や人権の問題、地域社会、文化習慣等の具体的課題を理解しました。本年度はカンボジアを調査対象国とし、(1)環境班、(2)紛争による被害者の心の健康の実態調査班、(3)LGBT 班、(4)元ストリートチルドレンの社会参画への道のりの解明の4つのチームに分かれ質問票調査を実施し、統計解析を用いて結果を分析、提言に纏めました。

<活動内容>

2015 年度崎坂ゼミ B は、12 名のゼミとして活動しました。2-4 年の3つのゼミの中核集団として下学年の指導助言、外部での教育活動(学事部から依頼のスーパーグローバルスクールへの出張授業)、被災地での調査活動にも積極的に取り組み大きな成果を上げました。主な活動内容は以下の通りです。

月	学修内容	成果、補足事項等
3 月	活動方針立案、ブレンスストーミング、合宿計画、助成金申請計画。	2 年ゼミの経験を踏まえ、外部助成金への申請、より学術的研究計画を纏めた。
4 月	ゼミ合宿、研究テーマ策定、助成金申請、ネパール関連ゲスト招聘(2 名)。	グループワーク、「paper chain」WS 開催、下学年のゼミ指導。
5 月	カンボジア関連輪読開始、4 チーム編成、研究に関する講義、ゼミ合宿。	環境、紛争被害者、LGBT、教育班 4 班体制とした。
6 月	輪読、班別研究課題プレゼン、群馬中央中等教育学校への出張授業実施。	出張授業のための準備、教材づくりなどを行った。尺度を用いた研究計画書の作成。
7 月	カンボジアでの受入れ先探し、研究計画の精緻化と修正を本ゼミで実施。	旅程、予算、宿舍移動手段などのログの目途がつく。受け入れ先との調整が続く。
8 月	班別にカンボジア海外渡航準備。岩手県陸前高田市仮設住宅調査実施。	サブゼミ開催、渡航準備を手分けして学生中心に進める。
9 月	カンボジア実態調査実施。	帰国後すぐに成果の取りまとめを開始する。学内英語プレゼンに参加を決める。
10 月	10 月 11 日に学内英語プレゼンに 2 チームが出場、環境班が最優秀賞を受賞し、中大代表に選ばれる。ホームカミングデー英語プレゼンを行った。	英語プレゼンには 2 チームが出場した。中大代表に決まってからは中大代表チームとして 2 次選考に出場、予選を 1 位通過し本選出場が決まった。
11 月	ゼミとして文科省グローバル人材フォ	全チーム SPSS を用いてデータ解析を行った。

	ーラムに中大代表として出場した(11 月 21 日)。リサーチフェスタへの参加を決める。リサーチフェスタ用学術ポスターの作成も行った。報告の論理一貫性など細かい学びを進めた。	結果の解釈や考察方法など IMRAD に沿った発表方法を学んでもらった。中大代表としての文科省東日本第2ブロック大会では入賞を逃すが猛練習を行い、ベストの体制で臨んだ。
12 月	リサーチフェスタおよび FLP 全体報告会準備。	リサーチフェスタで出場 1 チームが敢闘賞、もう 1 チームが奨励賞を受賞した。
1 月	報告とりまとめとグループ学習を再開。総括講義を実施する。	年末から Debate を 2 回実施、「避難所運営ゲーム」「ライトニングトーク」実施。
2 月	2015 年度グローバルコンクールで 3 年連続入賞。報告書作成、提出。	JICA グローバルコンクールで 3 年連続入賞で表彰される (2 月 21 日)。

<活動成果>

- 10 月 学内英語プレゼン大会で最優秀賞受賞（環境班）中央大学代表に選ばれる。
- 11 月 中央大学代表チームとして文科省主催東日本第2ブロック（11 月 21 日）に出場
- 12 月 総合政策学部主催リサーチフェスタ 2015 にて紛争班が敢闘賞、LGBT 班が奨励賞受賞
- 2016 年 2 月 JICA グローバルコンクール 2015 年で紛争班の代表として勝野さんが入賞、ゼミとして 3 年連続入賞を達成した。



学内英語プレゼン大会最優秀賞受賞
(10 月)



JICA グローバルコンクール 2015 入賞
(2016 年 2 月)



2015 学内リサーチフェスタ敢闘賞入賞
(12 月)



中大代表として文科省大会に出場(11 月)



JICA グローバルコンクール表彰式（2016 年 2 月 21 日 JICA 研究所にて）

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A・B・C

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 高尾の森わくわくビレッジ

実施内容： 2 年から 4 年まで全員が一堂に会し、自己紹介に始まり、その後学年別に分かれて本年度の学修計画を策定した。また 4 年生、3 年生が 2 年生を指導する体制をとり、2 年生にゼミでの学びとは、について体得してもらった。

成 果： 2 年から 4 年までの今年度の活動計画策定を行い、通年の方針を確定し、学修の方向性を共有した。各学年ともに海外実態調査を実施する決定となった。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 6 月 10 日 (水)

実施都市： 群馬県高崎市

実施施設： 群馬県立中央中等教育学校

実施内容： 学事部企画課からの要請に基づき、国際協力プログラムに関するゼミの知見をゲーム形式も取り入れてスーパーグローバルハイスクールにて学生による授業を実施した。受講者総数は 200 名。グループワークを取り入れ、グループごとに発表をしてもらう形式とした。

成 果： 中学 1 年生を対象としたが積極的に参加してくれ、国際協力の面白さ、難しさを理解してもらえたと同時に学生にとってもこれまでの途上国での調査研究、フィールドワークを講師として伝える経験であり、多様な学びがあった。これ

までの経験を「教える」プログラムとなった。学生にとっても新鮮で再度実施したいとの声が多かった。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 9 月 9 日(水) ～9 月 15 日(火)

実施都市： プノンペン、シェムリアップ（カンボジア）

実施施設： TP0

実施内容： FLP B の海外実態調査は本年度、1 チームがポルポト政権期の虐殺や国内紛争に影響を受けた人々の心の健康とトラウマについて学ぶこととし、カンボジアでの心のケアに特化して活動する唯一の NGO である TP0 から講義を受け、また質問票を精査し、聞き取り調査の準備を行った。

成 果： TP0 の支援する村で 3 チームに分かれて地雷被害者や虐待を受け今も心に傷を負っているカンボジア人 30 人に質問票調査を実施した。30 年たったいまも心の傷は完治しておらず、精神状態の悪い人が半数いたが、それらの人々は教育水準が低いことも明らかになった。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 9 月 9 日(水)

講演者名： 西山 直樹 氏

実施都市： プノンペン(カンボジア)

実施施設： NP0 カンボジア事務所
または東横 INN プノンペン

実施内容： カンボジアで元はマラソンプロジェクトを運営していた NGO であるが現在は学校教育に体育があまりとりいれられていないこともあって、学校保健の観点からスポーツ振興事業に取り組んでいる NGO の視点から様々な説明を頂いた。中でも毎日朝 TV で放送されている「クメール体操」の開発について教えていただいた。

成 果： 途上国では日本のように体育や音楽、美術などが学校のカリキュラムに取り入れられていないことも多く、運動する機会が限られていることを学んだ。また青年海外協力隊員から NGO に転身したキャリアパスについても教えていただき、今後の進路の参考にすることが出来た。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 9 月 10 日(木)

講演者名： ソチアラ・チヒム

実施都市： プノンペン(カンボジア)

実施施設： TP0 カンボジア事務所

実施内容： TP0 カンボジアの代表であるソチアラ氏よりカンボジアにおける精神医学の立ち遅れ等について説明を頂いた。

成 果 : 心のケアは長期に続けること、心のケアは話を聞くだけではなく作業を通じたり何かやりがいのあることを探し当てることで改善する、などの説明を頂いた。カンボジアでは紛争以降精神科医が2人程度しかいないため、精神科医の育成にも力を入れている、と主張されていた。

対象演習 : 演習B

実 施 日 : 2016年1月7日(木)

講演者名 : 篠崎 康子 氏

(WHO エボラ出血熱対策医師・国境なき医師団日本支部理事)

実施都市 : 東京都八王子市

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 11502 号室

実施内容 : 本年度 FLP B ゼミでは紛争下で生じた人権侵害についてカンボジアを事例に訪問、データ分析を行った。その総括講義として国境なき医師団の精神科医としてシリア、リビア、ウズベキスタン、フィリピン、またエボラ対策の WHO 精神科医としてシエラレオネで活動された篠崎先生から精神科医の行う mental care の詳細をご講義頂いた。

成 果 : 精神疾患とは何か、またその判断基準等臨床精神科医として学生にも分かりやすく解説いただいた。精神疾患でもゴッホ、ピカソ、アインシュタインなど卓越した業績を残した偉人にも言及された。その一方で国際協力として国境なき医師団の組織概要、リクルート方法を説明いただいたのち、紛争地では精神科医が求められている専門職の一つでありながら数が不足している現状を強調された。

FLP演習C

<テーマ>

最貧国、あるいは重要開発課題を抱える国での紛争、人権侵害、社会格差、環境が生命や地域社会に与える影響を包括的、学術的に検証する

<授業の概要>

4年次を対象とする本演習では卒業研究との位置づけで、世界で我が国が特に重要な位置づけとされる災害対策、被災者支援、震災復興支援という開発課題を通年のゼミテーマとしました。2015年度は2015年4月のネパール大震災の発災を契機に、8月には東日本大震災の被災住民の住む岩手県陸前高田市での仮設住宅調査も行いつつ、ネパールの災害復旧現場を調査対象としました。成果は日本語と英語で取りまとめ、また動画でも発信しています。このほか、学事部からの依頼であるスーパーグローバルハイスクール事業への出張特別授業、下学年への指導、助言なども行いました。

<活動内容>

月	学修内容	成果、補足事項等
4月	自己紹介、年間テーマの策定、活動方針策定、ネパール外部講師特別授業参加。	JICA ネパール専門家杉本充邦氏、Sujan Panta 先生よりネパール事情を学ぶ。4月末震災発生。
5月	各自の気に入った研究テーマ発表、研究に関する講義、ゼミ合宿、群馬県立中央中等学校で特別授業実施。	ネパールは渡航不可能と判断し、東ティモールを事例研究国として検討。外部特別出張授業として100人村WSを中心に授業準備を行う。
6月	東ティモール関連の文献を輪読、各自気に入った課題についてプレゼンを行う。	地球のステージ、桑山紀彦医師からヒアリング。 東ティモールの母子保健の現状を理解。
7月	実態調査実施決定。候補国プレゼン。東ティモールに決定。	地球のステージより受け入れ了承。北原元東ティモール大使よりヒアリング。
8月	岩手県陸前高田市仮設住宅調査実施。 (第5回)	日本国内の被災地の復興、復旧の現況理解と被災者の現状の聞き取り。全8町を調査する。
9月	対象地をネパールに変更、関係者ヒアリング、先行研究精査。	実態調査準備。 受け入れ交渉、安全確認を行う。
10月	ネパール関連文献調査、質問票作成。	サブゼミ開催、渡航準備(学生中心)
11月	ネパール実態調査実施。	帰国次第結果を集計、解析、報告準備。
12月	FLP全体報告会準備、および報告会。	FLP報告会、下学年への指導も行う。
1月	総括講義。	「ライトニングトーク」実施及びポストン MGH 岸本早苗先生(心理士)の総括講義。

2 月	報告書作成、提出、英文報告書作成。	英文論文作成準備（学会発表用）。
-----	-------------------	------------------

<活動成果>



ネパール Sujan 先生特別授業（4 月）



陸前高田仮設住宅調査（8 月）
自治会長は中大学生の御父兄だった



ネパール被災地で聞き取り調査（11 月）



岸本心理士による総括講義(2016 年 1 月)

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 C

実 施 日： 2015 年 5 月 27 日(水)

実施都市： 群馬県高崎市

実施施設： 群馬県立中央中等教育学校

実施内容： 学事部企画課からの要請に基づき、国際協力プログラムに関するゼミの知見をゲーム形式も取り入れてスーパーグローバルハイスクールにて学生による授業を実施した。受講者総数は 200 名。「世界が 100 人の村だったら」ワークショップも合わせて実施した。

成 果 : 中学3年生を対象としたが積極的に参加してくれ、国際協力の面白さ、難しさを理解してもらえたと同時に学生にとってもこれまでの途上国での調査研究、フィールドワークを講師として伝える経験であり、多様な学びがあった。これまでの経験を「教える」プログラムとなった。学生にとっても新鮮で再度実施したいとの声が多かった。

対象演習: 演習A・B・C

実 施 日: 2015年5月22日(金)～5月23日(土)

実施都市: 東京都八王子市

実施施設: 高尾の森わくわくビレッジ

実施内容: 2年から4年まで全員が一堂に会し、自己紹介に始まり、その後学年別に分かれて本年度の学修計画を策定した。また4年生、3年生が2年生を指導する体制を取り、2年生にゼミでの学びとは、について体得してもらった。

成 果 : 2年から4年までの今年度の活動計画策定を行い、通年の方針を確定し、学修の方向性を共有した。各学年ともに海外実態調査を実施する決定となった。

対象演習: 演習C

実 施 日: 2015年7月22日(水)

実施都市: 静岡県御殿場市

実施施設: 静岡県御殿場市立玉穂小学校

実施内容: 本年度Cゼミでは通年課題を「紛争当事者国、震災被災国における人々の心の健康」と定めた。その一環で、東ティモール国を調査対象候補国としたことから、東ティモール国で活動する「地球のステージ」代表の桑山雅彦医師より直接ヒアリングを行った。

成 果 : 東ティモールの母子保健の現状、生活環境、調査研究の実施可能性について多様な観点から助言および回答をいただいた。母子保健についての取り組みの成果が表れている一方、心の健康については深刻さは表面上からは見受けられず、状態はさほど悪くないのではないかという結論であった。

対象演習: 演習A・C

実 施 日: 2015年10月3日(土)

実施都市: 東京都江東区

実施施設: お台場センタープロムナード

実施内容: FLP Aによるミャンマーでの海外実態調査の成果報告をグローバルフェスタ2015にブースを出しつつ2日に渡って実施した。

成 果 : 2日間でのべ10万人の来場者に報告、説明を行った。多数の国際協力に携わる人々、外務省、JICA、NHQ、国際機関などに中央大学のFLP国際協力プログラムをアピールすることもできた。結果は中央大学ウェブサイトでも紹介された。

対象演習： 演習C

実施日： 2015年11月12日(木)～11月20日(金)

実施都市： カトマンズ(ネパール)

実施施設： ラブグリーンジャパンプロジェクトサイト、被災地デビタール村

実施内容： 本年度FLP Cゼミは2015年ネパールの大震災の被災者調査を行うこととし、カトマンズと被災地のシンディパルチョーク群の農村に滞在して、234名から聞き取りを行った。

成果： 被災者の精神状態は極めて悪く、周囲からの支援はほとんどない。被災地は仮設住宅群もなく、自力再建で自宅を作り直し、行政からの補助は殆どない事が明らかとなった。我が国と途上国の災害対応の相違を学ぶ貴重な機会となった。

対象演習： 演習C

実施日： 2015年11月13日(金)

講演者名： 相川 政夫 氏

実施都市： カトマンズ(ネパール)

実施施設： ラブグリーンジャパンネパール事務所(カトマンズ)

実施内容： 本年度FLP Cゼミは2015年ネパールの大震災の被災者調査を行った。そのプロジェクトに関する複数回の講義およびフィールドでの調査実施指導を相川理事長からいただき、現場へも同行して、ネパールの震災の実際を調査研究に取りまとめた。被災者の精神状態は極めて悪く、支援もほとんどない現状が明らかとなった。

成果： ネパールの文化、宗教、カーストに関する講義の他、震災時の写真を中心に事前学習をすることができた。またフィールド学習としてパシュパティナートに同行いただきヒンディー教の葬儀、埋葬について理解した。

対象演習： 演習C

実施日： 2016年1月13日(水)

講演者名： 岸本 早苗 氏

(マサチューセッツ総合病院心理職・ハーバード大学公衆衛生大学院修了)

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 7715号室

実施内容： 本年度FLP Cゼミでは紛争及び災害被災国の人々のmental healthを研究課題とした。その総括講義として米国の病院で広く行われている患者へのメンタルケアの手法およびdifficult conversationの実際について米国ボストンマサチューセッツ総合病院で臨床心理士として働いた岸本講師から米国の事例を学んだ。

成 果 : 文系の大学からハーバード大学公衆衛生大学院に進まれたキャリアパスを紹介された後、米国の病院で広く行われている臨床心理士も医療チームの必須専門職であること、また米国医療サービスでの多業種連携の効果についても解説された。

(6) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP演習A

<テーマ>

国際協力論入門

<授業の概要>

本演習では開発途上国の抱える諸問題（貧困、教育、保健衛生、ガバナンス、環境、紛争等）に関し、講義や関連する様々な文献・レポートの輪読等を基にその基本的な構造についての理解を深める。更に第二次世界大戦終結後こうした開発途上国に対し国連・国際金融機関及び先進諸国がどのような開発戦略を採用してきたのかについてその当時の国際関係（東西冷戦構造等）も十分に視野に入れながら分析し、そうした各戦略の有効性とその限界についても可能な限り分析する。

<活動内容>

2015年度のゼミでは、本ゼミにおける文献講読・視聴覚教材の利用・ゼミ員によるプレゼンテーションを踏まえゼミ内での討議を主活動として実施し、当ゼミの当初の目標である「開発途上国とは何か?」、「国際協力は何故必要なのか?」といった問いにゼミ員各自が自らの考えを、自らの言葉で説明することが可能となるよう全員で学習を深めた。また国際協力や開発途上国に関する開発問題に関する基本文献を毎月課題図書として講読し、ゼミ員各自が読後の感想や更なる関心学習事項等について記載した「課題図書レポート」を提出した。

上記の他、Aゼミ独自の学習に加え、(1)外部講師を招聘しての講話、(2)国際協力関連施設の訪問等を実施することにより国際協力のより総合的・包括的な理解の促進に努めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

見学調査： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年4月25日(土)

訪問先： 国際協力機構(JICA)地球ひろば(市ヶ谷)

内容： 開催中の「開発途上国の食料問題」を視察し、併せて帰国直後の青年海外協力隊員より任国での活動状況等についての説明を受け、協力隊の役割や具体的な活動の詳細について質疑応答を行った。

成果： 日本のODAによる開発途上国への食料支援を展示資料等をもとに確認し、また青年海外協力隊の概要や現場での活動の詳細についても学び、併せて併設されているJICA図書館の利用法についても説明を受けた。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年5月22日(金)

講師名： JICA本部アフリカ部参事役 飯村 学氏

内容： 現在最も厳しい貧困問題を抱えているアフリカ地域の現状とその特徴について包括的な説明を受け、今後の対アフリカ協力の進め方等について自由討議を行った。

成果： アフリカ問題の本質とそうした開発問題に対する日本を含めた先進諸国や国際機

関により国際開発支援のより効果的な進め方について深く学ぶ機会となった。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年7月10日(金)

講師名： 中央大学ミャンマー白門会 北澤 仁 氏 (中央大学法学部卒業)

内容： 現在大きな注目を集めているミャンマーの現状、特に民主化の今後の進展等について現地に長く滞在している講師より多角的な視点から説明を受け、その後自由討議を行った。

成果： 関連の文献だけでは理解できないミャンマーの現状やその社会の特徴について極めて多くのことを学ぶ機会となった。また本学の卒業生である講師より急速にグローバル化が進む世界の中で学生としてどのようなことを在学中に学ぶべきか等について極めて有益な助言を得ることができた。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年7月24日(金)

講師名： NPO 法人 LINK 元代表 木村 茂氏

内容： タイの山間部において長年地元住民による持続的な森林保護活動に従事してきた講師より、森林保護と地域住民の生活をどの様にリンクさせながら持続可能な形で運動を継続していけばよいのか等について極めて興味深い説明を受け、その後自由討議を行った。

成果： 国際協力の重要な担い手の一つである NGO の立場から見た、国際協力の在り方や NGO 活動の有効性とその限界について理解することが出来、今後の望まじき NGO のあり方についても考える一助となった。

対象演習： 演習A

実施日： 2015年9月18日(金)

実施都市： 神奈川県横浜市

実施施設： JICA 横浜

横浜ウォーター株式会社

内容： A,B,C 全体の合同ゼミを企画し、現在国際協力の現場で大きな注目を集めている官民協力の具体例としてアフリカ等で横浜市水道局の経験や技術力に基づき水事業に貢献している横浜ウォーター（株）を訪問し現状についての理解を深めた。またその後 JICA 横浜国際センターを訪問し同センターで実施中の JICA 事業の現状について視察した。

成果： 日本の地方自治体が有する優れた技術や住民への公共サービスの提供の経験が開発途上国の開発支援に大きく貢献し、またそうした国際協力が地方自治体の国際化や活性化に大きく貢献していることが理解できた。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2016年1月22日(金)

講師名： JICA 国際協力専門員 杉山 俊士氏 (元 FAO 職員)

- 内 容 : 開発途上国における水産セクターの現状と問題点について幅広い観点から説明を受けた。また現在日本も含めた世界全体で大きな課題となっている食料確保と食の安全について水産分野からみた課題と今後の可能性について議論を行った。
- 成 果 : 文献だけではなかなか理解しがたい開発途上国の水産分野における諸問題について豊富な映像資料に基づく説明を受け十分理解することが出来た。

F L P 演習 B

<テーマ>

国際協力論研究—海外実態調査による実証的研究—

<授業の概要>

これまで日本の ODA の協力が集中的に供与され、また過去に世界銀行による「東アジアの奇跡」レポート等によりその目覚ましい経済社会発展が大きく取り上げられた東南アジア地域（国は未定）での現地実態調査を実施する。現地調査においては現地の住民が直面していた、或いは直面している多くの開発課題についての構造やその複雑さを直接確認し、そうした開発課題の解消に向け先方政府や地域住民等と共に実施されてきた国際協力プロジェクトの支援現場や関連する支援機関(NGO 等)を訪問し国際協力により達成された具体的な成果とその限界等について分析し理解する。

<活動内容>

2015 年度の本ゼミにおいては、夏休み期間を利用したミャンマーでの現地調査を出来る限り効果的に実施することを中心課題とし、併せて開発途上国が直面する数々の開発課題に関する基本的な理解のより一層の促進やこうした開発課題の解決を目指す国際協力（日本の ODA を中心として）の制度・仕組み及びその限界等を体系的に理解することをゼミ全体の目標として活動した。

上記の他、B ゼミ独自の学習に加え、(1)外部講師を招聘しての講話、(2)国際協力関連施設の訪問等を実施することにより国際協力のより総合的・包括的な理解の促進に努めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

見学調査： 演習 A・B・C 合同ゼミ 2015 年 4 月 25 日(土)

訪 問 先： 国際協力機構(JICA)地球ひろば（市ヶ谷）

内 容： 開催中の「開発途上国の食料問題」を視察し、併せて帰国直後の青年海外協力隊員より任国での活動状況等についての説明を受け、協力隊の役割や具体的な活動の詳細について質疑応答を行った。

成 果： 日本の ODA による開発途上国への食料支援を展示資料等をもとに確認し、また青年海外協力隊の概要や現場での活動の詳細についても学び、併せて併設されている JICA 図書館の利用法についても説明を受けた。

講演会： 演習 A・B・C 合同ゼミ 2015 年 5 月 22 日(金)

講 師 名： JICA 本部アフリカ部参事役 飯村 学 氏

内 容： 現在最も厳しい貧困問題を抱えているアフリカ地域の現状とその特徴について包括的な説明を受け、今後の対アフリカ協力の進め方等について自由討議を行った。

成 果： アフリカ問題の本質とそうした開発問題に対する日本を含めた先進諸国や国際機関により国際開発支援のより効果的な進め方について深く学ぶ機会となった。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年7月10日(金)

講師名： 中央大学ミャンマー白門会 北澤 仁 氏 (中央大学法学部卒業)

内容： 現在大きな注目を集めているミャンマーの現状、特に民主化の今後の進展等について現地に長く滞在している講師より多角的な視点から説明を受け、その後自由討議を行った。

成果： 関連の文献だけでは理解できないミャンマーの現状やその社会の特徴について極めて多くのことを学ぶ機会となった。また本学の卒業生である講師より急速にグローバル化が進む世界の中で学生としてどのようなことを在学中に学ぶべきか等について極めて有益な助言を得ることができた。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年7月24日(金)

講師名： NPO 法人 LINK 元代表 木村 茂 氏

内容： タイの山間部において長年地元住民による持続的な森林保護活動に従事してきた講師より、森林保護と地域住民の生活をどの様にリンクさせながら持続可能な形で運動を継続していけばよいのか等について極めて興味深い説明を受け、その後自由討議を行った。

成果： 国際協力の重要な担い手の一つである NGO の立場から見た、国際協力の在り方や NGO 活動の有効性とその限界について理解することが出来、今後の望まשיき NGO のあり方についても考える一助となった。

対象演習： 演習B

実施日： 2015年8月2日(日)～8月6日(木)

実施都市： ヤンゴン(ミャンマー)

実施施設： JICA, JETRO, ヤンゴン大学他

内容： 8月2日より8月6日までの予定でミャンマー政府機関(国家計画経済開発省)、ヤンゴン大学(法制度整備支援プロジェクト)、JICA ミャンマー事務所、中央大学ミャンマー白門会、ミャンマー日本・人材育成センター、NPO 法人ミャンマー・日本カルチャーセンターヤンゴン事務所及び関連僧院学校、ティラワ経済特別区等を訪問した。

成果： 現地調査時においては法制度整備支援班、産業人材育成班、持続可能な観光開発班に分かれ夫々の問題意識に基づくインタビュー調査を行いミャンマーが抱える各分野での開発課題に関する現状と課題、更に日本等からの国際協力の支援の可能性について包括的な理解を深めることが出来た。

対象演習： 演習B

実施日： 2015年11月17日(火)

実施都市： 東京都江東区

実施施設： 大和総研

内 容： ミャンマーでの現地実施調査を実施した B ゼミ・法制度整備支援班の国内での補足調査として長年ミャンマーにおいて特に外国企業の誘致に関する法制度の整備等で活躍している大和総研本社を訪問しインタビュー調査を行った。

成 果： 現地調査で必ずしも十分に収集できなかった重要な資料やデータ等の入手が出来、更に大和総研が協力し現地でその最終的段階にあるヤンゴン証券取引所開設に関する経緯や今後期待される効果等について理解することが出来た。

講演会： 演習 A・B・C 合同ゼミ 2016 年 1 月 22 日(金)

講師名： JICA 国際協力専門員 杉山 俊士 氏 (元 FAO 職員)

内 容： 開発途上国における水産セクターの現状と問題点について幅広い観点からの説明を受けた。また現在日本も含めた世界全体で大きな課題となっている食料確保と食の安全について水産分野からみた課題と今後の可能性について議論を行った。

成 果： 文献だけではなかなか理解しがたい開発途上国の水産分野における諸問題について豊富な映像資料に基づく説明を受け十分理解することが出来た。

F L P 演習 C

<テーマ>

国際協力論（上級）

<授業の概要>

これまで履修してきた「演習 A」及び「演習 B」での学習を十分に踏まえながら、各人が開発途上国の開発問題や国際協力の在り方等に関する個別のテーマを設定し論文の形で取り纏めることを目指す。

<活動内容>

2015 年度のゼミでは、前期においては受講生が国際協力における各人の関心領域やそこでの問題意識についてゼミの中で発表・討論を行いながら各人の最終的な論文のテーマ設定ための準備を行った。併せて演習の進捗やゼミ員の理解促進のため国際協力の現状等をやや批判的に取り上げた文献の輪読を行い、更に国際開発支援に関する理論的な枠組みや主要援助機関による国際協力の現場での具体的な取り組みについて随時紹介した。後期では激動する国際関係や新たな援助潮流について纏められた文献の輪読や各自の論文作成の進捗に応じ中間発表と討論を行いながらゼミ員が各々の最終論文を完成させた。

上記の他、C ゼミ独自の学習に加え、(1)外部講師を招聘しての講話、(2)国際協力関連施設の訪問等を実施することにより国際協力のより総合的・包括的な理解の促進に努めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

見学調査： 演習 A・B・C 合同ゼミ 2015 年 4 月 25 日(土)

訪 問 先： 国際協力機構(JICA)地球ひろば（市ヶ谷）

内 容： 開催中の「開発途上国の食料問題」を視察し、併せて帰国直後の青年海外協力隊員より任国での活動状況等についての説明を受け、協力隊の役割や具体的な活動の詳細について質疑応答を行った。

成 果： 日本の ODA による開発途上国への食料支援を展示資料等をもとに確認し、また青年海外協力隊の概要や現場での活動の詳細についても学び、併せて併設されている JICA 図書館の利用法についても説明を受けた。

講 演 会： 演習 A・B・C 合同ゼミ 2015 年 5 月 22 日(金)

講 師 名： JICA 本部アフリカ部参事役 飯村 学 氏

内 容： 現在最も厳しい貧困問題を抱えているアフリカ地域の現状とその特徴について包括的な説明を受け、今後の対アフリカ協力の進め方等について自由討議を行った。

成 果： アフリカ問題の本質とそうした開発問題に対する日本を含めた先進諸国や国際機関により国際開発支援のより効果的な進め方について深く学ぶ機会となった。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年7月10日(金)

講師名： 中央大学ミャンマー白門会 北澤 仁 氏 (中央大学法学部卒業)

内容： 現在大きな注目を集めているミャンマーの現状、特に民主化の今後の進展等について現地に長く滞在している講師より多角的な視点から説明を受け、その後自由討議を行った。

成果： 関連の文献だけでは理解できないミャンマーの現状やその社会の特徴について極めて多くのことを学ぶ機会となった。また本学の卒業生である講師より急速にグローバル化が進む世界の中で学生としてどのようなことを在学中に学ぶべきか等について極めて有益な助言を得ることができた。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2015年7月24日(金)

講師名： NP0 法人 LINK 元代表 木村 茂氏

内容： タイの山間部において長年地元住民による持続的な森林保護活動に従事してきた講師より、森林保護と地域住民の生活をどの様にリンクさせながら持続可能な形で運動を継続していけばよいのか等について極めて興味深い説明を受け、その後自由討議を行った。

成果： 国際協力の重要な担い手の一つである NGO の立場から見た、国際協力の在り方や NGO 活動の有効性とその限界について理解することが出来、今後望ましき NGO のあり方についても考える一助となった。

対象演習： 演習C

実施日： 2015年12月4日(金)

実施都市： 長野県飯田市

実施施設： 飯田市公民館

実施内容： Cゼミにおいて取り上げた、現在開発支援で注目されている「ソーシャルキャピタルの醸成」について、国際的にも注目を浴びている長野県・上田市の公民館を中核とする地域力向上モデル」の実態と現状を探るため同市でのインタビュー調査を実施した。

成果： 長野県飯田市における長年の地域住民による住民自治の歴史や公民館の有効利用による住民間のソーシャルキャピタルの醸成とそれに基づく全体の地域力向上の現状及び同市が現在同モデルに基づきフィリピンで展開している国際協力の有効性について理解を深めることが出来た。

講演会： 演習A・B・C合同ゼミ 2016年1月22日(金)

講師名： JICA 国際協力専門員 杉山 俊士 氏 (元 FAO 職員)

内容： 開発途上国における水産セクターの現状と問題点について幅広い観点からの説明を受けた。また現在日本も含めた世界全体で大きな課題となっている食料確保と食の安全について水産分野からみた課題と今後の可能性について議論を行った。

成 果 : 文献だけではなかなか理解しがたい開発途上国の水産分野における諸問題について豊富な映像資料に基づく説明を受け十分理解することが出来た。

(7) 野末 裕史 (全学連携教育機構・特任准教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

東アジアの経済開発

<授業の概要>

第1回のオリエンテーションおよびガイダンスにつづき、第2回以降では、毎週の授業に向け、グループ研究をおこない、サブゼミなどを通じて積極的な活動をした。授業中には、グループ発表と質疑応答につづき、担当教員によるコメントと追加的な説明を含めて、色々な指導がおこなわれた。

また、FLP 演習 B および C に所属する上級生から指導や助言を受ける機会があった。具体的には、合同の授業では上級生が質疑やコメントをおこない、その他にも個人およびグループベースでは、個別の指導や助言があった。

<活動内容>

本ゼミでは、まず個人およびグループベースでの研究をおこない、また毎週の授業では活発な議論をおこなうことにより、ゼミ生の学術水準を高めるだけでなく、ゼミ生同士の親睦を深め、学生生活をより有意義にし、各ゼミ生が所属する学部において帰属するゼミでの研究に資するべく研鑽を積み、留学や進路(就職活動や大学院進学など)、および社会人になった後のことも考え、人格的に成長することを目標として、積極的な活動を展開した。

具体的には、数回の親睦会、定期的な課題図書購読と感想文の提出、各種公開研究会等への任意参加などを実施した。

さらに、2015年8月12日から14日には、二泊三日の日程で、中央大学野尻湖研修施設において、FLP 演習 B および C との合同で、夏期合宿をおこなった。合宿では、グループ研究発表をおこなうと共に、スポーツ、レクリエーションや懇親会を実施して、親睦を深めた。

また、2016年2月10日から12日には、二泊三日の日程で、山梨県笛吹市の中央大学提携宿泊施設において、FLP 演習 B および C との合同で、春期合宿をおこなった。合宿では、グループ研究発表をおこなうと共に、スポーツ、レクリエーションや懇親会を実施して、親睦を深めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A

実施日： 2015年9月14日(月)～9月17日(木)

実施場所： 台北市(台湾)

実施内容： 台北に進出している日本企業の現地法人や出先機関を訪問し、日本企業が近隣諸国での主要な進出先のひとつである台北において、どのような活動をおこない、現地のマクロ経済動向により、一方では人件費の高止まり、他方では景気の伸び悩みが懸念される実態を踏まえて、具体的にどのような課題に直面し、どのような方針でそれらに対応しているのかを聴取した。また、日本の本社と

タイでの現地法人や支店との間において、役割の分担や相互の関係がどのようなになっているのか、現地出向者や長期出張者はどのように考えながら毎日の仕事に従事しているのかを聞き取った。また、中国との経済関係がより緊密化する台湾において、サービス輸出入などをおこなう上でのやりがいや苦勞を尋ねた。

成 果 : 現地を訪問しなければ分からないような事例に触れ、新たな事実や当事者の主張などを知ることが出来た。

FLP 演習 B

<テーマ>

東アジアの経済開発と日本人の貢献

<授業の概要>

第1回のオリエンテーションおよびガイダンスにつづき、第2回以降では、毎週の授業に向け、グループ研究をおこない、サブゼミなどを通じて積極的な活動をした。授業中には、グループ発表と質疑応答につづき、担当教員によるコメントと追加的な説明を含めて、色々な指導がおこなわれた。

また、FLP 演習 A に所属する下級生に助言や指導をおこなう機会があり、また FLP 演習 C に所属する上級生から助言や指導を受ける機会があった。具体的には、合同の授業では下級生に対して質疑やコメントをおこない、また上級生が本ゼミ生に対して質疑やコメントをおこなった。その他にも個人およびグループベースで、下級生に対する個別の指導や助言を与える一方、上級生から個別の指導や助言があった。

<活動内容>

本ゼミでは、昨年の FLP 演習 A に引き続き、まず個人およびグループベースでの研究をおこない、また毎週の授業では活発な議論をおこなうことにより、ゼミ生の学術水準をさらに高めるだけでなく、ゼミ生同士の親睦を一層深め、学生生活をより有意義にし、各ゼミ生が所属する学部において帰属するゼミでの研究に具体的かつ積極的に役立てるべく研鑽を積み、進路（就職活動や大学院進学など）、および社会人になった後のことも考え、人格的にさらに成長することを目標として、きわめて積極的な活動を展開した。

具体的には、数回の親睦会、定期的な課題図書購読と感想文の提出、各種公開研究会等への任意参加などを実施した。

さらに、2015 年 8 月 12 日から 14 日には、二泊三日の日程で、中央大学野尻湖研修施設において、FLP 演習 A および C との合同で、夏期合宿をおこなった。合宿では、グループ研究発表をおこなうと共に、スポーツ、レクリエーションや懇親会を実施して、親睦を深めた。

また、2016 年 2 月 10 日から 12 日には、二泊三日の日程で、山梨県笛吹市の中央大学提携宿泊施設において、FLP 演習 A および C との合同で、夏期合宿をおこなった。合宿では、グループ研究発表をおこなうと共に、スポーツ、レクリエーションや懇親会を実施して、親睦を深めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B

実施日： 2015 年 10 月 28 日(水)～11 月 1 日(日)

実施場所： 上海(中華人民共和国)

実施内容： 演習 C と合同で、上海にある日系企業および日系諸機関を訪問し聞き取り調査をおこなった。これらの企業が現地の消費者およびビジネスを対象として製品・サービスを製造販売するにあたり、具体的にどのような課題に直面し、そ

れらにどのように対処し、どのような成果を上げているのかを聴取した。また、今後の課題についても各担当者の意見を聴取した。その上で、帰国後独自の分析をおこない結果を発表した。

成 果 : 現地を訪問しなければ分からないような事例に触れ、新たな事実や当事者の主張などを知ることが出来た。

FLP演習C

<テーマ>

東アジアの経済開発と日本人の貢献（上級）

<授業の概要>

第1回のオリエンテーションおよびガイダンスにつづき、第2回以降では、毎週の授業に向け個人研究をおこない、またFLP演習AおよびB所属のゼミ生（下級生）との合同で実施したサブゼミなどを通じて積極的に活動をした。授業中には、発表と質疑応答につづき、担当教員によるコメントと追加的な説明を含めて、総合的な指導がおこなわれた。

上記でも触れたように、サブゼミや個別指導を通じて、FLP演習AおよびBに所属する下級生に助言や指導をおこなう機会があり、また逆に下級生から意見や感想を聴取する機会もあった。具体的には、合同の授業では下級生の発表に対して本ゼミ生が質疑やコメントをおこない、逆に下級生は本ゼミ生の発表に対して、その内容に関して質問を投げかけ感想を述べた。また、授業外でも、下級生が本ゼミ生に対して解説や指導、助言などを求め、本ゼミ生はこれに対応した。

<活動内容>

本ゼミでは、個人ベースでの研究をおこない、また毎週の授業では担当教員やFLP演習AおよびB所属のゼミ生（下級生）を相手として活発な議論をおこなうことにより、ゼミ生の学術水準をさらに高めるだけでなく、FLP演習AおよびB所属ゼミ生との親睦を深め、学生生活をより有意義にし、各ゼミ生が所属する学部において帰属するゼミでの研究に具体的かつ積極的に役立てるべく研究内容を構成し、進路（就職活動や大学院進学など）、および社会人になった後のことも考え、人格的にさらに成長することを目標として、きわめて積極的な活動を展開した。

具体的には、数回の合同親睦会、定期的な課題図書購読と感想文の提出、各種公開研究会等への任意参加などを実施した。

さらに、2015年8月12日から14日には、二泊三日の日程で、中央大学野尻湖研修施設において、FLP演習AおよびBとの合同で、夏期合宿をおこなった。合宿では、グループ研究発表をおこなうと共に、スポーツ、レクリエーションや懇親会を実施して、親睦を深めた。

また、2016年2月10日から12日には、二泊三日の日程で、山梨県笛吹市の中央大学提携宿泊施設において、FLP演習AおよびBとの合同で、夏期合宿をおこなった。合宿では、グループ研究発表をおこなうと共に、スポーツ、レクリエーションや懇親会を実施して、親睦を深めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習C

実施日： 2015年10月28日(水)～11月1日(日)

実施場所： 上海(中華人民共和国)

実施内容： 演習Bと合同で、上海にある日系企業および日系諸機関を訪問し聞き取り調査をおこなった。これらの企業が現地の消費者およびビジネスを対象として製品・サービスを製造販売するにあたり、具体的にどのような課題に直面し、そ

れらにどのように対処し、どのような成果を上げているのかを聴取した。また、今後の課題についても各担当者の意見を聴取した。その上で、帰国後独自の分析をおこない結果を発表した。

成 果 : 現地を訪問しなければ分からないような事例に触れ、新たな事実や当事者の主張などを知ることが出来た。

（８）三次 啓都（全学連携教育機構・客員教授）

FLP演習B・C

<テーマ>

開発途上国における地域社会の持続的開発

<授業の概要>

多くの開発途上国にとって、地域社会、特に農村部の地域社会は国の基礎的な社会単位であり、多数の人口が分布し、また国の経済の基幹である第一次産業を支えている。しかし、農村部における人々の生活水準は一般的に低く、住民の生計の多くは農林水産業、すなわち森・水・土地といった自然環境に依存している。経済・社会開発の二極化が途上国で進むなか、発展の進む新興国においてさえ、都市と地方の国内格差が開き、農村部を中心とした地域社会の開発は大きな課題となっている。

近年の経済のグローバル化は、市場を通じて途上国の第一次産業にも大きな影響を与え、また自然環境に依存する生計は、地球規模の気候変動の影響に対して極めて脆弱である。これは必ずしも開発途上国に限定されているわけではなく、日本を含む先進国においても同様であるが、開発途上国においては不十分なセーフティーネットや社会インフラの整備の点において影響がより深刻となっている。

開発途上国が抱える課題は様々であるが、本演習では地域社会に焦点を当て、途上国の開発政策や援助政策の中でその位置づけを明らかにし、地域社会の構造や概念及び地域住民を取り巻く環境を把握しながら課題の発見と解決のための視点を習得する。そのうえで、地域社会の持続的開発について、地球環境問題（気候変動対策、生物多様性）やガバナンスと関連付けながら、地域資源の利用と住民参加に着目して論ずる。更に日本と開発途上国（アジア、アフリカ地域）の事例分析を通じて双方の特徴や共通項を見出し、国内・海外の双方で取りうるべきアプローチについて議論を深める。その際、地域社会開発にむけた最近の動きについても触れてみたい。例えば、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを背景に、“スポーツを通じた開発”の議論が日本のODAにおいても活発化している。折しも、日本でも地域創生が重要な政策課題となり、地域社会に対する政策的な議論と取り組みが始まっている。既に先行している途上国の地域社会開発の実践から、参考にすべき知見が得られるのではないだろうか。

なお演習では、文献調査(英文含む)、基礎的なプレゼンテーションの実践、農村調査の基礎的アプローチ、プロジェクトの立案方法を学ぶ。将来、国内外の地域社会問題やコミュニティー開発に関わりたい者を歓迎する。

<活動内容>

前期のゼミでは、主に開発援助の変遷と援助アプローチ、持続可能な開発目標（SDGs）の概要、近年の開発途上国の経済発展と貧困状況、開発援助における農村社会開発の位置づけ及び農村の社会構造の基礎について、それぞれ理解を進めた。特に農村の社会構造については、途上国の例のみではなく、マルチメディア教材を用いて日本の農村部の事例についても学んだ。内容は、

第二次世界大戦後から開始された農村女性を対象とした生活改善運動、農業従事者を対象にした技術普及活動の概要と実践、また現代においては、徳島県上勝町の地域資源の活用による地方活性化事例について、教材の視聴とディスカッションを通じ、日本の農村部の特徴や発展・衰退の経緯を把握した。また、後期のゼミに先立ち、夏休み期間中に国際協力機構（JICA）本部でゼミを開催し、前期のまとめと海外実態調査の進め方について議論を行った。

後期ゼミでは、最初に海外実態調査先の候補先選定について議論を進めた。貧困の度合いや農村開発の状況などの観点から、カンボジア及びネパールを候補先として選定し、調査日程案や訪問先の都合を比較検討した結果、ネパールを海外実態調査先とした。事前の学習を兼ねて、ネパールの農村部に関する文献講読を行い、特にネパールにおける地方行政の機能と役割、住民組織の特徴、カースト制度、農村部のインフラ整備、外部者のコミュニティーへの関与方法をテーマとして演習での議論を進め、最終的に実態調査での調査仮説を設定した。併せて、訪問先である国際 NGO ラブ・グリーン・ネパールの活動についてインターネット上で情報収集を行い、現地での調査行程及び調査項目の準備を行った。また、4 月に発生したネパールの地震に関し、日本赤十字社や NGO の報告会に参加し被災の実態と復興支援の状況を学んだ。海外実態調査は 12 月 5 日～10 日にかけて行われ、その結果を学内で発表し報告書として取りまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B・C

実施日： 2015 年 12 月 5 日(土)～12 月 10 日(木)

実施都市： カトマンズ(ネパール)

実施施設： Love Green Nepal

実施内容： ネパール山岳地の農村開発の課題と現状を調べるために、JICA の資金支援を受けているラブグリーンネパール（以下、LGN）を調査対象として、LGN の現地事務所訪問及び支援対象農村部（カブレ郡及びシンズバルチョーク郡）のフィールド調査を行った。調査は、主に LGN 関係者との意見交換及び調査対象村の村人からのヒアリングを通じて行った。また、JICA ネパール事務所を訪問し、担当者より援助の概況説明を受けた。

成果： 海外実態調査の調査クエスチョンとして、外部者（LGN の日本人スタッフ及びネパール人スタッフ）と内部者（農村部の住民）の関係性をどのように維持し、また農村部の住民と信頼関係をどのように醸成しているのか、という設問を設けた。この設問に対し、外部者と内部者双方から聞き取りを行い、コミュニケーションを良好にすることで内部者からの信頼を勝ち取るという事前の調査仮説の検討を行った。JICA ネパール事務所では、マクロの視点から、ネパール政府の開発方針と JICA 開発援助戦略、農村開発の現状と課題及びネパールを襲った地震に関して被災状況と緊急援助から復興支援までの概況を学んだ。

IV. スポーツ・健康科学プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

少子高齢化社会の到来のみならず、高度テクノロジー化とIT化に伴い、心身の健康の維持増進がこれまで以上に重要になっています。そして、スポーツ・健康科学の発展と普及は、21世紀の日本社会にとって不可欠なものとなっています。今日我が国の健康問題の多くは、運動不足や情報横溢と密接にかかわるライフスタイルの変化や生活文化に起因しています。そのような中で、特にスポーツや運動活動に求められる期待値は大きく、それらを取り入れた日常生活の質的向上の取り組みが随所で見られるようになっています。近年、地域コミュニティにおけるスポーツ基盤の整備や生涯スポーツの機会の提供が進んでいます。他方、地球規模でのスポーツの発展には、目を見張るものがあります。ボーダーレス化や商業化が急速に進み、レジャー・イベント・プロスポーツ・メディア等のスポーツ関連領域は巨大な市場を形成しています。このことは同時に、スポーツを媒介とした国際交流や国際貢献の可能性がさらに大きくなっていることを意味します。

このような状況を背景に、「スポーツ・健康科学プログラム」は学際的な性格を持つスポーツ科学と健康科学を基盤とし、スポーツや健康に纏わる問題を健康・医療・文化・ビジネス・サービス・行政等との関連の中で多面的かつ総合的に考察し、この分野に寄与できる人材の育成を目的としています。

本プログラムでは、従来の体育ないしはスポーツ講義・実技という枠組みではない多様なアプローチが可能になり、総合的かつ体系的な能力が養成されます。つまり、各学部におけるそれぞれの専門科目を履修しながら、当プログラムのスポーツ・健康科学の領域の中で各人が興味をもつ分野を深めていくことができます。そこでは、本プログラム独自に開講する演習科目を通じて専門的な研究を行います。

スポーツや健康に関わる社会的ニーズの増大と多様化によって、それに対応できる資質を備えた人材が今後さらに求められます。これまで学校教師の養成を主眼としてきたいわゆる教育・体育系学部とは異なり、本プログラムが社会の幅広い領域にマルチスペシャリストを送り出すことの意義は大きいのです。

2. 2015年度演習科目担当者および履修者

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
宮崎 伸一	法	2	－	－	A単独
村井 剛	法	8	5	－	A・B単独
市場 俊之	商	2	4	7	A・B・C合併
小峯 力	理工	7	6	－	A・B単独
加納 樹里	文	4	4	1	A単独・B・C合併
布目 靖則	文	2	－	4	A・C単独
森 正明	文	5	－	1	A・C単独
小林 勉	総合政策	6	6	7	A・B・C単独
合計		36	25	20	

3. プログラムスケジュール

- 4月 履修ガイダンス
第一回部門授業担当者委員会
- 5月 学外活動（オリエンテーション合宿）
- 6月 2016年度募集に伴う総合ガイダンス
- 7月 第二回部門授業担当者委員会
- 8月 第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 10月 2016年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
第四回部門授業担当者委員会
- 11月 2016年度募集に伴う選考試験
第五回部門授業担当者委員会
- 1月 学内活動（期末成果報告会）
- 3月 第六回部門授業担当者委員会
FLP修了発表
FLP修了証書授与

4. プログラムの活動

<学内活動>

期末成果報告会

実施日： 2016年1月26日（火） 12:40～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 6204 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

中大杯企画参加者による成果報告

<学外活動>

オリエンテーション合宿

実施日： 2015年5月30日（土）～31日（日）

実施都市： 東京都八王子市

実施場所： 八王子セミナーハウス

実施内容： レクリエーション・スポーツ活動

グループワーク・ディスカッション

特別講演会(下記に記載)

講演者： 志賀 健亮 氏（株式会社読売巨人軍）

演題： 巨人軍取り組みからみるスポーツの業界の今について

5. 2015年度までのスポーツ・健康科学プログラム修了生の主な就職・進学先

電通、TBSテレビ、Jリーグフォト、日刊スポーツ新聞西日本、ゴールドウィン、ランナーズ、琉球スポーツキングダム、川崎フロンターレ、楽天野球団、山形新聞社、三菱東京UFJ銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、静岡銀行、山梨中央銀行、足利銀行、川崎信用金庫、大和証券、住友生命、損害保険ジャパン、丸紅、日立製作所、小松製作所、神戸製鋼所、大林組、麒麟ビール、サッポロビール、ロッテ、富士通、富士ゼロックス、ヤマト運輸、佐川急便、東日本旅客鉄道、近畿日本ツーリスト、東京テアトル、KDDI、NTTコミュニケーションズ、コクヨ、テルモ、セブンイレブン・ジャパン、日本公文教育研究会、休暇村協会、中央大学、地方公務員（東京都庁など）、東京学芸大学大学院、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻など

6. 演習教育活動

(1) 宮崎 伸一（法学部・教授）

F L P 演習 A

<テーマ>

障がい者スポーツ

<授業の概要>

①文献調査により、身体障がい、知的障がい、精神障がいを生物学的に理解し、障がい者の日常生活能力、社会生活能力を調査するための方法を構想する。

②各障がい者のスポーツ活動の実際を、大学周辺の学校、地域を訪問して調査する。

<活動内容>

①本年度は、知的障がいを生物学的に理解するため、いくつかの総説を輪読した。これは来年度の F L P 演習 B でも継続する予定である、また、他の障害である身体障がい、精神障がいについても F L P 演習 B にて実施する予定である。障がい者の日常生活能力、社会生活能力を調査するための方法に関しては、「方法を構想する」前の段階として、現行の測定法の調査を F L P 演習 B にて実施する予定である。

②本年度は、知的障がい者の活動の実態を知るため、日本知的障害者スポーツ連盟ナショナルチームの合宿の見学、こころみ学園・ココファーム&ワイナリーの見学を行った。また、チョークを作っている日本理化学工業の見学については、今年度は調整がつかず、実施できなかった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A

実施日： 2015 年 5 月 4 日(月)

実施都市： 東京都北区

実施施設： 東京都障害者総合スポーツセンター

実施内容： 日本知的障害者バスケットボール連盟ナショナルチームの合宿を見学し、選手の日頃の活動内容の聞き取り調査を行った。

成果： 日常的な練習時間は高校生の方が社会人より多い。全国障害者スポーツ大会の地区予選への出場、日本知的障害者スポーツ連盟主催のチャンピオンシップが国内での主な大会。海外の試合にも出場することがある。競技性の高い知的障害者スポーツの実態を知ることができた。

対象演習： 演習 A

実施日： 2015 年 9 月 18 日(金)

実施都市： 栃木県足利市

実施施設： ココファームワイナリーこころみ学園

実施内容： 栃木県足利市にあり、知的障害者の生活、就労の場である、こころみ学園とココファーム&ワイナリーの見学を行った。

成 果： こころみ学園に入園している園生のプロフィールを知ることができた。ココファーム&ワイナリーは福祉と就労が融合した場として成功していると思われた。

(2) 村井 剛 (法学部・准教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツ心理 (認知・行動) 部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ (モチベーション)、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めていきます。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は計画します。

また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、モチベーションビデオの作成を予定しています。

<活動内容>

- ①スポーツ選手のプレパフォーマンスルーティンに関する調査
- ②体育連盟射撃部の競技力向上サポート (心理テスト・ルーティンチェック・イメージトレーニング、目標設定等)
- ③ホームカミングデーにて現役中大スポーツ選手のプロモーション活動
- ④体育連盟バレーボール部のインカレ前応援イベントの企画、運営の実施
- ⑤各活動の反省、評価

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年12月14日(月)

実施都市： 東京都文京区

実施施設： 東京ドーム

実施内容： スポーツ振興および企業スポーツの取組みを見学調査した。

成果： 日本においてマイナースポーツとなるアメリカンフットボールの社会人選手権の試合現場を様々な視点で見学した。観客動員への試みとして、注目度の高い人材をメディア露出させる点、プレゼントや帰属意識を喚起する取組み、応援を積極的に行えるようなツールやチアリーディングメンバーの充実等、中大のスポーツ振興にも参考になる視点が見られた。

FLP演習B

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めていきます。スポーツ愛好者、競技者、指導者、それぞれの立場からスポーツ心理を学んでいけるよう授業展開は計画します。

また、中央大学のスポーツ振興を目的として、体育連盟の運動部のプロモーション方策の検討、モチベーションビデオの作成を予定しています。

<活動内容>

- ①スポーツ選手のプレパフォーマンスルーティンに関する調査
- ②体育連盟射撃部の競技力向上サポート（心理テスト・ルーティンチェック・イメージトレーニング、目標設定等）
- ③ホームカミングデーにて現役中大スポーツ選手のプロモーション活動
- ④体育連盟バレーボール部のインカレ前応援イベントの企画、運営の実施
- ⑤各活動の反省、評価

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年12月14日(月)

実施都市： 東京都文京区

実施施設： 東京ドーム

実施内容： スポーツ振興および企業スポーツの取組みを見学調査した。

成果： 日本においてマイナースポーツとなるアメリカンフットボールの社会人選手権の試合現場を様々な視点で見学した。観客動員への試みとして、注目度の高い人材をメディア露出させる点、プレゼントや帰属意識を喚起する取組み、応援を積極的に行えるようなツールやチアリーディングメンバーの充実等、中大のスポーツ振興にも参考になる視点が見られた。

(3) 市場 俊之 (商学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

スポーツとスポーツ運動の機能

<授業の概要>

「人間と運動」、「スポーツの歴史」、「スポーツ運動の成り立ち」などを全体テーマとする。それぞれのテーマを分担調査し、その内容を報告・討議する。(＊テーマは変更されることがある。)

さらに、それぞれの興味関心を優先させた個別テーマを調査し口頭による報告をする。口頭報告時の検討を経た後、報告書を作成する。

<活動内容>

学内定時授業においては、昨年度に引き続き、文献講読と各自のテーマを深化させた。文献講読の対象としたのは、①オモ・グループ (2004) スポーツと人間、世界思想社、と②日本スポーツ振興センター/秩父宮記念スポーツ博物館 (2011) スポーツ文化第7号、日本スポーツ振興センター/秩父宮記念スポーツ博物館、である。スポーツ振興政策など各自のテーマについて口頭での報告と討論を行った。また、講演会を企画実施した。

学外における活動では、見学調査として学生スポーツの実情を観察した。また、赤倉温泉スキー場にて日本のスノースポーツにおける「インバウンド」についての実態調査を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年5月19日(火)

講演者名： 田中 暢子 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 21141号室

実施内容： Tokyo2020パラリンピック - 障がい者スポーツ振興・発展の歴史・現状・展望 -

成果： スポーツがすべての人々に共有可能なものだとは認識できた。そして、ゼミ生および健常者が日常において障がい者と相補的に生活すること、さらに全世代にまたがるスポーツないしは身体活動の必要性と有用性を確認し、自らの生活に活かす契機となった。

対象演習： 演習B・C

実施日： 2015年5月31日(日)

実施都市： 東京都調布市

実施施設： アミノバイタルフィールド

実施内容： 関東大学アメリカンフットボール選手権

成 果 : 人数は去年の調査時とほぼ変わらず。大会の広告は、学内（中大）に張られていたものの、実際の観客では、関係者がほとんどで、若者はOBだけであり、私たち以外にいなかった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 11 月 1 日(日)

実施都市： 東京都世田谷区

実施施設： 日本体育大学世田谷キャンパス

実施内容： 関東大学バスケットボール

成 果 : 観客の人数はアメフトとほぼかわらないか多いくらいだが、若者が多く目立った。大学の友人が出ているから、などの理由で来て、割引入場で入るひとも多いようだ。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2015 年 11 月 8 日(日)

実施都市： 東京都目黒区

実施施設： 東京大学 駒場 I キャンパス

実施内容： 大学女子ラクロス

成 果 : この試合は、中央大学女子ラクロス部が二部昇格をかけた試合だったためか、関係者のみならず、男子ラクロス部をはじめ、女子ラクロス部員の友人も多く訪れていた。試合に関する広告は、一週間前くらいからチラシを配っていたが、そのチラシを見ただけで来る人は、よほど家が近い、友人がラクロス部にいるなどの理由がない限り、行かないのではないかという予測である。このことから、若者（中大生）のみるスポーツへの誘致は、体育会系部活に入っている部員と、友人ないし知人になることが、一番の近道なのではないかという結論に至る。

対象演習： 演習B・C

実 施 日： 2015 年 11 月 22 日(日)

実施都市： 神奈川県横浜市

実施施設： 横浜スタジアム

実施内容： 関東大学アメリカンフットボール選手権

成 果 : 人数は去年の調査時とほぼ変わらず。大会の広告は、学内（中大）に張られていたものの、実際の観客では、関係者がほとんどで、若者はOBだけであり、私たち以外にいなかった。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2015 年 12 月 4 日(金)

実施都市： 東京都世田谷区

実施施設： 駒沢体育館

実施内容： 全日本大学バレーボール選手権

成 果： 中央大学バレーボール部には、昨年の夏に開催された、ワールドカップバレーで日本代表に選ばれた、石川祐希が所属している。中央大学バレー部はこれまでもリーグ戦優勝は何度も果たしてきた。しかし、一昨年に比較し、大学バレーの観客は大幅に増した。これは、ラクロスで述べた「体育連盟所属部員と友人になる」という方法以外の方法でも、若者のみるスポーツにたいする関心度があがるということが、新たにわかった。しかしながら、この男子バレーボールに関しては、全日本という大きな舞台で、若者たちがアイドルユニットのような存在としてメディアに大きく取り上げられたことが、非常に多くの若者をひきつけた要因といえよう。したがって、みるスポーツへの誘致方法としては、体育連盟所属部員と友人・知人になることが、やはり一番身近で、近道なのではないか、という結論に至った。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2016年2月4日(木)

実施都市： 新潟県妙高市

実施施設： 赤倉ワクイホテル、赤倉温泉スキー場

実施内容： スキー場に訪れる外国人の実態調査および宿泊業経営者との懇談

成 果： メディア報道のように「インバウンド」の実態が確認できた。インバウンドが恒常化するとは限らないため、日本人客の（再）獲得が中長期的な課題であることは変わらないことがわかった。

(4) 小峯 力 (理工学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希求し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、大地震（大津波）等の自然災害に対する防災力強化（自助・共助・公助）の体系化も図るものとする。

<活動内容>

小峯ゼミは、LIFESAVING の本旨から、一元的な救急救命から、他者を救い守る「利他」に着目し、その思想（精神）の源となる「生命倫理」を論じ、各テーマについての議論・討論を深めていった。また、随時学内外からゲストスピーカーを招いて、実践からの「利他」を学んだ。そして「利他」の精神のもと、スポーツを通して社会生活をより善く生きる「ヒューマン・ウェルネス」を骨子とした実践を展開した。

前期は、中央大学 OB である H 氏と S 氏からの依頼により、読売巨人軍に救急救命（G Hands プロジェクト）を実施し、スポーツと生命教育に関する理解を深めた。このプロジェクトは、巨人軍のチームメンバーとファン、職員らが手を取り合い、社会貢献の輪を作っていくというものであり、その背景には、シートノック中に亡くなられた木村拓也コーチの存在もある。当日に向けて、H 氏や S 氏と打合せを重ね、プロジェクトの趣旨について理解を深め、選手やスタッフへの指導に向けて、ゼミ生は心肺停止状態に対する胸骨圧迫、AED の実践を繰り返した。当日は担当教授の指導のもと、ゼミ生一人一人が選手とスタッフに救急救命の指導を実施した。指導が深まるにつれ、選手・スタッフの表情も真剣となり、心臓圧迫のカウントも、会場に響きわたり、球場は一体感に包まれた。ゼミ生は、スポーツと生命教育について理解を深めるだけでなく、一流とは何か、それを学ぶ貴重な機会でもあった。

夏季休暇期間には、村井ゼミとの合同合宿を実施した。ここでは、多くの人に中大に関心を持ってもらい、中大生自身の愛校心が強くなることで、幸せな学生生活を送ってほしいという観点のもとに『中大スポーツ発展にはなにが必要か』、『具体的にどのようなプロジェクトを進めていくか』議論した。1泊2日という限られた時間の中で、ゼミ生は、他ゼミのゼミ生とコミュニケーションをとることで、より相手に自分の考えを伝達するスキルを磨くだけでなく、自分たちの目標を再認識し、そのための具体的な筋道を立てることができた。

後期は、合同合宿で議論したことも踏まえ、中大スポーツ発展に向けた実践を展開した。具体的には、依頼のあったサッカー部の集中応援日（10月24日（土）関東大学サッカーリーグ戦、第19節駒澤大学戦）の集客に関して、企画から当日の運営まで携わった。主な取り組みとして、

ビラ配りの手伝いや SNS、授業内での告知を実施した。また、当日は企画等の取り組みの評価、サッカー部のチーム力向上に必要なものを把握するため、理工学部との協同による来場者と部員へのアンケートを実施した。その結果、来場者のほとんどが満足しており、継続した観戦意向をもっているという結果が得られた一方、新規で観戦に訪れた学生が少ない等の課題も散見された。加えて、部員へ行ったアンケートからチームとしての一体感を今後高めていく必要があることが明らかとなった。これらの経験を通して、ゼミ生はスポーツの現場での広報活動や大学全体のスポーツ振興を進めることの難しさ等、多くのことを学んだ。

以上のような年間を通した実践から、来年度は中大スポーツ振興をこれまで以上に盛り上げるため、次の 2 つの企画を展開する予定である。1 つ目は、中央大学体育連盟部会集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS) と呼ばれ、ゼミが体育連盟部会と共同で試合の集客に協力する、部員に対するアンケート調査とその分析を行い、選手やチーム全体の課題解決策を提供する等の企画である。2 つ目は、Chuo Sports Fun Club と呼ばれ、体育連盟の試合時に観戦をよびかけ、集まったメンバーで観戦、体連生も踏まえた交流を行う等の観戦コミュニティを形成する企画である。上記 2 つの企画を展開することで、新規の中大生による試合観戦者を増やし、中大スポーツを盛り上げていく。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A・B

実施日： 2015 年 6 月 25 日 (木)

実施都市： 神奈川県川崎市

実施施設： 読売ジャイアンツ球場

実施内容： 救急救命 (G hands プロジェクト) の一環として、選手・スタッフへ心肺停止状態に対する胸骨圧迫、AED の実践を展開した。

成果： 選手・スタッフの救急救命に関する知識・実践への理解が深まり、今後のスポーツの現場での広がりが期待される。ゼミ生は、スポーツと生命教育について理解を深めるだけでなく、一流とは何か、それを学ぶ貴重な機会であった。

対象演習： 演習 A

実施日： 2015 年 9 月 23 日 (水)

講演者名： 志賀 健亮 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 第一体育館 G1125 号室

実施内容： 救急救命 (G hands プロジェクト) に関する総括、スポーツの現場で働くことについて講演していただいた。

成果： 現在のスポーツの現場が抱える課題を理解し、そこで働くためには何が求められ、必要であるのか考察することができた。

対象演習： 演習 A・B

実 施 日： 2015 年 9 月 7 日(月) ～9 月 8 日(火)

実施都市： 千葉県南房総市

実施施設： 富浦町周辺

実施内容： 『中大スポーツ発展にはなにが必要か』、『具体的にどのようなプロジェクトを進めていくか』議論した。

成 果： 中大への愛校心を育むためにスポーツを有効なツールとして、どのように絡めていくのか理解が深まるとともに、具体的な提案をすることができた。

F L P 演習 B

<テーマ>

- 1) スポーツと生命教育 (Lifesaving)
- 2) 大学スポーツ振興 (Sport for All)

<授業の概要>

救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、大地震（大津波）等の自然災害に対する防災力強化（自助・共助・公助）の体系化も図るものとする。

また、東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

<活動内容>

小峯ゼミは、LIFESAVING の本旨から、一元的な救急救命から、他者を救い守る「利他」に着目し、その思想（精神）の源となる「生命倫理」を論じ、各テーマについての議論・討論を深めていった。また、随時学内外からゲストスピーカーを招いて、実践からの「利他」を学んだ。そして「利他」の精神のもと、スポーツを通して社会生活をより善く生きる「ヒューマン・ウェルネス」を骨子とした実践を展開した。

前期は、中央大学 0B である H 氏と S 氏からの依頼により、読売巨人軍に救急救命（G Hands プロジェクト）を実施し、スポーツと生命教育に関する理解を深めた。このプロジェクトは、巨人軍のチームメンバーとファン、職員らが手を取り合い、社会貢献の輪を作っていくというものであり、その背景には、シートノック中に亡くなられた木村拓也コーチの存在もある。当日に向けて、H 氏や S 氏と打合せを重ね、プロジェクトの趣旨について理解を深め、選手やスタッフへの指導に向けて、ゼミ生は心肺停止状態に対する胸骨圧迫、AED の実践を繰り返した。当日は担当教授の指導のもと、ゼミ生一人一人が選手とスタッフに救急救命の指導を実施した。指導が深まるにつれ、選手・スタッフの表情も真剣となり、心臓圧迫のカウントも、会場に響きわたり、球場は一体感に包まれた。ゼミ生は、スポーツと生命教育について理解を深めるだけでなく、一流とは何か、それを学ぶ貴重な機会でもあった。

夏季休暇期間には、村井ゼミとの合同合宿を実施した。ここでは、多くの人に中大に関心を持ってもらい、中大生自身の愛校心が強くなることで、幸せな学生生活を送ってほしいという観点のもとに『中大スポーツ発展にはなにが必要か』、『具体的にどのようなプロジェクトを進めていくか』議論した。1泊2日という限られた時間の中で、ゼミ生は、他ゼミのゼミ生とコミュニケーションをとることで、より相手に自分の考えを伝達するスキルを磨くだけでなく、自分たちの目標を再認識し、そのための具体的な筋道を立てることができた。

後期は、合同合宿で議論したことも踏まえ、中大スポーツ発展に向けた実践を展開した。具体的には、依頼のあったサッカー部の集中応援日（10月24日（土）関東大学サッカーリーグ戦、第19節駒澤大学戦）の集客に関して、企画から当日の運営まで携わった。主な取り組みとして、ビラ配りの手伝いや SNS、授業内での告知を実施した。また、当日は企画等の取り組みの評価、

サッカー部のチーム力向上に必要なものを把握するため、理工学部との協同による来場者と部員へのアンケートを実施した。その結果、来場者のほとんどが満足しており、継続した観戦意向をもっているという結果が得られた一方、新規で観戦に訪れた学生が少ない等の課題も散見された。加えて、部員へ行ったアンケートからチームとしての一体感を今後高めていく必要があることが明らかとなった。これらの経験を通して、ゼミ生はスポーツの現場での広報活動や大学全体のスポーツ振興を進めることの難しさ等、多くのことを学んだ。

以上のような年間を通じた実践により、ゼミ生は自身の専門性や課題を追求していく上で基盤となる思考・実践スキルを身につけることができたといえる。そこで、来年度は自身の専門性・課題をより追及していくために、担当教授の後楽園キャンパス（理工学部）のゼミ生との融合を展開していく。定期的な後楽園キャンパスのゼミ生との交流により、物事をより論理的かつ多角的に捉えることが可能となり、自身の専門性・課題をより深く探求することが可能となる。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年6月25日(木)

実施都市： 神奈川県川崎市

実施施設： 読売ジャイアンツ球場

実施内容： 救急救命（G hands プロジェクト）の一環として、選手・スタッフへ心肺停止状態に対する胸骨圧迫、AEDの実践を展開した。

成果： 選手・スタッフの救急救命に関する知識・実践への理解が深まり、今後のスポーツの現場での広がりが期待される。ゼミ生は、スポーツと生命教育について理解を深めるだけでなく、一流とは何か、それを学ぶ貴重な機会であった。

対象演習： 演習A・B

実施日： 2015年9月7日(月)～9月8日(火)

実施都市： 千葉県南房総市

実施施設： 富浦町周辺

実施内容： 『中大スポーツ発展にはなにが必要か』、『具体的にどのようなプロジェクトを進めていくか』議論した。

成果： 中大への愛校心を育むためにスポーツを有効なツールとして、どのように絡めていくのか理解が深まるとともに、具体的な提案をすることができた。

(5) 加納 樹里 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツ医学と健康科学の基礎を学び、スポーツ選手や社会人一般のパフォーマンス向上に役立てる。

<授業の概要>

教室授業は、年度始めは基礎的な課題を教員が指示し、履修生が文献をまとめ、発表・討論を行った。自分の活動フィールド（運動系サークル、部活動等）をもつゼミ生は、特に自分の大学生活にも役立つ項目を中心に学修をすすめた。

使用した主な参考資料・文献は、以下の通りである：「これからの健康とスポーツの科学」、「リカバリーの科学」、「トレーニング指導者テキスト（理論編）（実践編）」、「アスリートのための栄養・食事ガイド」、「放送大学大学院教材“スポーツ・健康医学”」、「臨床スポーツ医学誌」、「TANITA テクニカルレポート」、「からだのしくみ事典」等

<活動内容>

幅広く「コンディショニング」に役立つ理論と実習を身につけることを目的として活動した。以下に取り上げた主な項目と活動内容を示す。

- 1) 身体組成の説明（B 生担当）と実測
- 2) エネルギー供給系
- 3) 東京パラリンピックを巡る昨今の状況（市場ゼミに合流：田中先生を囲んでの RT）
- 4) 持久力の生理学
- 5) 栄養とスポーツの基礎的問題
～本学における体力測定の可能性と、今後の活動指針の説明～
- 6) 筋・パワー（力強さの理論背景）
- 7) 京王多摩川 BBQ 交流会
- 8) 生活習慣病の概要と身体活動との関係
ゼミ合宿（於：館山）
夏期課題：レクリエーションなサッカーの健康効果（英文を抄読）
- 9) 過労性スポーツ障害
- 10) 主なスポーツ障害とその対応（予防）
- 11) スポーツにおける急死
- 12) スポーツと心臓 解剖と生理
- 13) AED 実体験
～白門レガッタ、ゼミ A チーム参加～
- 14) スポーツによる急性障害と安全対策
- 15) 各種ストレッチング（理論と種類、最新情報）
- 16) 栄養・食事対策の具体的な進め方

17) スポーツと呼吸（ボート部最大酸素摂取量の測定結果）

18) ゼミ論集作成と期末交流会の打ち合わせ

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A・B・C

実施日： 2015 年 8 月 28 日（金）～8 月 29 日（土）

実施都市： 千葉県館山市

実施施設： ファミリーオ館山

実施内容： 学外にてゼミ合宿を実施した。毎年夏期合宿には原則ゼミ生全員が参加し、集中討議やゼミ生間の交流の場として貴重な機会となっている。

成果： 全員で一つのレビューの翻訳に取り組んだ他、今後の課題について議論した。スポーツ等でのゼミ生間の交流も有意義であった。

対象演習： 演習 A・B・C

実施日： 2016 年 1 月 6 日（水）

講演者名： 辰田 和佳子 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 3355 号室

実施内容： ゼミ生の関心が多い、スポーツ栄養の実態について、スポーツ栄養学の専門家を招聘してパネル方式での講演会を開催した。

成果： 教科書的でない内容も含めて、スポーツ栄養の問題点について認識し、懸案になっていた幾つかの疑問を解消するに至った。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

スポーツ・コンディショニングの考え方を理解し、競技力向上に役立てる

<授業の概要>

各自のテーマについて文献を紹介し、お互いに内容についての理解を深めた。

ゼミ生全員が部活動の選手、またはマネージャー等の役職にあったため、実習ではそれぞれの所属団体での測定等に関わった。

<活動内容>

夏期合宿以降は、A 生とも度々合流し、以下に取り上げたような項目について学修を進めた他、陸上競技部、漕艇部、女子バレーボール部、サッカー部（Chuo Sport Academy）等での測定、競技力向上に関わる諸問題を理解し支援する取り組みを行った。

また、夏期には英文の文献を読み、健康スポーツ関連の基本タームの理解につとめた。

教室授業の概要は以下の通り：

- 1) 身体組成の説明（B 生担当）と実測
- 2) 睡眠とコンディショニング
- 3) 東京パラリンピックを巡る昨今の状況（市場ゼミに合流：田中先生を囲んでの RT）
- 4) 箱根駅伝選手の自律神経評価（東海大紀要参照）

B 女性アスリートの諸問題

- 5) ボートの生理学（ボート部の測定について）
- 6) 現代人の疲労と腰痛
- 7) 京王多摩川 BBQ 交流会
- 8) 生活習慣病の概要と身体活動との関係

ゼミ合宿（於：館山）

夏期課題：レクレেশヨナルなサッカーの健康効果（英文を抄読）

- 9) 運動性貧血について（陸上長距離事例）
- 10) 主なスポーツ障害とその対応（予防）
- 11) スポーツにおける急死
- 12) スポーツと心臓 解剖と生理
- 13) AED 実体験
- 14) 性差とスポーツ活動
- 15) 育成年代におけるサッカー選手の身体的発達とトレーニング
- 16) 栄養に関する疑問点の集約（講演会対策）
- 17) ボート部・陸上長距離の測定結果とその利用
- 18) ゼミ論集作成と期末交流会の打ち合わせ

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B

実施日： 2015年8月3日(月)

実施都市： 茨城県神栖市

実施施設： 神栖市矢田部サッカー場

実施内容： ゼミ生の佐藤久元は、少年サッカーの指導を本年研究テーマとしており、CSAの合宿にて中学生年代のゲーム分析に参加した。

成果： 試合中の活動分析結果が得られた。次年度以降の研究テーマに結果を反映させていく。

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年8月28日(金)～8月29日(土)

実施都市： 千葉県館山市

実施施設： ファミリーオ館山

実施内容： 学外にてゼミ合宿を実施した。毎年夏期合宿には原則ゼミ生全員が参加し、集中討議やゼミ生間の交流の場として貴重な機会となっている。

成果： 全員で一つのレビューの翻訳に取り組んだ他、今後の課題について議論した。スポーツ等でのゼミ生間の交流も有意義であった。

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2016年1月6日(水)

講演者名： 辰田 和佳子 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 3355号室

実施内容： ゼミ生の関心が多い、スポーツ栄養の実態について、スポーツ栄養学の専門家を招聘してパネル方式での講演会を開催した。

成果： 教科書的でない内容も含めて、スポーツ栄養の問題点について認識し、懸案になっていた幾つかの疑問を解消するに至った。

（6）布目 靖則（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通じた安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

<授業の概要>

自然レクリエーションの中から「登山（無雪期）」や「スキー」を取り上げ、その運動特性や心理的効果、プログラム展開の手法、安全管理、内外の動向等について学習する。また、野外における活動主体の立場から環境問題に関する理解も深める。

<活動内容>

主な活動

- ・ガイダンス（ゼミ概要、自己紹介ほか）
- ・大菩薩嶺登山に向けて（個人装備、団体装備、行動計画ほか）
- ・文献（英文）購読
- ・地図とコンパス
- ・テント設営法
- ・火器の取り扱い
- ・尾瀬キャンプと会津駒ヶ岳登山に向けて（野外宿泊スキル、グリーンツーリズムほか）
- ・奥多摩キャンプに向けて（都市近郊での自然レク）
- ・スキーのオフトレ（インラインスケートほか）
- ・スキー用具概説
- ・スキーと安全（ルールとマナー）
- ・クロスカントリースキー

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年5月9日（土）

実施都市： 山梨県甲州市

実施施設： 大菩薩嶺

実施内容： 登山道および関連施設の整備状況について、主として安全管理・環境保全の側面から評価する。

成果： 日本百名山に指定され、登山者に人気の山であることから、登山道は比較적으로整備されていた。しかし、トイレや道標の整備などを改善していく必要があると思われ、これらの解決法を模索する契機となった。

対象演習： 演習 A

実 施 日： 2015 年 8 月 4 日(火)

実施都市： 福島県檜枝岐村

実施施設： 檜枝岐村(尾瀬)

実施内容： 尾瀬国立公園および周辺地域を訪れ、自然レクリエーションを行うための施設の整備状況を確認するとともに、グリーンツーリズムが地域活性化にどの程度貢献度しているかについて情報収集を行う。

成 果： キャンプ場施設の整備状況と当該施設の環境保全への取り組みについて情報を得られた。グリーンツーリズムの評価については継続的に資料収集していく必要があることが分かった。

対象演習： 演習 A・C

実 施 日： 2015 年 10 月 10 日(土)

実施都市： 東京都西多摩郡

実施施設： 氷川キャンプ場

実施内容： 都心から約 2 時間半と交通の便が良く、若者やファミリーが多く訪れる奥多摩地区キャンプ場（氷川キャンプ場ほか）の利用実態について視察を行う。特に管理者の安全対策および利用者の安全意識について資料収集を行う。

成 果： キャンプ場管理者による安全対策の実態と、キャンプ場利用者の安全に対する意識、とりわけ直火の取り扱いおよび水辺活動への安全意識を調査することができた。

対象演習： 演習 A

実 施 日： 2016 年 2 月 5 日(金) ～2 月 8 日(月)

実施都市： 新潟県妙高市

実施施設： 赤倉観光スキー場

実施内容： 海外からも多くのスキーヤーが訪れる妙高スキー場において、スキー場の安全管理に関する視察を行う。また、一般スキーヤーの安全意識に関する実態調査を行う。

成 果： スキー場管理者が実施する事故多発場所での安全対策を知ることができた。また、「妙高ローカルルール」が制定された経緯について情報を得ることができた。

FLP演習C

<テーマ>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通じた安全教育の可能性について探る。ゼミ論文の完成、関連領域の資格を取得する。

<授業の概要>

自然レクリエーションの中から「登山」や「スキー」を取り上げ、その運動特性や心理的効果、プログラム展開の手法、安全管理、内外の動向等について学習する。また、冒険教育の理念や実践についても学習する。

<活動内容>

ゼミ最終年度にあたり、その総まとめとして、ゼミ論文を完成させた。

<研究課題>

- ・組織キャンプにおけるグリーンキャンプの位置づけ
—療育キャンプと幼児キャンプとの比較を中心とした文献研究—
- ・グリーンツーリズムの受け入れ側を取り巻く環境
—①秋田県仙北市西木町と②大分県宇佐市安心院町の事例の比較—
- ・スキー場経営における降積雪量変動と自然災害のリスク評価
—新潟県のスキー場利用者数推移と新潟県中越地震の影響—

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年5月9日(土)

実施都市： 山梨県甲州市

実施施設： 大菩薩嶺

実施内容： 登山道および関連施設の整備状況について、主として安全管理・環境保全の側面から評価する。

成果： 日本百名山に指定され、登山者に人気の山であることから、登山道は比較的よく整備されていた。しかし、トイレや道標の整備などを改善していく必要があると思われる、これらの解決法を模索する契機となった。

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年10月10日(土)

実施都市： 東京都西多摩郡

実施施設： 氷川キャンプ場

実施内容： 都心から約２時間半と交通の便が良く、若者やファミリーが多く訪れる奥多摩地区キャンプ場（氷川キャンプ場ほか）の利用実態について視察を行う。特に管理者の安全対策および利用者の安全意識について資料収集を行う。

成 果： キャンプ場管理者による安全対策の実態と、キャンプ場利用者の安全に対する意識、とりわけ直火の取り扱いおよび水辺活動への安全意識を調査することができた。

(7) 森 正明 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

大学スポーツ、中大スポーツ振興

<授業の概要>

大学運動部やスポーツ同好会の組織、大学スポーツのマネジメント（競技力向上や地域スポーツクラブ育成のための事例-早稲田方式、立命館方式、関大方式等）、大学スポーツ応援文化の醸成とクラブ文化の醸成など。

<活動内容>

森ゼミは、中大スポーツ振興をテーマに（大学スポーツの歴史、中大スポーツの歴史、学友会活動のこれまでと現状、学友会活動としての中大スポーツの現状と今後）理論研究を行い、前期中に2つ（2種目）の大学スポーツ見学を行いその実態について検討結果の報告を行った。

後期は、中大バレーボール部班と白門レガッタ班に分かれてそれぞれインカレまでとレガッタ開催まで取り組みその経過、結果の検討内容を報告書として作成した。

実態調査としては、2016年1月にアイスホッケーインカレの調査のため日光に行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2016年1月8日(金)～1月9日(土)

実施都市： 栃木県日光市

実施施設： 栃木県立日光霧降アイスアリーナ

実施内容： アイスホッケーインカレ準決勝および決勝の実態調査。テーマは、「応援文化の醸成」、父母会や地元関係者、大学関係者の関わりや応援意識等についてインタビューし今後のタイプ別応援スタイルの参考資料とした。

成果： 実態調査では、教室や資料からの検討だけではなく、生データとしての現場の声を収集できる。

FLP演習C

<テーマ>

大学スポーツ、中大スポーツ振興

<授業の概要>

大学運動部やスポーツ同好会の組織、大学スポーツのマネジメント（競技力向上や地域スポーツクラブ育成のための事例-早稲田方式、立命館方式、関大方式等）、大学スポーツ応援文化の醸成とクラブ文化の醸成など。

<活動内容>

森ゼミは、中大スポーツ振興をテーマに（大学スポーツの歴史、中大スポーツの歴史、学友会活動のこれまでと現状、学友会活動としての中大スポーツの現状と今後）理論研究を行い、前期中に2つ（2種目）の大学スポーツ見学を行いその実態について検討結果の報告を行った。

後期は、バレーボールインカレとレガッタ開催まで取り組みその経過、結果の検討内容を報告書として作成した。

(8) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中で成されてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。また同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えていこうとする際の様々な課題についても検討していきます。

地域で展開されるスポーツの実相を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的に検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林勉ゼミ演習Aでは、4月から5月までは課題図書の輪読を通じて基礎的な研究、調査スキルの習得を行い、その後は、連携して活動する地域・公共マネジメントプログラムのカリキュラムであるサマースクールの準備、調査、報告書の作成を行った。サマースクールでは、規定された対象地域に対してその地域に関する問題を提起し、解決へ向けた政策の提言を目指し、とくに今年度は静岡県三島市をフィールドに、現地の市役所、企業へのヒアリング等を行い、最終的にはそれらをもとにスポーツツーリズムによる地域活性化を提言した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・C

実施日： 2015年9月18日(金)～9月20日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： ブラウブリッツ秋田

実施内容： 演習Bが実施したプロジェクトのサポート、演習Aの学生による事前調査を行った。

成果： 演習Aの学生が実施イメージの共有、現場担当者との顔合わせをしたことによって、来年度への円滑な引き継ぎにつながった。

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年10月16日(金)

講演者名： 岩瀬 浩介 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 11430 号室

実施内容： ブラウブリッツ秋田社長岩瀬浩介氏による講演会の実施。

成 果： クラブ社長から見たプロジェクトの影響及び J3 クラブの実情を把握。演習 B は新たな角度からプロジェクトを見つめ直し、演習 C はその後の調査研究の契機となった。

対象演習： 演習 A

実 施 日： 2015 年 11 月 21 日(土) ～11 月 23 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： あきぎんスタジアム

実施内容： 演習 B の調査のサポート及び次年度へ向けた事前調査の実施。

成 果： 演習 B の行ったプロジェクトの成果と課題点について明らかにしたことで、次年度のプロジェクトの大まかな方向性を定めた。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中で成されてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。また同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えていこうとする際の様々な課題についても検討していきます。

地域で展開されるスポーツの実相を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的に検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミ演習 B では、1 年間を通じて秋田県の J リーグクラブ「ブラウブリッツ秋田」と共同で「シルバー縁活プロジェクト」を実施した。これは昨年度より開始された先輩学生のプロジェクをを引き継ぎ、さらに発展させたものであり、秋田県における高齢者のコミュニティをスポーツによって形成することを目指したものである。秋田県では、現地フィールドワーク、高齢者を対象としたイベントを企画・運営を行った。当プロジェクトの詳細および成果については、最終的に報告書にまとめられた。

コンテスト成績

- ・中央大学総合政策学部プロジェクト奨学金 学部長賞
- ・中央大学総合政策学部リサーチフェスタ 敢闘賞

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 4 月 27 日(月)

講演者名： 渡辺 敏明 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 11430 号室

実施内容： 9 月のプロジェクトに向け、信州大学渡辺敏明准教授による講演。また、同時に意見交換も行った。

成 果： プロジェクトで行うイベントの内容を「運動」という側面から見つめ直すことが出来た。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 4 月 5 日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： ブラウブリッツ秋田・他

実施内容： ブラウブリッツ秋田スタッフや秋田市役所長寿福祉課職員との意見交換を行った。

成 果： 秋田における高齢化の現状や市の動向を把握した事によって、プロジェクトテーマの着想の大きな土台となった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 6 月 15 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： ブラウブリッツ秋田・他

実施内容： 9 月 19 日のイベント実施場所での実地調査及びブラウブリッツ秋田スタッフとの打ち合わせ。

成 果： イベント実施場所に直接足を運んだことで、より具体的なイベント内容の企画や調査項目の策定の一助となった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 7 月 15 日(水)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： スポーツ科学センター・ブラウブリッツ秋田事務所

実施内容： 現地での外部協力者と打ち合わせ。

成 果： 事前に話し合いの場を設けられたことで、万全な準備及びプロジェクト当日のスムーズな運営に繋がった。

対象演習： 演習B・C

実 施 日： 2015 年 9 月 19 日(土)

講演者名： 今村 貴幸 氏

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 高齢者が運動を通して交流を出来るような体操教室の実施。

成 果： 体操を通して高齢者間の交流を図ることが出来たと同時に、ここでの高齢者の反応は調査の一助となった。

対象演習： 演習B・C

実 施 日： 2015 年 9 月 19 日(土)

講演者名： 渡部 真吉 氏

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 高齢者の身体機能向上目的とした体操教室の実施。

成 果： 高齢者が自身の身体機能に目を向ける契機となったと共に、ここでの高齢者の反応は調査の一助となった。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 8 月 10 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 加賀英呉服店・他

実施内容： プロジェクト運営に必要な基盤を確保するため、現地の企業へ協力依頼の営業活動を実施。

成 果： 訪問企業からの協力もあり、ここで得られた成果はプロジェクト成功の大きな支えとなった。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 9 月 6 日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 9 月 19 日のプロジェクト実施に先駆け、イベント開催場所での事前調査及び準備。

成 果： プロジェクトの一連の流れのイメージを膨らませたことにより、当日の無駄のない準備と運営に繋がった。

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 9 月 14 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 9 月 19 日のプロジェクト実施及びそれに向けた準備と後処理。

成 果： 事前の万全な準備により、プロジェクトは成功。現地で大きな反響を呼んだ。また、ここで得られた調査結果は、その後の調査の礎となった。

対象演習： 演習 A・B・C

実 施 日： 2015 年 10 月 16 日(金)

講演者名： 岩瀬 浩介 氏

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 11430 号室

実施内容： ブラウブリッツ秋田社長岩瀬浩介氏による講演会の実施。

成 果 : クラブ社長から見たプロジェクトの影響及びJ3クラブの実情を把握。演習Bは新たな角度からプロジェクトを見つめ直し、演習Cはその後の調査研究の契機となった。

対象演習 : 演習B

実 施 日 : 2015年11月20日(金)～11月23日(月)

実施都市 : 秋田県秋田市

実施施設 : 八橋運動公園、秋田市役所

実施内容 : プロジェクトの関係者へのヒアリングなどを通じてプロジェクトの事後調査を行った。

成 果 : プロジェクトが現地で与えた影響と直面した課題について明らかにし、ここでの調査結果をもとに調査報告書の作成を行った。

F L P 演習 C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中で成されてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。また同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えていこうとする際の様々な課題についても検討していきます。

地域で展開されるスポーツの実相を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的に検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミ演習Cでは、共同で活動しているスポーツ・健康科学プログラムの学生とともに、前期は演習A、Bで展開されるプロジェクトの研究サポート、後期は、Jリーグが掲げる「地域密着」という理念について、Jクラブへのヒアリング、財務分析を通じて、理念の妥当性を検証した。それらの結果については報告書にまとめられ、関係各所へ配布された。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B・C

実施日： 2015年9月19日(土)

講演者名： 今村 貴幸 氏

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 高齢者が運動を通して交流を出来るような体操教室の実施。

成果： 体操を通して高齢者間の交流を図ることが出来たと同時に、ここでの高齢者の反応は調査の一助となった。

対象演習： 演習B・C

実施日： 2015年9月19日(土)

講演者名： 渡部 真吉 氏

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 高齢者の身体機能向上目的とした体操教室の実施。

成 果 : 高齢者が自身の身体機能に目を向ける契機となったと共に、ここでの高齢者の反応は調査の一助となった。

対象演習 : 演習 A・C

実 施 日 : 2015 年 9 月 18 日 (金)

実施都市 : 秋田県秋田市

実施施設 : ブラウブリッツ秋田

実施内容 : 演習 B が実施したプロジェクトのサポート、演習 A の学生による事前調査を行った。

成 果 : 演習 A の学生が実施イメージの共有、現場担当者との顔合わせをしたことによって、来年度への円滑な引き継ぎにつながった。

対象演習 : 演習 A・B・C

実 施 日 : 2015 年 10 月 16 日 (金)

講演者名 : 岩瀬 浩介 氏

実施都市 : 東京都八王子市

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 11430 号室

実施内容 : ブラウブリッツ秋田社長岩瀬浩介氏による講演会の実施。

成 果 : クラブ社長から見たプロジェクトの影響及び J3 クラブの実情を把握。演習 B は新たな角度からプロジェクトを見つめ直し、演習 C はその後の調査研究の契機となった。

V. 地域・公共マネジメントプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

2000年4月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに、自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、2011年3月11日の東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。そして、現在人口減少時代が進展し、もはや「国土の均衡ある発展」はまだら模様の相を呈しています。「消滅する都市」などという穏当らしからぬテーマも出てきています。

このような状況の中ですので、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。それに対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民と行政の協働を前提にした健全なまちづくり・コミュニティづくりへの期待がますます高まっています。

そのためのコンセンサス作りをはじめ、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントを主軸にする政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2015年度のサマースクールでは、静岡県三島市をケーススタディとし、当地にてフィールドワークを実施の上、三島市長を始め市の関係者との間で実地見聞と調査を元に中間報告を行い、多摩校舎に三島市関係者お招きして最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界やNPOでの活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

2. 2015年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A(2年次)	FLP演習B(3年次)	FLP演習C(4年次)	実施形態
牛嶋 仁	法	6	2	－	環境A・B・Cと地域・公共A・B・C全て合併
石川 利治	経済	－	－	2	C単独
山崎 朗	経済	－	5	－	B単独
斯波 照雄	商	8	9	8	A単独、B・C合併
根本 忠宣	商	10	6	－	A・B単独
御船 洋	商	14	9	8	A・B・C単独
植野 妙実子	理工	－	－	2	C単独
新原 道信	文	8	8	11	A・B・C単独
黒田 絵美子	総合政策	18	8	5	A・B・C単独
小林 勉	総合政策	3	2	1	A・B・C単独
小林 秀徳	総合政策	3	－	－	A単独
堤 和通	総合政策	2	2	2	A単独、B・C合併
細野 助博	総合政策	13	8	16	A・B・C合併
合計		85	59	55	

3. プログラムスケジュール

4月 履修ガイダンス

5月 第一回部門授業担当者委員会

6月 2016年度募集に伴う総合ガイダンス

7月 第二回部門授業担当者委員会

8月 第三回部門授業担当者委員会

9月 学外活動（サマースクール・三島市）

10月 2016年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
学内活動（サマースクール成果報告会）

11月 2016年度募集に伴う選考試験

12月 第四回部門授業担当者委員会

学内活動（期末成果報告会）

3月 第五回部門授業担当者委員会
F L P 修了発表
F L P 修了証書授与

4. プログラムの活動

<学内活動>

①サマースクール成果報告会

実施日： 2015年10月17日（土）12:00～
実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 5203 教室
実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告

②期末成果報告会

実施日： 2015年12月19日（土）13:00～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8103 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

<学外活動>

サマースクール

実施日： 2015年9月16日（火）～18日（木）
実施都市： 静岡県三島市
実施場所： 三島市役所・他
実施内容： 三島市の現地調査と政策提言（三島市役所及び他企業へのヒアリング）

5. 2015年度までの地域・公共マネジメントプログラム修了生の主な就職・進学先

厚生労働省、特許庁、参議院事務局、東京国税局、裁判所事務官、労働基準監督官、東京都庁、京都府庁、千葉県庁、神奈川県庁、岐阜県庁、新潟県庁、山梨県庁、岩手県庁、板橋区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、多摩市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋谷市役所、蕨市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、宇都宮市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、福島県警察本部、都市再生機構、四国電力、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、横浜信用金庫、ベネッセコーポレーション、明治乳業、鈴与、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、ヤンマー、インテリジェンス、東急コミュニティー、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン・イレブン・ジャパン、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

国境を越える環境法と国際協力・地域の諸問題

<授業の概要・活動内容>

1年間を通して、三島市サマースクールの準備、参加、総括を行った。

詳細は、学生によるFLP地域・公共マネジメントプログラム「Summer School in 三島市」報告書に記載されている。

一部の学生は、環境プログラムと合同の海外研修に参加した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2015年9月2日(水)～9月6日(日)

実施都市： バンコク(タイ)

実施施設： タマサート大学他

実施内容： 2015年度FLP環境プログラム牛嶋ゼミ報告書参照。

成果： 2015年度FLP環境プログラム牛嶋ゼミ報告書参照。

<バンコク研修実施概要>

1. 研修の目的

本海外研修は、本学学生がタイ・タマサート大学学生と合同セミナーを開催するとともに、バンコク所在施設を訪問することにより、学生の知見と経験を深め、環境法政策及びの学習効果を向上させるために行った。

2. 研修の意義

タマサート大学は、本学と交流協定がある他、本学事務所もおかれているなど本学と関係の深い大学である。今回の本学学生の訪問は、同大学Narong Jaiharn法学部長、Naphat Sorrat法学部長補佐(本学大学院卒業)、Amnat Wongbandit教授(環境法)の援助により実現した。今回の訪問により、本学と同大学との関係がますます進展したと考えられる。

研修では、タマサート大学訪問の他、研修概要記載(下記4参照)のとおり、バンコク所在施設4箇所(国連機関、国際環境NGO、日本政府関係機関2箇所)を訪問し、その経験も、学生にとっては、今後の学習を進める上で、貴重な経験になったと考えている。

特に、国連機関は、タマサート大の学生も参加し、合同での企画となった。

3. 研修前後の学修計画と効果

本研修は、学内外の各種プログラムとの相乗効果により、学生のコミュニケーション能力や基

礎学力について、加速度的成長を期待している。

4. 研修概要

(1) タマサート大との合同セミナー

合同セミナーは、日本とタイとの比較および共通課題を念頭にテーマを環境法政策として、2つのテーマ（水素エネルギー（法学部ゼミ）、環境アセスメント）に分け、本学学生とタマサート大の学部・大学院生が、タマサート大において、それぞれ報告、議論を行った。

合同セミナーに先立ち、タマサート大法学部長、学部長補佐の挨拶のほか、タマサート大の Wongbandit 教授と私が各々日泰両国の環境法制度について簡単な講義を行った。本学学生にとっては、Wongbandit 教授の講義が得がたい経験になった。なお、昼食時には、タマサート大出身裁判官によるスピーチが行われた。

使用言語は、すべて英語とし、必要に応じて、引率教員が通訳した。

合同セミナーには、上記教員と私以外に、タマサート大法学部専任教員やタマサート大出身他大学教員が参加した。

タマサート大からは、教室の準備、お茶の提供、夕食の提供を無償で行っていただいた。これに対して、本学は、プロトコールとして、参加者の支弁により、昼食会を開催、返礼した。

合同セミナー開催後は、タマサート大の招待によって夕食会が開催され、参加者間で広く交流が行われた。

(2) バンコク所在機関訪問

下記のとおり、在バンコクの国連アジア太平洋地域事務所（E S C A P）・国連環境計画（U N E P）アジア太平洋地域事務所、IUCN（国際自然保護連合）アジア事務所、JICA 事務所、ジェトロ事務所を訪問して、各機関の職務およびその現状と課題について説明を受けた。

(3) 日程

9月2日未明	学生出発（機中泊）
9月2日	学生バンコク到着。IUCN 事務所、JICA 事務所訪問
9月3日	JETRO、ESCAP、UNEP 訪問
9月4日	タマサート大訪問（合同セミナー） Thammasat University, Faculty of Law Dean Narong Jaiharn Professor Amnat Wongbandit Dr. Naphat Sorrat Judge Suntariya Muanpawong Ms. Teera Insawart (secretary) 午前 学部長等挨拶、両校教授による講義、両校学生による報告と議論 昼食会（Suntariya Muanpawong によるスピーチ） タマサート大学生の案内による学内ツアー

午後 両校学生による報告と議論

タマサート大教職員との夕食会

9月5日 博物館等の見学。同日深夜、学生帰国へ（機中泊）。

9月6日早朝 学生帰国

5. タマサート大との合同セミナー・プログラム

別紙英文プログラム参照。

以上

**Thammasat-Chuo Joint Seminar on Environmental Law and Policy:
Comparison and Collaboration for the Global Sustainable Society**

**Thammasat University Faculty of Law
and
Chuo University Faculty of Law, Tokyo, Japan
at
Jitti Tingsabadh Room, First Floor
Faculty of Law, Thammasat University, Bangkok, Thailand**

Co-organized by Japanese Law Center, Thammasat University

4 September, 2015

- 09.00-09.15 Opening Ceremony**
Welcoming Speech
Associate Professor Narong Jaiharn
Dean, Faculty of Law, Thammasat University
Acknowledgements
Professor Hitoshi Ushijima
Faculty of Law, Chuo University
- 09.15-10.30 Overview to the legal system & environmental law in Thailand**
Professor Amnat Wongbandit
Faculty of Law, Thammasat University
Overview to the legal system & environmental law in Japan
Professor Hitoshi Ushijima
Faculty of Law, Chuo University
- 10.30-11.00 Coffee break**

- 11.00-12.30 Environmental impact assessment in Thailand
Public participation in an EIA Process in Thailand
Mr. Suraporn Praditthao, Thammasat University
- Health Impact Assessment in Thailand
Ms. Thamonwan Jitsong, Thammasat University
- Environmental impact assessment in Japan:
The Case of Linear *Chuo Shinkansen* Line
Students from Chuo University
- 12.30-13.30 Lunch
Short Speech: Encouraging students to pursue legal profession
Honorable Judge Suntariya Muanpawong
- 13.30-14.00 Campus tour by Ms. Pimvipa Kunanusorn and Mr. I Ting Liu
- 14.00-15.30 Renewable energy sources in Thailand
Policies towards renewable energy sources development
Ms. Pimvipa Kunanusorn and Mr. I Ting Liu,
Thammasat University
Legal measures for encouraging hydrogen power utilization
Ms. Panchanit Sirisan, Thammasat University
- Renewable energy sources in Japan: Future of Hydrogen Car
Students from Chuo University
- 15.30-16.00 Coffee break
- 16.00-16.30 Concluding Remarks:
What can we share for the global sustainable society?
Professor Amnat Wongbandit
Professor Hitoshi Ushijima
- 18.00 Dinner

(2) 石川 利治 (経済学部・教授)

FLP演習C

<テーマ>

グローバル経済の下における産業立地と都市および地域経済の関係

<授業の概要>

産業立地がどのような機構により都市を造り出すかの考察を学習し、そして都市と都市体系に関する特徴を把握する仕方、それらを数値化する手法を習得する。次いでそれらの集積を通して地域経済に結び付け、地域経済と都市および産業立地の関連を明確にすることが第一課題となります。次いで都市と産業に関する各種理論を勉強し、歴史的な視点も組み込みながら、地域経済を背後で支えている空間経済的仕組を主として理論的に学びます。最後に特定の地域の都市体系をいくつか取り上げ(国内外)、これまでの考察で培った各自の分析力を活用し、地域における都市と都市体系、産業立地が地域経済と具体的にどのように関連しているかの解明に取り組み、都市体系の展開される方向を検討してゆきます。

<活動内容>

石川演習Cでは2015年3月にインドネシア、ジャカルタ近郊における工業団地への調査・見学をおこない、TAKAGISARI MULTI UTAMA, NIKKO CAHAYA ELECTOTRIC など6つの企業を訪問したので、2015年度ははじめにインドネシアにおける工業団地訪問の総括をおこなった。そこでの内容は次のようである。上記のTAKAGISARI MULTI UTAMAのPresident Directorである仲安吉成氏によるインドネシアでの生産活動に関する興味深い講演の理論的裏付けを行った。すなわち、インドネシアの工業団地では最先端技術を装備したロボットを用いている。その理由はインドネシアでは交通インフラストラクチャーが十分でないので、労働者の通勤圏が狭い。そのため低賃金率を目的にインドネシアでの生産を始めたが、工業団地に企業が集積しだすと、すぐに賃金率が上がり、いわゆるジョブホッピングも頻発し、労働面での問題が生じる。このため企業はいわゆる立地調整をおこなうことになり、労働力を削減して機械化を図ることになる。このような事態はインドネシア政府にとっても重大な問題となる。工業団地を整備しても十分な雇用を生み出せず、外国からの適切な技術移転も滞ることになる。工業団地を単純に開発し、低賃金を牽引力にしても、国内に必要な水準の生活・生産基盤が整備されないと、地域開発を主眼とする工業団地は首尾よく機能しないということである。このような事態を背景として中国主体によるアジアインフラ投資銀行の役割が大いに注目される理由が明らかになるのである。経済のグローバル化により企業の生産活動におけるフラグメンテーションが進み、生産工程が国際的に拡大する。細分された生産工程の立地先として多くの中規模企業の場合には工業団地がある。しかし工業団地が国の内陸部に開設される場合には、低賃金のみならず、各種の生活・生産基盤の充実度にも配慮させねばならない。このような点を、インドネシアの整備された工業団地で活躍するTAKAGISARI MULTI UTAMAへの聞き取り調査は明確にするものがあった。またこのような現象を目の当たりにすることで産業立地理論からの理論的な勉強も大いに深化した。とりわけ交通インフラとも関係して都市と都市体系の地域経済と地域経済の発展における役割である。工業団地は生産中心であるため、労働者の生活を支える都市体系は工業団地の機能を大いに支援する役割をもち

都市体系の構成が生活・生産基盤の1つになるという理解が進展した。

続いて、日本における生産活動の集積に勉学の焦点を移した。ここでは日本における地場産業をはじめに取り上げ考察した。地場産業がグローバル化経済の進展に対していかに対応し、変革され変貌したかを、西陣織や沖縄の芭蕉布生産を通して学修した。ここでは先進工業国における基本的な技術革新とその持続性を西陣織と芭蕉布の生産地において考察したのである。とりわけ芭蕉布の生産活動様式がいわゆる工房的であり、個性のある製品を生み出す生産様式として工房的生産活動はグローバル化経済の進展により重要性を増して行くであろうというヒントを得ることができたと思われる。最後に山形県、米沢市における技術革新を主導にする地域経済活性化について勉強した。また米沢市における工業出荷額が増すにつれ、県庁所在地の山形市は工業出荷は相対的に低下し、その役割を統括系機能へ移す傾向をもち、ここでも都市体系と産業立地の関係の変化が見られ、大いに参考になった。いずれにしても日本における地方経済が活性化するための基本的なモデルの1つが米沢市に集約的に示されている可能性があり大いに学修が伸展することになった。

上記1年間においてなされた勉学の成果はパワーポイントを用いる研究発表会により集大成することができたと判断される。

(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)

FLP演習B

<テーマ>

地域創生の新しいデザイン

<授業の概要>

新しい観点から地域創生にチャレンジしている社会的企業、NPO、民間企業、自治体を取り上げ、新しい地域創生モデルについて検討を行います。

テキスト『地域創生のデザイン』を使用します。執筆メンバーの何人かには演習に来てもらい、話をしてもらつつもりです。

キーワードは、逆6次産業化、広義の新しい公共、地域資源の活用、地域のグローバル化、地域イノベーション、中枢管理機能の適正配置です。

後期には、地方創生法についても取り上げ、政策担当者から直接話を聞く機会を設ける予定にしています。

演習レポートを各自作成しますので、年間を通して、文献、情報収集等に心がけてください。レポート作成の技法についても、演習の中で指導します。

<活動内容>

山崎ゼミは、年間を通じ、5人という少人数であることを活かし、活発にコミュニケーションしながら活動してきました。前期にはテキストの読み合わせや最新の地域政策の動向などを議論しました。合わせまして、夏季休業中のゼミ合宿の計画立案と下調べを進めました。

夏季休業中の9月には北海道へ実態調査を行い、下川町の林業まちづくりやその他道内の動向を調査してきました。親睦も深まり、貴重な体験もすることができ、とても充実した時間となりました。

後期には、テキストの読み合わせの続き、及び新たに刊行予定の新規テキストについても学びました。学部の授業でお呼びした講師の方々のお話から、インバウンドと地方創生についても議論を深めました。三菱電機の会長の講演会にも参加し、経済界の動きを知ることもできました。新年度に向け、論文への手がかりとなるテーマ検討も実施しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B

実施日： 2015年9月10日(木)～9月14日(月)

実施都市： 北海道下川町

実施施設： 下川町役場

実施内容： 森林資源を活用したまちづくりの先進事例の見学、及びヒアリング、現地調査。

成果： 実際に見聞きし、町内を視察させていただく中で、地域政策における新たな発見があった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 10 月 23 日(金)

実施都市： 東京都港区

実施施設： 京都大学東京オフィス

実施内容： 経済界を代表する有名大手企業の動向から学ぶ。

成 果： 企業として取り組む課題や、CSR 活動、環境問題への取り組みなどについて貴重なお話を伺うことができた。

(4) 斯波 照雄 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

比較都市史研究

<授業の概要>

まず4月よりE. H. カー『歴史とは何か』岩波新書、を輪読し、夏休みの三島市におけるサマースクールに向けて、テーマを「観光戦略」と設定し、資料を集め、議論し、9月16日～18日には三島市での現地調査、ヒアリングを行った。続いて9月より『比較都市史の旅』から、西洋の都市を選び、その都市について他の参考文献を参照して、その特徴、日本の都市との相違点について比較検討し、発表し、議論した。また、FLPゼミ3、4年生から助言、協力、指導を受けて三島市の観光戦略について提言をまとめた。その内容は『FLP地域・公共マネジメントプログラム「Summer School in 三島市」報告書』に掲載された。併せて、研究対象とする日本の都市について松山市を選び、資料収集を行い、2月24日～27日に現地松山市において調査合宿を行った。

<活動内容>

FLP 演習 A ゼミでは、文献講読を通じて、歴史的な見方について学んだ上で西洋の個別都市の特徴ならびに日本の都市との相違点について比較検討を行った。それは同時に、文献を正確に読み、その内容を報告するプレゼンの力の向上を目指すものであった。さらに、三島市におけるサマースクールに向けて資料を集め、内容について議論し、調査結果についてパワーポイントを利用して口頭発表し、文章にして提言をまとめるという実践的な学習につながった。また、松山市を調査都市に定め、中心市街地活性化をテーマに設定し、事前に各自の視点から資料を集め、データを分析した後、松山市で合宿を行い、市役所地域経済課、観光・国際交流課におけるヒアリングのほか、市内の中心商店街である銀天街、大街道を実際に見学し、市立図書館、県立図書館にて資料を収集した。次年度 FLP 演習 B において報告書がまとめられる予定である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A

実施日： 2016 年 2 月 24 日 (水)～2 月 27 日 (土)

実施都市： 愛媛県松山市

実施場所： 松山市役所

実施内容： 松山市の中心市街地活性化に関する実態調査

成果： 次年度演習 B において報告書を作成

FLP演習B・C

<テーマ>

比較都市史研究

<授業の概要>

2015年度前期には、3年生(FLP演習B)は2年次春休みの下関市合宿において行った市役所、商工会議所等でのヒアリング内容、収集したデータ、資料の整理を行い、それらを分析して、下関市の農業、工業、商業、雇用、観光についての各レポートをまとめた。レポートを仕上げていく過程では、各自のまとめている内容についての口頭発表を行い、各自修正を繰り返しながら、12月に全体報告書を作成し、2月には下関市についての冊子『共同研究報告書』を完成させた。

4年生(FLP演習C)は、前期には3年生が春休みに調査合宿を行った下関市に関するテーマ別レポート作成に助言し、協力するとともに、各ゼミ生はそれぞれが研究対象とする都市ならびにテーマを決定した。各自が設定したテーマに基づいて、資料収集、データを分析し、口頭発表を行い、2月にFLPゼミの卒業論文集を完成させた。また、4年生は、松山市における実態調査に向けての準備過程から助言、協力し、2月の現地調査合宿にも参加して、2年生(FLP演習A)のヒアリングや資料調査等に協力した。

<活動内容>

演習B、Cともに個人指導を基本として、作成過程において随時口頭発表を行いながら文章にまとめ、添削、修正を繰り返しながらそれぞれレポート、論文をまとめた。

2015年度FLP演習Bゼミ生は、三島市で行われたサマースクールにおいて演習Aゼミ生を助言、協力、指導するとともに、国内実態調査を行った下関市についての報告書冊子『中央大学FLPス波ゼミ共同研究報告書—下関市について—』を作成した。

2015年度FLP演習Cゼミ生は、松山市における中心市街地活性化に関する実態調査に向けての準備過程、調査合宿に際し、2年生(FLP演習A)ゼミ生に助言、協力し、実際に合宿にも参加した。それとともにゼミ生それぞれが研究対象に決定した都市、長岡市、川越市、流山市、船橋市、常陸大田市、福岡ならびに東京都の大田区、品川区についてテーマを設定して各自卒論を完成させ、『2015年度FLPス波ゼミ卒業論文集』を作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習C

実施日： 2016年2月24日(水)～2月27日(土)

実施都市： 愛媛県松山市

実施場所： 松山市役所

実施内容： 松山市の中心市街地活性化に関する実態調査

成果： 次年度演習Bにおいて報告書を作成

(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域における雇用創出について考える

<授業の概要>

地域における雇用の場に着目して、地域発展を支えるための雇用創出の可能性について徹底的に考える。具体的には、以下の点に着目して学習を深めていく。

- 自己雇用の場としての商店
- 地域経済における中小企業の役割
- 創業の場としての地域
- 地域経済発展におけるイノベーションの役割
- 地域コミュニティとソーシャルビジネス
- 地域経済の発展を支えるインフラとしての金融、行政

<活動内容>

根本ゼミでは、最初に下記の文献をもとにして、地域における競争力とは何かを考えるとともに、雇用創出のメカニズムについて勉強しました。

“*A Study on the Factors of Regional Competitiveness*” A draft final report for The European Commission Directorate-General Regional Policy

Criscuolo, C., P. N. Gal and C. Menon (2014), “The Dynamics of Employment Growth: New Evidence from 18 Countries”, *OECD Science, Technology and Industry Policy Papers*, No. 14, OECD Publishing.

また、調査手法や分析手法の基礎を学ぶために、下記のテキストを用いて統計分析とフィールド調査のノウハウを学習しました。

森田果『実証分析入門』日本評論社

佐藤郁哉『社会調査の考え方』東京大学出版会

そのうえで、サマースクールに臨み、三島市にある資源有効活用という観点から公共施設のリノベーションを通じた雇用創出の可能性について調査しました。

1年間では、当初想定していた内容を全て消化することはできませんでしたので、新年度において継続して勉強していく予定です。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2015年9月2日(水)

実施都市： 静岡県三島市

実施施設： 三島市立図書館・三島市民体育館

実施内容： 地域公共マネジメントプログラム全体の活動であるサマースクールに向けて、ゼミの夏季合宿を利用して三島市民体育館を訪問。担当者への利用状況のヒアリングや実際の施設の雰囲気、事前調査において三島市民体育館と類似点が多く、利用者も多い武蔵野プレイス（東京都武蔵野市）との比較等を行った。

成 果： ヒアリングの結果、データだけではなく実際に見てみても利用率が非常に高いことがわかった。また駅から施設まで実際に歩いてみることで施設までの距離感を実感することができた。我々のサマースクールでの大きなテーマの一つに「既存の公共施設を有効活用する」というものがあった為、三島市民体育館のような利用率の高い公共施設をヒアリングすることは以後の活動において大きな弾みとなった。

対象演習： 演習A

実 施 日： 2015 年 9 月 11 日(金)

実施都市： 静岡県三島市

実施施設： 三島市立図書館

実施内容： サマースクールに向けての活動の一環として、三島市を代表する公共施設である三島市立図書館を訪問。我々のゼミでは三島市の周辺都市との図書館広域ネットワーク構想を抱いていた為、実際に実現可能であるかどうかを担当者の方にヒアリング。また実際の利用者層はどのようなものであるかを聞き取り調査等を交えて調査。

成 果： ヒアリングの結果、図書館広域ネットワークに関してはそのような構想を持ってはいなかったことがわかった。実際に訪れてみると、市民が参加できる多くのイベントが開催されていること、市民が利用できる憩いの場が数多く設けられていることがわかった。公共施設の利用率を高める為の鍵として「多くの人が参加できるイベントを設けること」「気軽に入ることでできるような雰囲気やスペースを作ること」という 2 つのポイントを押さえることができた。

対象演習： 演習A

実 施 日： 2015 年 9 月 30 日(水)

実施都市： 東京都港区

実施施設： 鹿島建設(株)

実施内容： 三島市における公共施設を有効に活用するための方法としての PFI 事業についてインタビューを行った。事前に調査していて疑問であったことなどを質問し三島市の PFI 事業発展可能性についてお話を伺った。

成 果： インタビューの結果、PFI 事業において公共施設などのいわゆるハコモノは日本では既に飽和しており現在建設業界で最も注目しているものは上下水道などの

インフラ系設備であることが分かり、今後のサマースクールへの調査の方向性を見直す必要が出てきた。

また、民間企業と行政との折衝について伺うと、煩雑な申請手続き、型にはまった対応、書面のみでやり取りを行っていたなど企業からの行政側への問題点の指摘があった。民間企業の視点から見た貴重な意見であるので今後の調査に新しい問題として組み込みたい。

現在の政策提言案の一つである学校の PFI 事業についても「建設費用、ランニングコストなどを試算して実現可能性について調査をすべきだ」とのアドバイスをいただいたので今後の課題としたい。

F L P 演習 B

<テーマ>

地域に関する研究論文の作成

<授業の概要>

各人の研究報告と討論

<活動内容>

B 生については、共同研究から個人研究へとシフトして、各人の研究テーマを確定したうえで文献調査、データ調査、をスケジュールに基づいて進めてもらった。そのうで、適宜中間報告会を行い、A 生を含めて議論を深めるよう心掛けた。

また、昨年度合宿先である静岡県伊東市とは、その後も親交を深め、地域活動にも積極的に参加をし、人との交流を通じて実践的に地域振興の難しさを学んでもらった。伊東市との活動はB 生の経験を踏まえてA 生へと継承され、新年度において観光推進に係る何等かの成果を出すことが目標として据えられた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B

実 施 日： 2015 年 7 月 2 日 (木)

実施都市： 千葉県柏市

実施施設： 柏地域医療連携センター

実施内容： 「地域包括ケアシステム」をテーマにヒアリングを実施した。地域包括ケアシステムとは、在宅介護を推進するための仕組みを指す。医師・看護師・介護士・薬剤師・ケアマネジャー・介護事業者等が要介護者の健康状態に関する情報を共有し、ワンストップで介護サービスを自宅へ届けることを目的としている。当施設を選定した理由として、1. 地域包括ケアシステムを推進する先進自治体であること、2. 地域包括ケアシステムの立ち上げ期において、中心となった人物がいること、3. 「住宅」という観点から地域包括ケアシステムを推進している特徴を有していること。以上 3 点の理由からヒアリング対象とした。

ヒアリングの形態としては、事前に質問項目を送付しておき、レジュメに沿った質問を口頭で実施した。

成 果： ヒアリングの結果、地域包括ケアシステムの構築にあたっての課題が 3 点明らかとなった。1. 厚生労働省から指針として出されている「地域包括ケア会議」は、対面で実施することが予定されている。それにより、時間の制約が生じ、ケア会議が開催されにくいというデメリットが存在すること。2. 上記の課題を解決するために、ICT を活用した「情報共有システムー柏 K ネット」を導入したが、導入費用、維持費用が高額であることから、運用費用

を捻出していくスキームが必要となること。3. 上記、費用問題を解決するために、「クラウド型システムを活用」することが挙げられる。固有のサーバーを所有せず、システムを他自治体と共同利用することで、運用費用を圧縮することが可能である。以上3点がヒアリングを通し、得られた情報である。

対象演習： 演習B

実施日： 2015年10月22日（木）

実施都市： 神奈川県相模原市

実施施設： 橋本商店街、アリオ橋本、緑区役所

実施内容： 橋本商店街組合事務局並びに橋本の大規模商業施設アリオ橋本にアポイントを取り、ヒアリング調査を行なった。橋本商店街組合事務局では、商店街組合としての取り組み・現状の課題点・市役所に求めること・今後の展望などについてお聞きすることができた。アリオ橋本では担当者の方に、大規模商業施設としての地域貢献のあり方・商店街に対する認識・積極的に行なっている取り組みなどについて詳しく説明していただいた。また、それぞれのヒアリング先に向かう移動時間に個人商店の方に話を伺うこともできたため、多方面から橋本地域の商業施設の競争と共存について知ることができた。ヒアリング前後の時間は地域散策のため有効に使用することができた。

成果： インターネット上に上がっている資料などでアリオ橋本や橋本商店街組合事務局について軽く理解はしていたものの、直接話を聞きに行ったことがなかったため今回は貴重な機会を得ることができた。特に橋本商店街組合事務局の方は丁寧に対応してくださり、今後の継続的なヒアリング協力をお約束いただいた。今回のヒアリングにより、一步踏み込み地域の方の血の通った意見をお聞きすることができた。私はこれが今回のヒアリング調査における最も大きな成果であると考えている。これをゼミナール内での個人研究に生かすことはもちろん、今後自分が地域活性化について研究するにあたって忘れてはならない「市民の思い」に触れることができた貴重なヒアリング調査であった。

対象演習： 演習B

実施日： 2015年11月4日（水）

実施都市： 静岡県伊東市

実施施設： 伊東市内湯のまちバル実施場所

実施内容： 2015年11月3・4日に静岡県伊東市で行われた第5回湯のまちバルに学生ボランティアとして運営に参加。主なボランティア活動としてチケットの配布や、バスの乗務員、会計補佐などが挙げられる。また、空き時間には地元の

運営スタッフの方々と一緒に実際にバルに参加した。その際に、バルの参加者の方々に対してヒアリング調査の実施も行った。

成 果 : 私たちは根本ゼミの1期生のため、2015年度初めてバルにかかわって、バルの可能性についてこれまで事前調査をしてきた。今回始めてバルに運営・参加者双方の立場から実際のバルに参加し、調査だけではわからなかった改善ポイントや魅力について知ることができた。また、運営スタッフの方々や参加者と関わりを持てた事で地域活性の問題点や、意識の違いについても実感が持てた。

対象演習 : 演習B

実 施 日 : 2015年12月2日(水)

実施都市 : 静岡県伊東市

実施施設 : 伊東市商店街

実施内容 : 11月4日開催の伊東湯のまちバルへ参加した店舗の方々へのヒアリング。
主に開催期間中の客入りや年齢層、来年への改善点などを聞き取りした。それに加えて、まちバル実行委員の方々と目標の不一致はないかなどをチェックした。また、まちバル実行委員会や関係者の方々に対して、実行委員に入れて頂き、当日も参加させていただいたことへの御礼を行った。

成 果 : これまで何度も足を運んだ伊東市におけるイベントの総まとめ。11月4日の開催日と12月2日のヒアリングの2つの見学調査によって自分たちの感じた運営に関する問題点と自分たちの考える今後の改善点をまとめて、まちバルの実行委員会へと送付した。地域のイベントがどのように行われているかを直に運営を通して知ることが出来たことは、我々にとって有意義なものであった。

対象演習 : 演習B

実 施 日 : 2016年1月11日(月)

実施都市 : 埼玉県川越市

実施施設 : 小江戸川越観光協会・川越まちなかステーション

実施内容 : 埼玉県川越市で開催された川越バルに参加し、静岡県伊東市の伊東湯のまちバルとの違いや良い点などを探るために、現地で見学調査を行った。当日行ったことは、川越バルへの参加と訪れた店舗の方に対する簡単なヒアリングである。まちを歩き、いくつかの参加店舗を訪れながら、特に伊東湯のまちバルとの相違点に着目して調査を行った。

成 果 : 川越バルの参加店舗の方々には事前にアポイントを取っていなかったため、深く話を聞くことはできなかった。しかし、まちの特色やイベント規模などいくつかの前提となる事柄の違いはあったが、伊東まちバルでも取り入れることのできるような工夫や伊東まちバルの方が良くできていると思う工夫を発

見することができた。それらの違いや改善点を中心に最終報告書にまとめ、伊東湯のまちバル実行委員会へと送付した。

（６）御船 洋（商学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

演習開始以前の2015年2月に、新A生（1年生）はA生（2年生＝現B生）から、FLP御船ゼミの活動の概要とヒアリングの実施要領の説明を受けたうえで、春合宿（2015年3月18日～3月20日）に参加し、福島県いわき市役所におけるヒアリングに同席した。

演習Aでは、年間を通じて地方財政論の基礎を学ぶという方針の下、基本テキストの輪読を行った。テキスト輪読の際は、履修者が全員初学者であることを考慮して、基本的な概念、用語、理論等については、教員ができる限り丁寧に解説をし、全員がきちんと理解したうえで次に進むという方針を貫いた。

テキストは、中井英雄・齊藤慎・堀場勇夫・戸谷裕之著『新しい地方財政論』（有斐閣、2010年刊）を使用した。学習した主要テーマは以下のとおりである。

- 1 地方財政の予算と収入 2 地方財政の経費 3 地方財政の健全化
- 4 地方公営企業と第三セクター 5 公共投資と地方財政 6 行政改革と地方財政
- 7 政府の役割と地方政府の役割 8 地方政府の歳入 9 地方財政のすがた
- 10 地域づくりと地方財政 11 国のかたち

ただし、上記テキストの輪読は、「5 公共投資と地方財政」までで一旦中断し、前期途中からはサマースクールの準備に取り掛かり、B生の指導を仰ぎながら、三島市の財政に関する調査研究を行った。

後期には、はじめに、サマースクールの成果報告会に向けて、ヒアリング内容のまとめ、報告用原稿の準備、パワーポイント用スライドの作成、プレゼンテーションの練習等を行った。成果報告会終了後は、前期前半までで輪読を中断していたテキストにもどり、「6 行政改革と地方財政」から輪読を継続した。その間、最終報告書のための原稿作成、相互チェック等を行い、さらには、期末報告会に向けた準備を行った。

演習Aでは、地方財政や地方分権、さらには安倍政権による「地方創生」の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するために、毎月1回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、ホットな話題について全員で議論する機会を設けた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年9月8日(火)～9月9日(水)

実施都市： 栃木県日光市

実施施設： 日光市役所

実施内容：「日光市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび視察を行う予定であったが、折悪しく、集中豪雨で日光市に大きな被害が出たため急遽ヒアリングは中止となり、担当者から直接お話を伺うことはできなかった。

成 果：ただし、事前に質問事項を送付し、それに対する詳細な回答冊子を用意して下さっていたので、後日それを送っていただき、ゼミ内で議論した。質問内容は、財政、観光振興、高齢化対策、定住対策、交通政策、就業支援事業、介護福祉、地域おこし協力隊、中心市街地活性化推進事業等、24項目にわたるものであったが、項目ごとに丁寧な回答や解説がなされ、日光市の行財政の全貌を理解するのに大変勉強になった。

対象演習：演習A・B・C

実 施 日：2015年9月16日(水)～9月18日(金)

実施都市：静岡県三島市

実施施設：三島市役所

実施内容：「三島市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび視察を行った。

成 果：三島市役所の財政課・政策企画課・子育て支援課・商工観光課・水と緑の課、においてヒアリングを行った。ヒアリングでは三島市の財政運営の実態、ふるさと納税の課題、商工業振興策、中小企業支援、観光戦略、「ガーデンシティみしまアクションプラン」のねらい、子育て支援としての保育や医療現状と課題等について担当者の方から話を伺った。こうしたヒアリングや市内視察を通じて、三島市の行財政やまちづくりの特徴と課題等について理解を深めることができ、今後の研究を進めるうえで有益な情報を得ることができた。

対象演習：演習A・B・C（新A生（1年生）も参加）

実 施 日：2015年12月8日（火） 5時限目（16:40～18:10）

講演者名：足達雅英氏（総務省自治財政局財政課参事官）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 5号館 5407号室

実施内容：講演テーマ：「地方分権・地方創生の現状と展望」

成 果：講演の主な内容は次の通りであった。

1. 日本の行政組織の概要
2. 地方公共団体の概要
3. 国・地方自治体の関係
4. 地方創生に向けた取組等
5. 地方自治体の国際展開
6. 都市国家シンガポールから学んだこと。講演では、地方創生の理念や政策

の話にとどまらず、講演者自身の県への出向経験や海外駐在の体験談なども織り交ぜて具体的な話もしてくださったので、大変興味深く聞くことができた。

対象演習： 演習A（新A生（1年生）も参加）

実施日： 2016年3月22日（火）～3月24日（木）

実施都市： 新潟県湯沢町愛媛県松山市

実施場所： 湯沢町役場

実施内容： 「湯沢町の財政分析」というテーマの下、町役場所管課のヒアリングおよび視察を行った。

成果： 湯沢町総務部企画政策課長、産業観光部環境農林課長を含む4名の方々からヒアリングを行った。「農業」「福祉」「移住・定住」「観光」の4テーマに関する33項目の質問事項を事前にお送りしてあり、ヒアリングは、それへの回答という形で進められた。説明はとても丁寧で、予定時間を1時間以上も超過するほど熱心に回答してくださり、大変勉強になった。

F L P 演習 B

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

演習 B では、演習 A で学んだ地方財政に関する基本的な概念、用語、理論を実際の分析に生かすべく、地方分権や地方財政の実態を分析した研究書や報告書をテキストとして取り上げ、全員で議論した。

ただし、前年度（2014 年度演習 A）のゼミでは、後期の後半、春合宿におけるヒアリング調査（福島県いわき市）の準備（事前研究、質問項目の選定等）に時間を割いたために、結果的に演習 A の輪読用テキストが消化しきれなかった。そこで 2015 年度前期の演習 B では、まずテキストの輪読を再開することから始めた。すなわち、中井英雄・齊藤愼・堀場勇夫・戸谷裕之著『新しい地方財政論』（有斐閣、2010 年刊）の以下の章を学習した。

8 地方政府の歳入 9 地方財政のすがた 10 地域づくりと地方財政 11 国のかたち

2015 年度前期の後半では、春合宿（3 月 16 日～18 日）で行ったいわき市のヒアリングに基づく「報告書」の作成と、夏合宿（9 月 8 日～9 日）でヒアリングを行う予定の栃木県日光市に関する事前調査と質問項目の選定作業を行った。このうち、いわき市への「報告書」は夏休み前に完成させ、いわき市に送付することができた。

次項目に記載したように、集中豪雨のために、日光市のヒアリングは実施できなかった。しかし、後日質問への回答書を送ってもらったので、後期にはいると、その回答書の検討、再質問書の作成・送付、さらに再回答書の検討作業を行った。そして、検討結果を踏まえて「報告書」を完成させる作業に注力し、年内に報告書を日光市に送ることができた。12 月 8 日の講演会（足達雅英氏）を終えて後、テキストの輪読に戻った。新しいテキストとしては、松谷明彦著『東京劣化』（PHP 新書、2015 年 3 月刊）を用いた。本書で学んだ内容は下記の通りである。

1 国のタブーその 1—少子化対策、国のタブーその 2—経済成長の追及ほか 2 東京これからの現実 3 東京劣化現象への誤解 4 これからの東京の経済 5 なぜ政府は間違えるのか—人口政策の歴史が教えてくれること 6 東京劣化への対処

演習 B では、地方財政や地方分権の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するために、毎月 1 回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、それについて全員で議論する機会を設けた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 A・B・C

実施日： 2015 年 9 月 8 日（火）～9 月 9 日（水）

実施都市： 栃木県日光市

実施施設： 日光市役所

実施内容： 「日光市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび視察を行う予定であったが、折悪しく、集中豪雨で日光市に大きな被害が出たた

め急遽ヒアリングは中止となり、担当者から直接お話を伺うことはできなかった。

成 果 : ただし、事前に質問事項を送付し、それに対する詳細な回答冊子を用意してくださっていたので、後日それを送っていただき、ゼミ内で議論した。質問内容は、財政、観光振興、高齢化対策、定住対策、交通政策、就業支援事業、介護福祉、地域おこし協力隊、中心市街地活性化推進事業等、24項目にわたるものであったが、項目ごとに丁寧な回答や解説がなされ、日光市の行財政の全貌を理解するのに大変勉強になった。

対象演習 : 演習A・B・C

実 施 日 : 2015年9月16日(水)～9月18日(金)

実施都市 : 静岡県三島市

実施施設 : 三島市役所

実施内容 : 「三島市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび視察を行った。

成 果 : 三島市役所の財政課・政策企画課・子育て支援課・商工観光課・水と緑の課、においてヒアリングを行った。ヒアリングでは三島市の財政運営の実態、ふるさと納税の課題、商工業振興策、中小企業支援、観光戦略、「ガーデンシティみしまアクションプラン」のねらい、子育て支援としての保育や医療現状と課題等について担当者の方から話を伺った。こうしたヒアリングや市内視察を通じて、三島市の行財政やまちづくりの特徴と課題等について理解を深めることができ、今後の研究を進めるうえで有益な情報を得ることができた。

対象演習 : 演習A・B・C(新A生(1年生)も参加)

実 施 日 : 2015年12月8日(火) 5時限目(16:40～18:10)

講演者名 : 足達雅英氏(総務省自治財政局財政課参事官)

実施施設 : 中央大学 多摩キャンパス 5号館 5407号室

実施内容 : 講演テーマ : 「地方分権・地方創生の現状と展望」

成 果 : 講演の主な内容は次の通りであった。

1. 日本の行政組織の概要
2. 地方公共団体の概要
3. 国・地方自治体の関係
4. 地方創生に向けた取組等
5. 地方自治体の国際展開
6. 都市国家シンガポールから学んだこと。講演では、地方創生の理念や政策の話にとどまらず、講演者自身の県への出向経験や海外駐在の体験談なども織り交ぜて具体的な話もして下さったので、大変興味深く聞くことができた。

FLP演習C

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

演習Cでは、毎回、ゼミ生が卒業論文の中間報告を行い、その報告をめぐってゼミ生全員で議論し、質疑応答や意見交換を行うことを通じて、論文内容の改善や修正に役立てた。そして期末に卒業論文を完成させ、それらを編集して論文集を作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年9月8日(火)～2015年9月9日(水)

実施都市： 栃木県日光市

実施施設： 日光市役所

実施内容： 「日光市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび視察を行う予定であったが、折悪しく、集中豪雨で日光市に大きな被害が出たため急遽ヒアリングは中止となり、担当者から直接お話を伺うことはできなかった。

成果： ただし、事前に質問事項を送付し、それに対する詳細な回答冊子を用意してくださっていたので、後日それを送っていただき、ゼミ内で議論した。質問内容は、財政、観光振興、高齢化対策、定住対策、交通政策、就業支援事業、介護福祉、地域おこし協力隊、中心市街地活性化推進事業等、24項目にわたるものであったが、項目ごとに丁寧な回答や解説がなされ、日光市の行財政の全貌を理解するのに大変勉強になった。

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年9月16日(水)～2015年9月18日(金)

実施都市： 静岡県三島市

実施施設： 三島市役所

実施内容： 「三島市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび視察を行った。

成果： 三島市役所の財政課・政策企画課・子育て支援課・商工観光課・水と緑の課、においてヒアリングを行った。ヒアリングでは三島市の財政運営の実態、ふるさと納税の課題、商工業振興策、中小企業支援、観光戦略、「ガーデンシティみしまアクションプラン」のねらい、子育て支援としての保育や医療現状と課題等について担当者の方から話を伺った。こうしたヒアリングや市内視察を通じて、三島市の行財政やまちづくりの特徴と課題等について理解を深めることができ、今後の研究を進めるうえで有益な情報を得ることができた。

対象演習： 演習 A・B・C（新 A 生（1 年生）も参加）

実 施 日： 12 月 8 日（火） 5 時限目（16:40～18:10）

講演者名： 足達 雅英 氏（総務省自治財政局財政課参事官）

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 5 号館 5407 号室

実施内容： 講演テーマ：「地方分権・地方創生の現状と展望」

成 果： 講演の主な内容は次の通りであった。

1. 日本の行政組織の概要
2. 地方公共団体の概要
3. 国・地方自治体の関係
4. 地方創生に向けた取組等
5. 地方自治体の国際展開
6. 都市国家シンガポールから学んだこと。講演では、地方創生の理念や政策の話にとどまらず、講演者自身の県への出向経験や海外駐在の体験談なども織り交ぜて具体的な話もしてくださったので、大変興味深く聞くことができた。

(7) 植野 妙実子 (理工学部・教授)

FLP演習C

<テーマ>

格差是正の法政策-男女共同参画社会の実現に向けて

<授業の概要>

前期は、女性政策の現状と課題を、文献を通して確認する。また安倍首相のもとで行われている女性政策の方針を探り、問題点を考える。海外の女性政策との比較も行う。

後期は、前期で学んだことを実際に、インタビュー等を通じて確認する。また女子学生のキャリア支援のシンポジウムを企画し、広報につとめる。こうしたことを通して女性がキャリアを積むことの重要性を認識し、現実の問題点、何を解決すべきかを把握する。さらに、前・後期を通して学んだことをもとに論文をしあげる。

<活動内容>

植野ゼミでは、前期は予定通り、文献を通して女性政策の現状と課題を確認した。とりわけ少子化を克服したフランスの少子化対策、女性政策を次の本を通読して確認した。通読したのは『フランスのワーク・ライフ・バランス』（石田久仁子他編/パド・ウイメンズ・オフィス）である。関連する文献も読み、フランスの少子化対策は、ジェンダーメインストリームという男女平等を基本としてさまざま考えられていることを知った。後期は、1つは、担当する教員（植野妙実子）の知の回廊シリーズの『女も男も輝く社会』のビデオ制作に携わったことである。このビデオは、日本の出生率が1.42(2014年)となり、降下したことを受けて、少子化を克服したフランスがどのような政策をとっているのか比較検討するものである。その結果、フランスでは子育てにかかる費用が少なく、3歳までは育休をとることが可能で、3歳からは幼児学校といういわば全員入所という形をとっていることがわかった。すなわち待機児童の問題は生じない。労働時間の規制や休暇の取得(年次有給休暇5週間、企業主への義務付け)など子育てしやすい環境が整っている。それでも男性に育休をどのようにとらせるかなど課題はあるが、日本と比較すると少ないように思われた。ビデオ制作にあたって、教員の植野がフランスで取材してきたものを見るなどして、フランスの実情を知ることができた。ゼミの学生はビデオにも出演、問題点も述べている。もう1つは、女性白門会主催の女子学生のキャリア支援の企画を考え、広報に努めた。最後にゼミ論文を仕上げた。稲澤優子は『就職活動を通して考えた男女平等』を書き、就職活動を通して多くの男女の差別的取り扱いがあることを知ったことを述べ、分析した。中川朋子は『私たちと男と女と』を書き、LGBTフレンドリーにすることで社会が豊かになることを述べた。いずれもこれまでの3年間のFLPの活動の成果として優れた論文であった。

(8) 新原 道信 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

「3. 1 1以降」の持続可能な地域社会／コミュニティの形成に寄与する“惑星社会のフィールドワーク”

<授業の概要>

いま私たちは、地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題を抱える“惑星社会の諸問題”に直面せざるを得ません。小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“惑星社会の諸問題”に直面する地域社会／コミュニティの潜在力をすくい取り、問題解決の道筋を“探究／探求”する“社会のオペレーター”がいま求められています。“社会のオペレーター”とは、個々の住民生活にとってホームドクターのようなひと、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して、「専門的な対処」へとつなげるひと、様々な「専門領域」をつなぐひと（オペレーター）です。惑星社会の諸問題に対する“責任／応答力（responsibility）”を高めるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、「立川プロジェクト」を中心に関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク（参与観察）は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な“臨場・臨床の智”——フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——は、「座学」だけで学ぶことは難しく、「先輩職人の背中」から学ぶというクラフト・ワークのスタイルをとることが重要となります。ゼミでは“たったひとり降り立つ”と“対話的なエラボレーション”を同時に追求し、質的調査／国際フィールドワーク論では「座学」、立川プロジェクトは、関与型フィールドワーク（参与観察）で自分のフィールドに出て行くための“臨場・臨床の智”を鍛える場としています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、「ファカルティリンケージ・プログラム（FLP）」（学部をこえて共通の問題関心をもった学生が学ぶ教育システム）の「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。1つ1つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

昨年度は、文学部ゼミでは、田園調布・神保町・海老名・相模原で、地域ゼミは、静岡県三島市や多摩モノレール沿線で、国際ゼミは、神奈川県橋本駅周辺と福島県いわき市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたり、また「3.11」以降は、被災者の方たちが暮らす立川市の公営団地での活動（「立川プロジェクト」）など——を行っています。そして、ゼミ生たちは、出会った土地や人に想いを馳せつつ、自分の論文を書き上げます。1人1人研究テーマが異なり、個人作業になりがちな論文作成ですが、私たちは、お互い声を掛け合い、相談しながら執筆を行ないました。

新原ゼミの特徴は、1人1人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っただけ方針を決めてきました。

そうして、福島県いわき市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年9月1日(火)～9月3日(木)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（10班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を11月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の2月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2015 年 9 月 10 日(木) ～9 月 12 日(土)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する 4 ゼミ（文学部・大学院・F L P 地域公共・F L P 国際協力）の学生が分散するかたちで 1 0 班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の 2 日程で 4 ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成 果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（1 0 班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を 1 1 月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の 2 月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

F L P 演習 B

<テーマ>

「3. 1 1以降」の持続可能な地域社会／コミュニティの形成に寄与する“惑星社会のフィールドワーク”

<授業の概要>

いま私たちは、地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題を抱える“惑星社会の諸問題”に直面せざるを得ません。小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“惑星社会の諸問題”に直面する地域社会／コミュニティの潜在力をすくい取り、問題解決の道筋を“探究／探求”する“社会のオペレーター”がいま求められています。“社会のオペレーター”とは、個々の住民生活にとってホームドクターのようなひと、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して、「専門的な対処」へとつなげるひと、様々な「専門領域」をつなぐひと（オペレーター）です。惑星社会の諸問題に対する“責任／応答力（responsibility）”を高めるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、「立川プロジェクト」を中心に関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・F L P（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク（参与観察）は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な“臨場・臨床の智”——フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——は、「座学」だけで学ぶことは難しく、「先輩職人の背中」から学ぶというクラフト・ワークのスタイルをとることが重要となります。ゼミでは“たったひとり降り立つ”と“対話的なエラボレーション”を同時に追求し、質的調査／国際フィールドワーク論では「座学」、立川プロジェクトは、関与型フィールドワーク（参与観察）で自分のフィールドに出て行くための“臨場・臨床の智”を鍛える場としています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、「ファカルティリンケージ・プログラム（FLP）」（学部をこえて共通の問題関心をもった学生が学ぶ教育システム）の「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あ

るき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。1つ1つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

昨年度は、文学部ゼミでは、田園調布・神保町・海老名・相模原で、地域ゼミは、静岡県三島市や多摩モノレール沿線で、国際ゼミは、神奈川県橋本駅周辺と福島県いわき市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたり、また「3. 11」以降は、被災者の方たちが暮らす立川市の公営団地での活動（「立川プロジェクト」）など——を行っています。そして、ゼミ生たちは、出会った土地や人に想いを馳せつつ、自分の論文を書き上げます。1人1人研究テーマが異なり、個人作業になりがちな論文作成ですが、私たちは、お互い声を掛け合い、相談しながら執筆を行ないました。

新原ゼミの特徴は、1人1人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、福島県いわき市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年9月1日(火)～9月3日(木)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（10班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を11月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の2月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2015 年 9 月 10 日(木) ～9 月 12 日(土)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する 4 ゼミ（文学部・大学院・F L P 地域公共・F L P 国際協力）の学生が分散するかたちで 1 0 班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の 2 日程で 4 ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成 果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（1 0 班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を 1 1 月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の 2 月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

FLP演習C

<テーマ>

「3. 1 1以降」の持続可能な地域社会／コミュニティの形成に寄与する“惑星社会のフィールドワーク”

<授業の概要>

いま私たちは、地球規模のグローバル化・ネットワーク化と同時に根本的な有限性の問題を抱える“惑星社会の諸問題”に対面せざるを得せん。小さな問題の「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析」する“惑星社会のフィールドワーク”をすることで、自分の「小さな努力」が大きな社会的意義をもたらす可能性を持つ時代を生きています。“惑星社会の諸問題”に直面する地域社会／コミュニティの潜在力をすくい取り、問題解決の道筋を“探究／探求”する“社会のオペレーター”がいま求められています。“社会のオペレーター”とは、個々の住民生活にとってホームドクターのようなひと、地域生活者の渾然一体とした要求の真意をつかみ、他の「専門家」にもわかる言葉に「翻訳」して、「専門的な対処」へとつなげるひと、様々な「専門領域」をつなぐひと（オペレーター）です。惑星社会の諸問題に対する“責任／応答力（responsibility）”を高めるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、「立川プロジェクト」を中心に関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・大山団地や砂川地区、被災地での活動に参加させていただいています。関与型フィールドワーク（参与観察）は、質的調査による事例研究、あるいはマルチメソッドによるフィールドワークによって調査研究の成果をもたらすための必須のメソドロジーです。“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な“臨場・臨床の智”——フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——は、「座学」だけで学ぶことは難しく、「先輩職人の背中」から学ぶというクラフト・ワークのスタイルをとることが重要となります。ゼミでは“たったひとり降り立つ”と“対話的なエラボレイション”を同時に追求し、質的調査／国際フィールドワーク論では「座学」、立川プロジェクトは、関与型フィールドワーク（参与観察）で自分のフィールドに出て行くための“臨場・臨床の智”を鍛える場としています。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、「ファカルティリンケージ・プログラム（FLP）」（学部をこえて共通の問題関心をもった学生が学ぶ教育システム）の「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あ

るき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。1つ1つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

昨年度は、文学部ゼミでは、田園調布・神保町・海老名・相模原で、地域ゼミは、静岡県三島市や多摩モノレール沿線で、国際ゼミは、神奈川県橋本駅周辺と福島県いわき市でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたり、また「3. 11」以降は、被災者の方たちが暮らす立川市の公営団地での活動（「立川プロジェクト」）など——を行っています。そして、ゼミ生たちは、出会った土地や人に想いを馳せつつ、自分の論文を書き上げます。1人1人研究テーマが異なり、個人作業になりがちな論文作成ですが、私たちは、お互い声を掛け合い、相談しながら執筆を行ないました。

新原ゼミの特徴は、1人1人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、福島県いわき市で4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A・B・C

実施日： 2015年9月1日(火)～9月3日(木)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する4ゼミ（文学部・大学院・FLP地域公共・FLP国際協力）の学生が分散するかたちで10班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の2日程で4ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（10班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を11月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の2月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

対象演習： 演習A・B・C

実 施 日： 2015 年 9 月 10 日(木) ～9 月 12 日(土)

実施都市： 福島県いわき市

実施施設： スパリゾートハワイアンズ

実施内容： 新原が担当する 4 ゼミ（文学部・大学院・F L P 地域公共・F L P 国際協力）の学生が分散するかたちで 1 0 班の調査研究チームを夏休み前に結成し、チームごとに事前調査を行ったうえで、福島県いわき市で前期後期の 2 日程で 4 ゼミ合同調査（観察・フィールドワーク）を行った。

成 果： 文学部・大学院・地域公共・国際協力が各ゼミ合同で構成された調査チーム（1 0 班）ごとにいわき調査の成果について合同報告会を 1 1 月に開催した。さらに各プログラムの成果報告会後の 2 月に、ゼミごとに、年度末の合同成果報告会を開催した。

(9) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域文化振興の実践 (1)

<演習のスケジュール>

4月・5月	サマースクール・テーマ設定
6月・7月	1. サマースクールでの調査実施に向けての具体的な計画・立案 2. 多摩1キロフェスにおける参加体制の検討
8月・9月	多摩1キロフェス実施に向けての準備&打ち合わせ
9月	イベント実施
10月・11月	サマースクール中間報告書作成・実施 多摩1キロフェス振り返り・報告書作成
11月	雲光院お月見コンサート&落語会の運営スタッフ参加
12月	年間活動報告書作成
1月	能楽教室の準備と実施

<活動内容>

前期 (4月～7月) の中心的研究内容は、9月16日～18日に行われたサマースクール (三島市) に向けてのテーマ設定、事前調査であった。「三島ブランド」を食・景観・伝統芸能・立地的利点に着目して、班に分かれてそれぞれ注目すべき点と問題点を洗い出し、8月に現地へ赴き、事前調査を行った。多摩1キロフェスは、9月12、13日のミニフェスと19、20日の1キロフェスの二段階で行われた。イベント内容立案・準備・運営をB生がすべて任されたため、A生はそのサポートを行った。後期は、サマースクールの振り返り、中間報告書の作成と多摩1キロフェス (ミニフェスも) の振り返りを中心に活動を行った。また、次年度のテーマにつなげるべく、学外招聘講師としてシテ方金春流能楽師中村昌弘先生の講義と実習を受けた (1月)。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習: 演習A

実施日: 2015年5月2・3日、5月30・31日、6月27日、7月4・5日、7月25～31日、8月16日、9月12・13日、9月19・20日、11月26日、12月22日、1月21日

実施場所: パルテノン多摩
雲光院 (11月26日)
能楽教室 (学外招聘講師) (1月21日)

実施内容: 9月19日、20日に行われた多摩1キロフェスのサポートスタッフとして職員の方との打合せ。その一週間前のプレイベントの企画・運営を行う。また、パンフレット作成、ミニフェス企画等を行い、当日は各部署運営サポートの他、

記念缶バッジのデザインもゼミ学生が手掛けた。

11月26日、雲光院での落語会開催準備と運営スタッフとしての活動では、地域の文化振興拠点である寺院で古くから継続的に行われている落語会の運営の実態を学び、地域の人々との交流がはかれた。

1月21日、学外招聘講師としてシテ方金春流能楽師中村昌弘先生の講義を受けた。

成 果 : 今年で3年目となった多摩1キロフェスの準備から本番までスタッフとして関わり、初年度から参加しているC生、来場者数が急激に増えた昨年を体験しているB生らからフェスの変遷を学びながら、3年目の独自性を模索することが出来た。企画自体が過去2年と比べて盛りだくさんとなり、初参加のA生にとっては戸惑うことも多かったが、このようなフェスが地域に根付いていく過程で起こり得る問題点をつぶさに体験・研究することができ、また、フェス終了後に主催であるパルテノン多摩の事務局長らと詳細な振り返りの会議を持つことが出来て、PDCAサイクルをきちんと体験し、実りある学習が得られた。

FLP演習B

<テーマ>

地域文化振興の実践（２）

<演習のスケジュール>

- 4月～7月 多摩1キロフェスにおける参加体制の検討
ミニフェスの実施内容の検討と決定、実施に向けての準備
- 8月・9月 多摩1キロフェス実施に向けての準備&打ち合わせ
- 9月 イベント実施と振り返り
- 10月 「多摩の大学まちづくりコンペティション」参加に向けての準備
- 11月 「多摩の大学まちづくりコンペティション」の振り返り
多摩1キロフェス振り返り・報告書作成
雲光院お月見コンサート&落語会の運営スタッフ参加
- 12月 年間活動報告書作成
- 1月 能楽教室の準備と実施

<授業の概要>

「多摩1キロフェス」の一週間前に行われた「多摩1キロミニフェス」はB生を中心として、地域のボランティアスタッフも加わった「かるがも隊」が主体となり、企画・運営を行った。4月からその準備にとりかかり、主催のパルテノン多摩職員、およびフェス運営会社スタッフと綿密なやりとりを重ねて、自分たちの企画した「遊び場」づくりを実施した。後期には、11月14日に行われた第二回「多摩の大学まちづくりコンペティション」に参加した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B

実施日： 2015年5月2・3日、5月30・31日、6月27日、7月4・5日、7月25～31日、8月16日、9月12・13日、9月19・20日、11月14日、11月26日、12月22日、1月21日

実施場所： パルテノン多摩
雲光院（11月26日）
能楽教室（学外招聘講師）（1月21日）

実施内容： 9月19日、20日に行われた多摩1キロフェスのサポートスタッフとして職員の方との打合せ。その一週間前のプレイベントの企画・運営を行う。また、パンフレット作成、ミニフェス企画等を行い、当日は各部署運営サポートの他、記念缶バッジのデザインもゼミ学生が手掛けた。
11月14日、実践女子大学日野キャンパスで行われた「多摩の大学まちづくりコンペティション」に参加。
11月26日、雲光院での落語会開催準備と運営スタッフとしての活動では、

地域の文化振興拠点である寺院で古くから継続的に行われている落語会の運営の実態を学び、地域の人々との交流がはかれた。

1月21日、学外招聘講師としてシテ方金春流能楽師中村昌弘先生の講義を受けた。

成 果 : 今年で3年目となった多摩1キロフェスの準備から本番までスタッフとして関わり、初年度から参加しているC生のアドバイスを受けつつ、来場者数が急激に増えた昨年を体験しているB生が、フェスの変遷を学びながら今年度の独自性を模索することが出来た。企画自体が過去2年と比べて盛りだくさんとなり、戸惑うことも多かったが、このようなフェスが地域に根付いていく過程で起こり得る問題点をつぶさに体験・研究することができ、また、フェス終了後に主催であるパルテノン多摩の事務局長らと詳細な振り返りの会議を持つことが出来て、PDCAサイクルをきちんと体験し、実りある学習が得られた。

FLP演習C

<テーマ>

地域文化振興の実践（3）

<授業の概要>

「多摩1キロフェス」の運営スタッフとして参加。3年目となるので、後輩たちに企画・運営に関するアドバイスをするとともに、イベントの運営状況の変化に伴う問題点を検討する際に有意義な意見を提供した。これにより、主催のパルテノン多摩が次年度からの運営の在り方を見直すことにつながった。「南大沢アウトレットパーク」での学生主催イベントを企画して、企画書を先方に提示したが、都合により実現に至らず。2月にパルテノン多摩で行われた子ども向けのイベント「ぽこぽこフェスタ」に運営スタッフとして参加した。3年間の活動を振り返り、ゼミ活動の日録と、アルバムを作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習C

実施日： 2015年5月2・3日、5月30・31日、6月27日、7月4・5日、7月25～31日、8月16日、9月12・13日、9月19・20日、11月14日、11月26日、12月22日、1月21日、2月6・7日

実施場所： パルテノン多摩（下記以外）

雲光院（11月26日）

能楽教室（学外招聘講師）（1月21日）

実施内容： 9月19日、20日に行われた多摩1キロフェスのサポートスタッフとして職員の方との打合せ。その一週間前のプレイベントの企画・運営を行う。また、パンフレット作成、ミニフェス企画等を行い、当日は各部署運営サポートの他、記念缶バッジのデザインもゼミ学生が手掛けた。

11月26日、雲光院での落語会開催準備と運営スタッフとしての活動では、地域の文化振興拠点である寺院で古くから継続的に行われている落語会の運営の実態を学び、地域の人々との交流がはかれた。

1月21日、学外招聘講師としてシテ方金春流能楽師中村昌弘先生の講義を受けた。

2月6・7日、ぽこぽこフェスタに参加。

成果： 今年で3年目となった多摩1キロフェスの準備から本番までスタッフとして関わり、初年度から参加しているC生が、後輩たちにフェスの変遷を伝えながら、3年目の独自性を模索することが出来た。企画自体が過去2年と比べて盛りだくさんとなり、初参加のA生にとっては戸惑うことも多かったが、C生の適切なアドバイスにより、このようなフェスが地域に根付いていく過程で起こり得る問題点をつぶさに体験・研究する

ことができ、また、フェス終了後に主催であるパルテノン多摩の事務局
長らと詳細な振り返りの会議を持つことが出来て、PDCAサイクルを
きちんと体験し、実りある学習が得られた。

(10) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中で成されてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。また同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えていこうとする際の様々な課題についても検討していきます。

地域で展開されるスポーツの実相を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的に検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林勉ゼミ演習Aでは、4月から5月までは課題図書の輪読を通じて、基礎的な研究、調査スキルの習得を行い、その後は、連携して活動するスポーツ・健康科学プログラムの学生とともにサマースクールの準備、調査、報告書の作成を行った。とくに今年度は静岡県三島市をフィールドに、現地の市役所、企業へのヒアリング等を行い、最終的にはそれらをもとにスポーツツーリズムによる地域活性化を提言した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2015年11月21日(土)～11月24日(火)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： あきぎんスタジアム

実施内容： 演習Bの調査のサポート及び次年度へ向けた事前調査の実施。

成果： 演習Bの行ったプロジェクトの成果と課題点について明らかにしたことで、次年度のプロジェクトの大まかな方向性を定めた。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中で成されてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。また同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えていこうとする際の様々な課題についても検討していきます。

地域で展開されるスポーツの実相を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的に検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミ演習 B では、1 年間を通じて秋田県の Jリーグクラブ「ブラウブリッツ秋田」と共同で「シルバー縁活プロジェクト」を実施した。これは昨年度より開始された先輩学生のプロジェクトを引き継ぎ、さらに発展させたものであり、秋田県における高齢者のコミュニティをスポーツによって形成することを目指したものである。秋田県では、現地フィールドワーク、高齢者を対象としたイベントを企画・運営を行った。当プロジェクトの詳細および成果については、最終的に報告書にまとめられた。

コンテスト成績

- ・中央大学総合政策学部プロジェクト奨学金 学部長賞
- ・中央大学総合政策学部リサーチフェスタ 敢闘賞

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習 B

実施日： 2015 年 4 月 5 日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： ブラウブリッツ秋田・他

実施内容： ブラウブリッツ秋田スタッフや秋田市役所長寿福祉課職員との意見交換を行った。

成果： 秋田における高齢化の現状や市の動向を把握した事によって、プロジェクトテーマの着想の大きな土台となった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 6 月 15 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： ブラウブリッツ秋田・他

実施内容： 9 月 19 日のイベント実施場所での実地調査及びブラウブリッツ秋田スタッフとの打ち合わせ。

成 果： イベント実施場所に直接足を運んだことで、より具体的なイベント内容の企画や調査項目の策定の一助となった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 8 月 10 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 加賀英呉服店・他

実施内容： プロジェクト運営に必要な基盤を確保するため、現地の企業へ協力依頼の営業活動を実施。

成 果： 訪問企業からの協力もあり、ここで得られた成果はプロジェクト成功の大きな支えとなった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 9 月 6 日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 9 月 19 日のプロジェクト実施に先駆け、イベント開催場所での事前調査及び準備。

成 果： プロジェクトの一連の流れのイメージを膨らませたことにより、当日の無駄のない準備と運営に繋がった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 9 月 14 日(月) ～9 月 20 日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園

実施内容： 9 月 19 日のプロジェクト実施及びそれに向けた準備と後処理。

成 果： 事前の万全な準備により、プロジェクトは成功。現地で大きな反響を呼んだ。また、ここで得られた調査結果は、その後の調査の礎となった。

対象演習： 演習B

実 施 日： 2015 年 11 月 20 日(金) ～11 月 23 日(月)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： 八橋運動公園、秋田市役所

実施内容： プロジェクトの関係者へのヒアリングなどを通じてプロジェクトの事後調査を行った。

成 果： プロジェクトが現地で与えた影響と直面した課題について明らかにし、ここでの調査結果をもとに調査報告書の作成を行った。

FLP演習C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなってきています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中で成されてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。また同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えていこうとする際の様々な課題についても検討していきます。

地域で展開されるスポーツの実相を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的に検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミ演習Cでは、共同で活動しているスポーツ・健康科学プログラムの学生とともに、前期は演習A、Bで展開されるプロジェクトの研究サポート、後期は、Jリーグが掲げる「地域密着」という理念について、Jクラブへのヒアリング、財務分析を通じて、理念の妥当性を検証した。それらの結果については報告書にまとめられ、関係各所へ配布された。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習C

実施日： 2015年9月18日(金)～9月20日(日)

実施都市： 秋田県秋田市

実施施設： ブラウブリッツ秋田

実施内容： 演習Bが実施したプロジェクトのサポートを行った。

成果： 昨年度行ったプロジェクトの経験を通じて、サポートを行ったことによって、成功の一助となった。

(11) 小林 秀徳 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

都市システムのダイナミック・シミュレーション

<授業の概要>

毎回パソコンを使って修業してもらう。

各自1つの対象都市を決め現地調査をし、モデリング&シミュレーションを実施する。

<活動内容>

[1] ゼミ時間中に各自パソコンを用いてモデリング&シミュレーションの技能習得のための演習を実施した。教材は以下のものである。

1. GDP 統計の再現 日本の場合
2. GDP 統計の再現 アメリカの場合
3. 複利計算モデル
4. 経済成長モデル
5. 成長の限界モデル
6. ランチェスターモデル
7. 在庫受注残モデル
8. 調整遅れモデル
9. 乗数加速度モデル

[2] 各自次の1~5の中から一つを選び研究プロポーザルを作成した。

1. 港湾緑地計画 2. 東京湾再開発 3. 国際都市化政策 4. 環境未来都市計画
5. 東京駅周辺再開発

但し、プロポーザルの使用は以下のとおりである。

(1) 次の順番での記述を通して「何が問題であるか」を明らかにするものであること。

1. 目的 2. 趨勢 3. 乖離 4. 代替案 5. 選択方法

(2) 仮説的に因果ループ構造を図化し添付すること。

(12) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域における犯罪予防と再犯減少策の調査研究

<授業の概要>

① 刑罰・保護処分について：現行の刑罰制度と保護処分の制度の概要を学んだうえで、抑止と更生の効果がどのように検証されているのかを考えます。憲法、刑法、刑事訴訟法、少年法などが構成する、刑事司法制度と少年司法制度の概要を、手続きの骨格と運用状況を中心にみていきます。こうした制度は、犯罪減少策としては、抑止と更生をその手法にしているので、それぞれの考え方を踏まえて、その効果がどのように検証されてきているのかを調べます。

② 犯罪学について：犯罪の要因を主に行動科学を活用して解明しようとする分野は犯罪学といわれます。社会の構造や文化的期待、帰属する組織の体質、地域社会の凝集性、家庭の構造や心理的な愛着、個人の認知・理由づけのパターン、などに着目する、主だった仮説を学びます。犯罪の要因が社会全体にかかわることから (Macro)、より身の回りのこと (Exo、Micro)、それに個人など、多層に及ぶことを学ぶ。

③ 地域について：②で学んだことを踏まえて、①で学んだ現行の、刑罰、保護処分の制度がどの程度、多層的な犯罪要因に対応できているのかを考えます。現行の制度で十分な対処ができていない犯罪要因について、地域の自治体や近隣地域、それに、児童福祉、家庭支援、精神衛生、教育など地域を拠点とする各機関が、どのように取り組んでいくことができるのかを考えます。

<活動内容>

前期は、サマースクールの準備、後期には成果報告、期末報告の準備を中心に進めた。少年法の教材の講読を通じて基礎的な法制の理解を身につけ、法制理解に必要な刑罰論、手続論、犯罪学理論への関心を喚起した。BC生のゼミに参加し、警察政策学会部会での講演（中央大学法学部野口教授）の概要報告、犯罪学に関するゼミ報告について質疑、意見交換を行った。2016年2月1日（月）開催の報告会とシンポジウムに参加した。前者は、警察政策学会部会（社会安全政策教育研究部会）による関連ゼミ卒業論文報告であり、後者は、「犯罪法システムの構築」をテーマとする研究者による基調講演とパネル討論である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習A

実施日： 2015年3月23日(月)

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 八王子少年センター

実施内容： 少年センター訪問と街頭補導同行見学。

成果： 少年センターの活動内容（補導、相談）、担当地域の少年非行・犯罪情勢について講義を受け、町田駅周辺の補導に同行見学した。

FLP演習B・C

<テーマ>

地域における犯罪予防と再犯減少策の調査研究

<授業の概要>

① 刑罰・保護処分について：現行の刑罰制度と保護処分の制度の概要を学んだうえで、抑止と更生の効果がどのように検証されているのかを考えます。憲法、刑法、刑事訴訟法、少年法などが構成する、刑事司法制度と少年司法制度の概要を、手続きの骨格と運用状況を中心にみていきます。こうした制度は、犯罪減少策としては、抑止と更生をその手法にしているので、それぞれの考え方を踏まえて、その効果がどのように検証されてきているのかを調べます。

② 犯罪学について：犯罪の要因を主に行動科学を活用して解明しようとする分野は犯罪学といわれます。社会の構造や文化的期待、帰属する組織の体質、地域社会の凝集性、家庭の構造や心理的な愛着、個人の認知・理由づけのパターン、などに着目する、主だった仮説を学びます。犯罪の要因が社会全体にかかわることから (Macro)、より身の回りのこと (Exo、Micro)、それに個人など、多層に及ぶことを学ぶ。

③ 地域について：②で学んだことを踏まえて、①で学んだ現行の、刑罰、保護処分の制度がどの程度、多層的な犯罪要因に対応できているのかを考えます。現行の制度で十分な対処ができていない犯罪要因について、地域の自治体や近隣地域、それに、児童福祉、家庭支援、精神衛生、教育など地域を拠点とする各機関が、どのように取り組んでいくことができるのかを考えます。

<活動内容>

前期は、サマースクールの準備、後期には成果報告、期末報告の準備に加わり、A 生への助言を行った。少年法の教材の講読を通じて基礎的な法制の理解を身につけ、法制理解に必要な刑罰論、手続論、犯罪学理論への関心を喚起した。警察政策学会部会での講演（中央大学法学部野口教授）の概要報告、犯罪学に関するゼミ報告について質疑、意見交換を行った。

2015年度より、社会安全政策論に関するフェイスブックの管理運営に携わる。他大学を含む関連の学生を主体とするもので、定期的に投稿している。

2016年2月1日（月）開催の報告会とシンポジウムに参加した。前者は、警察政策学会部会（社会安全政策教育研究部会）による関連ゼミ卒業論文報告であり、後者は、「犯罪法システムの構築」をテーマとする研究者による基調講演とパネル討論である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B・C

実施日： 2015年3月23日（月）

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 八王子少年センター

実施内容： 少年センター訪問と街頭補導同行見学。

成果： 少年センターの活動内容（補導、相談）、担当地域の少年非行・犯罪情勢について講義を受け、町田駅周辺の補導に同行見学した。

(13) 細野 助博 (総合政策学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

まちづくりの成功事例の検証

<授業の概要>

人口減少時代の生き残りをかけて、地域はお互いに若者世代の取り合いを開始しました。その号令は、「地方創生」をキーワードにした国の計画要請（人口ビジョンを作れ、総合戦略を策定しろ）が鳴らしたのです。これでますます、地方は地域間競争を激化させることになります。困ったことです。大都市も、中小都市も、中山間地も、僻村だって生き残って多様な生活が繰り広げられる方がよっぽど健全なはずです。

ところで、その都市にしたって、中心市街地の衰退は目を覆うばかりです。どうしてこのようになったのでしょうか。郊外に林立するメガモールだけの責任でしょうか？そうではありませんね。闇雲に注ぎ込まれる「補助金」という税金、それを取ってくることで自分の役目は終わったと勘違いし、それに異を唱えと「村八分」という商店街の雰囲気、一步下がって市民協働を唱えるだけで、調整も規制もできないよという行政の消極的な姿勢、地域の衰退など無関係と孤高を保つことだけに生きがいを見出す大学のプライド。こんなところ知るかとさっさと逃げ出す若者達の意識の低さ、皆でまちを壊しています。少子高齢社会の進むまちの中で、まちの「中心」として市街地が果たすべき役割を自覚していないところが問題なのです。ゼミはこの問題意識を共有し、理論と実践の両面から、まちづくりを調査研究します。

授業内容についてはおおまかに前期と後期に分けられ、前期は主に都市を調査・分析する上で必要となる基礎的な知識の習得を目標とし、Excel や統計、地図ソフトを活用した分析手法の習得や、都市を扱った代表的な論文の輪読などを通じて読解力・分析力を養います。そして後期では、前期で学習した内容を踏まえて実際のまちを「見る」、(まちナビ) ことに主眼を置き、実地調査等を行いながら多くの事例を学びます。

2009 年度は、群馬県沼田市、宮城県仙台市や東京都福生市を調査対象として取り上げました。データ収集や現地ヒアリング等を通じて問題の実態を知り、グループワークによって分析検討し、具体的な政策提言を含んだ論文とプレゼンテーション資料等を作成しました。

2010 年度は、長野県富士見町との「都市農村交流」をはじめ、「学校跡地活用」に関して八王子のケースをもとに調査研究成果を現地にて発表しました。現地でケーキの材料になるルバーブの採取、ジャムに加工されるホオズキなどの摘み取りも経験し貴重な体験をしました。

2011 年度は、宮城県小林市とのタイアップで六次産業化が地域振興にどのような効果があるかについて、現地でワークショップやシンポジウムを開催しました。

2012 年度は、横須賀市や立川市とのジョイントで、市政の課題について定量分析を行い、発表する機会を設けました。

2013 年度は、金沢市とのジョイントで「大学ゼミに金沢を研究対象にする」ためのパンフレット作りと、金沢の観光行政への提言書の取りまとめを行いました。

2014 年度は、福生市とのジョイントで外国人向けマップの作成、通行量調査、市報作成などを

行い、そのマップは米兵を中心に訪れる外国の人たちに随分重宝されているようです。

2015年度は、学部ゼミと合同で、立川の魅力アップを図るための戦略情報収集と、データ分析、それをもとにしたワークショップに費やしました。立派な報告書ができました。

<活動内容>

細野ゼミは、理論と実践を旗印に、社会に開かれた調査研究を行います。そのために調査研究に不可欠な、発想力、情報力、分析力、表現力を学ぶことを特色とします。具体的には、都市・地域経済学、統計学、情報処理（SPSS, ArcGIS）などを実際にマスターしてもらいます。具体的アウトプットは、研究室にありますから参考にしてください。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習： 演習B

実施日： 2015年6月21日(日)

実施都市： 東京都立川市

実施施設： 立川駅周辺

実施内容： 立川を魅力的にするための意識調査（来街頻度、来街目的、満足度、利用交通手段、居住地など、立川に必要な施設やサービスなどのニーズ）を駅頭で来街者を対象に行った。

成果： 男女約百名の来街者の意識を対面アンケート方式で収集した。

対象演習： 演習B

実施日： 2015年6月22日(月)

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 八王子駅周辺

実施内容： 立川を魅力的にするための意識調査（来街頻度、来街目的、満足度、利用交通手段、居住地など、立川に必要な施設やサービスなどのニーズ）を、立川以外の主要駅である八王子駅駅頭で来街者を対象に行った。

成果： 男女約百名の来街者の意識を対面アンケート方式で収集した。

対象演習： 演習B

実施日： 2015年6月28日(日)

実施都市： 東京都八王子市

実施施設： 八王子駅多摩センター駅周辺

実施内容： 立川を魅力的にするための意識調査（来街頻度、来街目的、満足度、利用交通手段、居住地など、立川に必要な施設やサービスなどのニーズ）を、立川以外の主要駅である八王子駅、多摩センター駅頭で来街者を対象に行った。

成果： 男女約百名の来街者の意識を対面アンケート方式で収集した。

対象演習： 演習 A・B・C

実 施 日： 2015 年 9 月 1 日(火) ～9 月 3 日(木)

実施都市： 静岡県熱海市

実施施設： ラビスタ伊豆山

実施内容： 意識調査の統計分析と立川市の基礎統計をもとにして、ワークショップの準備作業と問題の摘出を行った。

成 果： ワークショップで発表するパワーポイント原稿と、ワークショップ企画書の作成を行った。

中央大学全学連携教育機構

本報告書に関してお気づきの点等ございましたら、全学連携教育機構事務室（多摩キャンパス 5 号館
ペデ下ー学生部学生相談室上）までお問い合わせください。

<問い合わせ先>

中央大学多摩キャンパス 全学連携教育機構事務室

TEL : 042-674-3663

FAX : 042-674-3666

E-mail : flp@tamajs.chuo-u.ac.jp